岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第4冊

鹿田遺跡 Ⅱ

―医療技術短期大学部校舎新営に伴う発掘調査―

1990年

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター

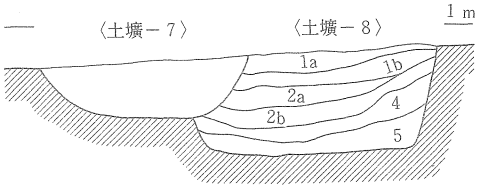
正　誤　表

15頁	図３　Ｆ断面の位置がずれていますので図を貼り直して下さい	
27頁	掲載の表の上にタイトル「**柱・杭観察表**」を貼って下さい	
45頁	図33〈土壙－８〉の断面図で土層番号５がずれていますので 図を貼り直して下さい。	
90頁	６行目	**溝１→溝３**
90頁	７行目	**溝３→溝１**

P. 27

柱・杭観察表

P. 45



第２章　Ⅲ次調査の概要

１．調査区の位置

本調査は既述のように岡山大学医療技術短期大学部新営予定地に対して実施した。調査地区は本学鹿田地区の南東部に位置し，旧脳代謝研究棟と看護婦宿舎，そして構内の南端に建つ特別高圧電気変電所に囲まれた地域である。調査地区内の北半には調査室が収蔵庫として利用していた旧精神科棟が建ち，その南半部は緑地兼駐車場であった。

調査区は校舎の本体部分（ａ地区）を中心に，校舎北西部に取り付き，道路に沿って北に延びる北共同溝部分（ｂ地区）と，校舎南面に取り付き南に延びる南共同溝部分（ｃ地区）の三地区に分けられる。

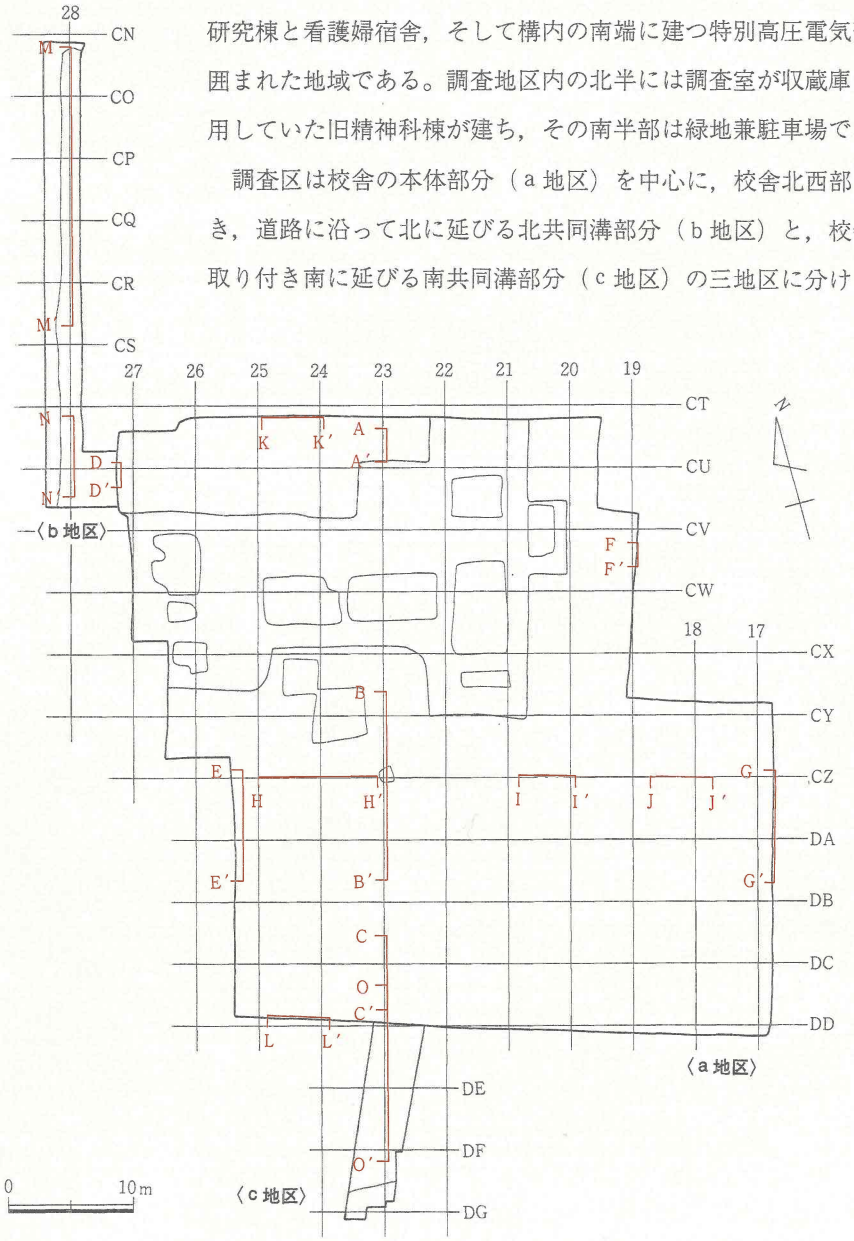


図３　調査地区区割り図　縮尺1/600

序

本報告書は岡山大学埋蔵文化財調査室時代の1986年度・1987年度に実施された岡山大学医療技術短期大学部校舎新営に伴う発掘調査の報告を収めたもので，岡山大学構内遺跡発掘調査報告の第４冊目に当り，最初の津島キャンパスの報告書２冊をうけて発刊された鹿田キャンパスの報告書『鹿田遺跡Ⅰ－医学部附属病院外来診療棟改築およびNMR－CT室新築に伴う発掘調査－』に次ぐものである。

この調査では次の２つのことが注目される。ひとつは古代末から鎌倉時代の集落が検出され，鹿田遺跡の広がりが確認されたことである。建物・井戸・柵列・溝とが，セット関係をなすことが推定される。このような形態は同じ鹿田キャンパスの北部の外来診療棟改築に伴う調査において確認された結果と，規模の点では差異があるにしても，共通するもので，古代末から鎌倉時代の住居様式の一端を窺わせる。

今ひとつは，８世紀から９世紀のものと考えられる河道内で検出された橋脚遺構である。調査範囲が狭く，また，上部構造が明らかになっていないが，県下では，初めての報告となり，意義あるものであろう。また，このことによって古代の遺構が鹿田キャンパスの範囲を越えて，南に向かって広がっている可能性が強く認められた。

本発掘調査は岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会の指導のもとに岡山大学埋蔵文化財調査室が担当して行い，報告書作成の半ばにして岡山大学埋蔵文化財調査研究センターに引き継いだ。御指導・御協力・御理解・御援助を賜りました岡山県古代吉備文化財センター・岡山市教育委員会文化課・岡山大学文学部考古学研究室・岡山大学事務局施設部の各位に厚く御礼申し上げる次第である。

1990年３月20日

岡山大学埋蔵文化財調査研究センター長

髙　重　　進

例　　言

1　本書は岡山大学埋蔵文化財調査室（現埋蔵文化財調査研究センター）が1986年度・1987年度に鹿田地区で実施したⅢ・Ⅳ次調査の発掘調査報告書である。Ⅲ次調査は1986年６月２日～10月31日に実施した医療技術短期大学部校舎新営に伴う発掘調査で，総面積は2390㎡を測り，構内座標CT～CX19～27区,CX～DD16～26区,CN～CU27･28区，DD～DG22･23区に位置する。Ⅳ次調査は1987年11月２日～11月21日に実施した同大学部校舎周辺の配管に伴う発掘調査で総面積30㎡を測り，構内座標 DC～DF25区，DG～DI27･28区に位置する。

2　岡山大学施設設定委員会埋蔵文化財保護対策検討専門委員会の指導のもとに発掘調査から報告書作成までの作業が行われた。委員会・幹事の方々に感謝申し上げる。

委　員　竹内和夫，近藤義郎，稲田孝司，沼野忠之，高橋達郎，藤井俊雄，土生芳人
富永久雄，中山　沃，田邊剛三，小田嶋梧郎，田坂賢二，河野伊一郎，本田和男
岩佐順吉，定兼範明，渡邊　基，外村直彦，小倉義郎

幹　事　谷口　裕，勝俣美治，栗栖俊明，上村保人，星野啓二

3　報告書作成に当たり，石材同定：岡山大学理学部助手　鈴木茂之，木材樹種同定：農林水産省森林総合研究所　能城修一，種子同定：大阪市立大学理学部教授　粉川昭平・東京大学総合研究資料館　松谷暁子，動物遺体同定：奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター松井章，各氏に依頼し，有益な教示と助言を得た。記して深謝の意を表する次第である。

4　遺構の実測は青木進治郎・伊藤真・栄一郎・竹内浩一・八谷隆生・福田真久・大橋かおり（旧姓松岡）・宮原博幸・保田義治・山本悦世・力竹孝典が行い，大橋雅也・絹川一徳（岡山大学大学院文学研究科）の協力を得た。

5　遺物の実測は土器を山本の指導のもとに竹内・八谷が，石器は絹川が，木器は岡崎順子・竹内・八谷・大橋かおり・藤原千鶴が行った。浄写は，土器については執筆者が，石・木製品については藤原が行った。遺物撮影は，大橋が担当した。遺物整理その他に佐々木育子・入倉徳裕・高橋進一・土井基司・安井宣也・若林卓の協力を得た。

6　文章は第２章の３の(1)と第４章１を藤原が，第３章を大橋が，他は山本が執筆した。

7　編集は近藤義郎（元センター長）・髙重　進（現センター長）・稲田孝司（元埋蔵文化財調査室長）・新納泉（現センター室長）の指導のもとに山本が行った。

8　調査・報告書作成においては下記の方々に御援助・教示を頂いた。記して感謝申し上げる。
伊藤晃・千葉喬三・辻誠一郎・中野雅美・乗岡実・春成秀爾・松島義章・光谷拓美・宮本長二郎・山本進一

目　　次

第１章　調査の経過と遺跡の概要

1　遺跡の位置と周辺遺跡の概要…… 1

2　調査に至る経過…… 4

3　調査組織…… 4

4　調査の方法と経過…… 6

(1) 構内座標の設定と地区割り…… 6

(2) 基本層序の設定…… 7

(3) 調査の概略…… 8

(4) 時期設定ほか…… 10

第２章　Ⅲ次調査の概要

1　調査区の位置…… 15

2　層序…… 16

3　遺構・遺物…… 23

(1) 古代…… 24

ａ．河道 …… 24

(2) 古代末～中世…… 32

ａ．掘立柱建物 …… 32

ｂ．柱穴列 …… 34

ｃ．井戸 …… 38

ｄ．土壙 …… 42

ｅ．溝 …… 51

(3) 近世…… 66

ａ．土壙 …… 66

ｂ．溝 …… 73

(4) その他の遺物…… 75

ａ．弥生～中世土器 …… 75

ｂ．土製品 …… 77

ｃ．石製品 …… 79

ｄ．古銭 …… 80

第３章　Ⅳ次調査の概要

1　調査区の位置…… 85

2　層序…… 86

3　遺構・遺物…… 88

ａ．溝…… 89

ｂ．河道…… 90

第４章　まとめ

1　古代の橋脚遺構について…… 95

2　鹿田遺跡における古代末～中世集落について…… 97

附編　自然科学的分析

1　岡山大学構内遺跡から出土した炭化種子と灰像について…… 松谷暁子 103

2　鹿田遺跡（Ⅲ・Ⅳ次調査地点）出土の動物遺体…… 松井　章 107

図　目　次

調査の経過と遺跡の概要

図１　鹿田遺跡周辺主要遺跡分布図……　2

図２　鹿田地区全体図と調査地点……　6-7

Ⅲ次調査の概要

図３　調査地区区割り図……　15

図４　調査区土層断面図（１）……　18

図５　調査区土層断面図（２）……　19

図６　調査区土層断面図（３）……　20

図７　調査区全体図……　23

古　代

図８　河道－１……　24

図９　河道－１断面……　25

図10　河道－１出土遺物（１）……　26

図11　河道－１出土遺物（２）……　28

図12　河道－１出土遺物（３）……　29

図13　河道－１出土遺物（４）……　30

図14　河道－１出土遺物（５）……　31

古代末～中世

図15　掘立柱建物－１……　32

図16　掘立柱建物－２……　33

図17　掘立柱建物－３……　34

図18　柱穴列－１……　34

図19　柱穴列－２……　35

図20　柱穴列－３，出土遺物……　36

図21　柱穴列－４……　37

図22　柱穴列－５・６，出土遺物……　37

図23　井戸－１……　38

図24　井戸－１出土遺物……　39

図25　井戸－２……　40

図26　井戸－２出土遺物……　41

図27　土壙－１……　42

図28　土壙－３……　43

図29　土壙－４……　43

図30　土壙－５……　43

図31　土壙－６……　44

図32　土壙－７出土遺物……　44

図33　土壙－７・８……　45

図34　土壙－８出土遺物……　46

図35　土壙－９……　46

図36　土壙－10……　47

図37　土壙－11……　47

図38　土壙－12……　47

図39　土壙－13……　48

図40　土壙－13出土遺物……　48

図41　土壙－14，出土遺物……　49

図42　土壙－22……　49

図43　土壙－23……　50

図44　土壙－24，出土遺物……　50

図45　ａ地区溝全体図・断面位置図……　51

図46　溝－１……　52

図47　溝－２……　52

図48　溝－３……　53

図49　溝－４……　53

図50　溝－５……　54

図51　溝－５出土遺物……　54

図52　溝－６……　55

図53　溝－７……　56

図54　溝－７出土遺物（１）……　57

図55　溝－７出土遺物（２）……　58

図56　溝－８……　59

図57　溝－８出土遺物…… 60
図58　溝－９…… 60
図59　溝－10…… 61
図60　溝－11，出土遺物…… 61
図61　溝－12…… 62
図62　溝－13…… 62
図63　ｂ地区溝全体図・断面位置図…… 63
図64　溝－21…… 63
図65　溝－22…… 63
図66　溝－23…… 64
図67　溝－24…… 64
図68　溝－25…… 65
図69　溝－26…… 65
図70　溝－27…… 65

近　世

図71　土壙－15…… 66
図72　土壙－16…… 67
図73　土壙－17，出土遺物…… 68
図74　土壙－18，出土遺物…… 69
図75　土壙－19，出土遺物…… 70
図76　土壙－20…… 71
図77　土壙－21，出土遺物…… 72
図78　土壙－25…… 72
図79　溝－15・16…… 73
図80　溝－17～19…… 73
図81　溝－28・29…… 74

その他の遺物

図82　出土遺物（１）〈土器〉…… 75
図83　出土遺物（２）〈土器〉…… 77
図84　出土遺物（３）〈土製品〉…… 78
図85　出土遺物（４）〈石製品〉…… 79
図86　出土遺物（５）〈古銭〉…… 80

Ⅳ次調査の概要

図87　調査区の位置・区割り図…… 85
図88　土層断面図…… 87
図89　ｂ地区遺構全体図…… 88
図90　溝－１・２・３…… 89
図91　溝－１～３出土遺物…… 89
図92　河道－Ｃ出土遺物（１）…… 91
〈土器〉
図93　河道－Ｃ出土遺物（２）…… 92
〈土器・石製品〉
図94　河道－Ｃ出土遺物（３）…… 93
〈土製品〉
図95　河道－Ｃ出土遺物（４）…… 94
〈骨角器〉

表　目　次

表１　掘立柱建物一覧表…… 82
表２　柱穴列一覧表…… 82
表３　井戸一覧表…… 82
表４　土壙一覧表…… 82・83
表５　溝状遺構一覧表…… 83

図版目次

図版１　層序（Ⅲ次調査）
　１　南北断面〈CT-CU区〉
　　（西から）
　２　南北断面〈CZ-DA区〉
　　（西から）
図版２　層序（Ⅲ次調査）
　１　南北断面〈DC-DD区〉
　　（西から）
　２　東西断面〈DF線〉
　　（北から）
図版３　河道－１（Ⅲ次調査）
　１　杭出土状況（南から）
　２　土層断面（南から）
図版４　河道－１（Ⅲ次調査）
　出土遺物〈土器・土製品〉
図版５　河道－１（Ⅲ次調査）
　出土遺物〈木製品〉
図版６　井戸－１（Ⅲ次調査）
　１　完掘状況（西から）
　２　土層断面（西から）
図版７　井戸－１（Ⅲ次調査）
　１　遺物出土状況（西から）
　２　出土遺物
図版８　井戸－２（Ⅲ次調査）
　１　完掘状況（西から）
　２　土層断面（西から）
図版９　井戸－２（Ⅲ次調査）
　１　遺物出土状況（西から）
　２　出土遺物
図版10　土壙－７・８（Ⅲ次調査）
　１　完掘状況（北から）
　２　土層断面（東から）
　３　出土遺物
図版11　土壙－13（Ⅲ次調査）
　１　完掘状況（南から）
　２　土層断面（南から）
　３　出土遺物
図版12　土壙－18（Ⅲ次調査）
　１　完掘状況（北から）
　２　土層断面（北から）
　３　出土遺物
図版13　土壙－20・21（Ⅲ次調査）
　１　土壙－20 完掘状況（南から）
　２　土壙－20 土層断面（南から）
　３　土壙－21 完掘状況（南から）
図版14　溝－７（Ⅲ次調査）
　１　土層断面（南から）
　２　遺物出土状況（東から）
　３　出土遺物
図版15　溝－５・６・８・12（Ⅲ次調査）
　１　溝－８ 完掘状況（南から）
　２　溝－８ Ｂ断面（東から）
　３　溝－８ 出土遺物
　４　溝－６ 完掘状況（南から）
　５　溝－12 Ｂ断面（南から）
　６　溝－５ Ｃ断面（東から）
図版16　包含層（Ⅲ次調査）
　出土遺物

図版17　包含層（Ⅲ次調査）
出土遺物〈土製品・石製品・古銭〉
図版18　層序（Ⅳ次調査）
1　a地区B断面（東から）
2　a地区A断面（東から）
3　b地区C断面北端部分（西から）
図版19　溝－1・2・3（Ⅳ次調査）
1　溝－1断面（西から）
2　溝－1～3出土遺物
図版20　河道－C（Ⅳ次調査）
1　土層断面・鹿角出土状況（西から）
2　土層断面〈拡大〉（西から）
図版21　河道－C（Ⅳ次調査）
出土遺物〈土器〉
図版22　河道－C（Ⅳ次調査）
出土遺物〈石製品・土製品〉
図版23　河道－C（Ⅳ次調査）
出土遺物〈骨角器〉

第１章　調査の経過と遺跡の概要

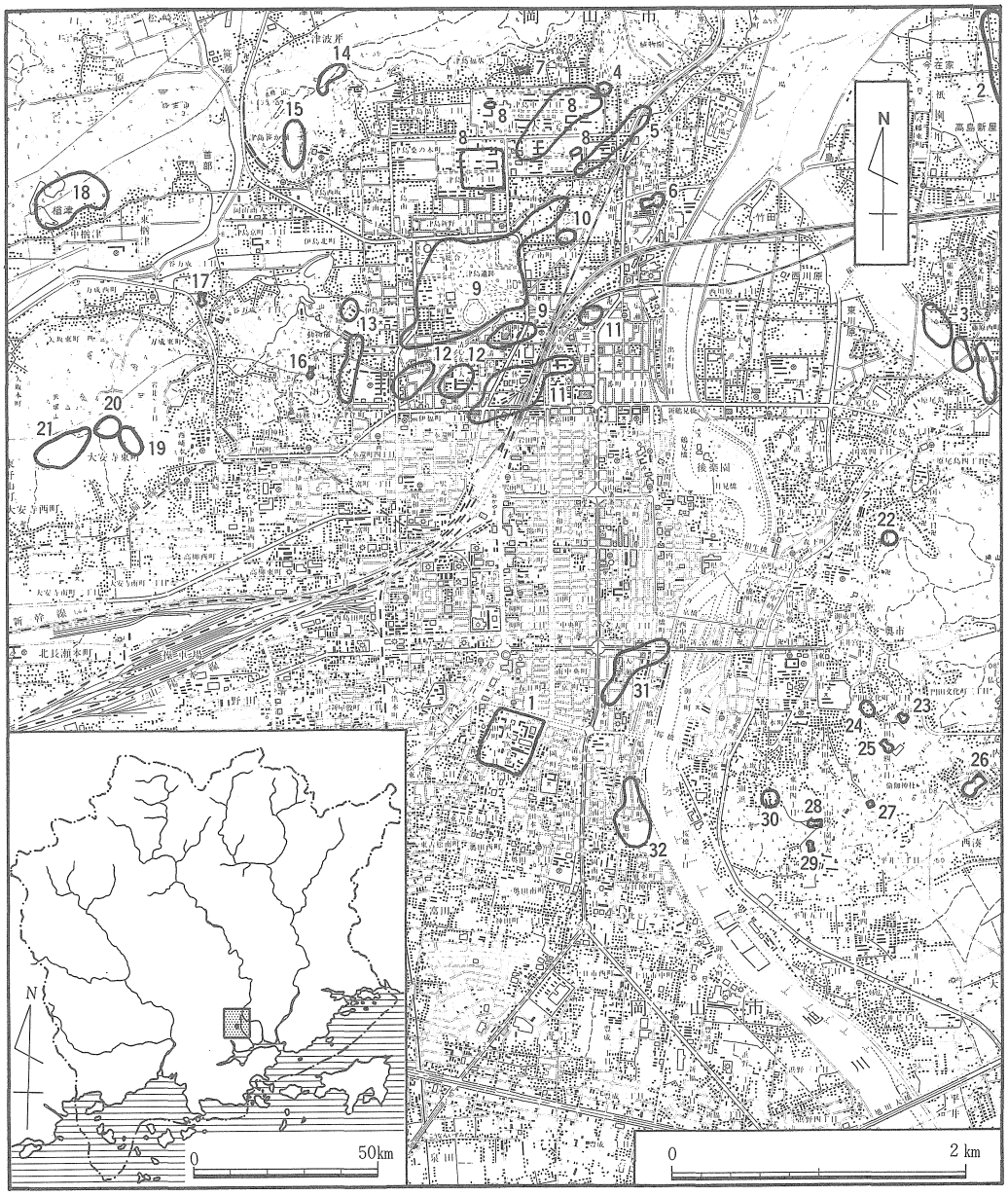
１．遺跡の位置と周辺遺跡の概要

鹿田遺跡は，岡山市鹿田町２丁目５番１号に所在し，岡山大学鹿田地区内のほぼ全域にわたって広がっていると推定されている。本地区は岡山市旧市街地の南部，岡山平野を南流する旭川西岸の沖積地に位置しており，旭川を挟んだ東約２㎞には操山山塊が，北約５㎞には半田山山塊が広がっている。本遺跡が立地する岡山平野の形成は，約6000年前の縄文海進以後，急速に進んだものとみられ，平野内には旭川の旧河道が数条に分かれて流走し，それに伴ういくつもの自然堤防などの微高地の存在が各所で認められている。本遺跡も基本的には標高１～２ｍ前後の微高地上に立地しているものとみられる。

本遺跡周辺の遺跡について概観すると，現在のところ，旧石器時代の遺跡としては，操山山塊に立地するナイフ形石器が採集された操山218号遺跡(註１)・細石器が採集された操山217号遺跡(註２)があげられ，該期には，現在の岡山平野の背後に控える操山山塊などの小山塊・丘陵部を中心に生活が営まれていたことが窺われる。

縄文時代においては，本遺跡周辺では，中期以降に沖積部に遺跡の存在が確認される。旭川東岸では後・晩期の遺構や中期末～晩期の土器が確認されている百間川遺跡群(註３)，晩期土器を出土した雄町遺跡(註４)などがある。旭川西岸では，半田山山塊の東南端の丘陵部から沖積部に，後期に属する朝寝鼻貝塚(註５)，また，半田山の裾に広がる沖積部には，晩期土器を出土した津島遺跡(註６)，そして，近年の発掘調査では，多量の後・晩期の遺物に加え貯蔵穴群・柱穴状遺構群（炉を含む）などを検出した岡山大学津島地区遺跡群(註７)，遺構・遺物を検出した津島江道遺跡がある。津島遺跡から直線距離で約３㎞南に位置する本遺跡においても，1983～84年度に実施した発掘調査の際に，僅かではあるが，中期・晩期土器が検出されている(註８)。これらの土器は小片であるが，摩滅の程度は低く，比較的近辺に該期の遺跡が存在するものと推定される。以上のことから，岡山平野においては縄文時代中期頃から沖積部へ人間の進出が認められ始め，後・晩期になると広範囲に定住が進むことが想定される。本遺跡周辺においても，縄文時代中期以降には既に一部に生活可能な微高地が形成され，縄文人の活動が展開された可能性が窺われるのである。

弥生時代に入ると，旭川東岸の百間川遺跡群(註９)・西岸の津島遺跡・南方遺跡(註10)・上伊福遺跡(註11)・天瀬遺跡(註12)などの集落が平野部に展開していく。本遺跡は東北１㎞に位置する天瀬遺跡とともに，現在のところ狭義の岡山平野最南の弥生集落となっている。1983～84年度の調査では，中期後半以降の遺構・遺物が豊富に検出されている(註８)。天瀬遺跡もほぼ類似した様相を呈するとみられ，岡山平野南部への定住的な集落の進出は，北部に比べて相対的に遅れ，中期以降のことと考え



1．鹿田遺跡（弥生中期～近世）　2．備前国庁跡（古代～中世）　3．百間川原尾島遺跡（弥生～近世）　4．朝寝鼻貝塚（縄文後期）　5．津島江道遺跡（縄文晩期～中世）　6．神宮寺山古墳　7．お塚様古墳　8．岡山大学津島地区遺跡群（縄文後・晩期～近世）　9．津島遺跡（縄文晩期～中世）　10．中溝遺跡（弥生中期～近世）　11．南方遺跡（弥生・古墳）　12．上伊福遺跡（弥生・古墳他）　13．上伊福西遺跡（弥生後期他）　14．都月坂墳墓群　15．七つ坑古墳群　16．津倉古墳　17．青陵古墳　18．中楯津古墳群　19．正野田古墳群　20．矢坂山東古墳群　21．矢坂山西古墳群　22．操山４号墳　23．操山103号墳　24．操山217号墳（旧石器）　25．操山106号墳　26．湊茶臼山古墳　27．操山111号墳　28．網浜茶臼山古墳　29．操山109号墳　30．網浜廃寺（白鳳～平安）　31．天瀬遺跡（弥生中・後期）　32．二日市遺跡（弥生～近世）

図１　鹿田遺跡周辺主要遺跡分布図　縮尺1/50000

られる。これらの平野部の集落は，本遺跡にみられるように，一般的に中期以降にその分布と規模を拡大し，古墳時代初頭まで継続するものが多く認められる。また，近年では弥生時代前期以降の水田址が百間川遺跡群[註9]・中溝遺跡・南方釜田遺跡・津島江道遺跡・岡山大学津島地区遺跡群[註7]で発見されている。

一方，弥生後期末以降，半田山山塊には，都月坂墳墓群，七つ坎古墳群[註13]などの弥生時代墳丘墓・前方後円（方）墳が展開し，また，操山山塊には，網浜茶臼山古墳・湊茶臼山古墳などの古墳時代前期の前方後円墳や円墳，古墳時代後期の円墳や方墳などが群在している。

このような古墳群の展開から，岡山平野においては，該期において一層の社会的基盤の発達があったことが窺われる。しかし，その具体的な様相は，本遺跡や津島遺跡あるいは百間川遺跡群などで，該期の竪穴住居などが確認されているが，現在のところ必ずしも明らかでない。

古代については，百間川遺跡群[註9]（原尾島・米田遺跡）・津島江道遺跡などで，掘立柱建物・井戸・溝などの遺構を伴う集落址が確認されている。本遺跡においても，掘立柱建物群と井戸や木簡等を含む遺物が検出されており，注目される遺跡である。また，備前国府は，旭川東岸の操山山塊と龍の口山塊との間の平野部に推定され，周辺部には条里地割が比較的良好に残存している。こうした条里制施行に関連するとみられる遺構は，岡山大学津島地区遺跡群[註14]において坪境に相当する平安前期の溝が検出されており，旭川西岸でも，条里制の施行は，主に岡山平野北部を中心に，古く遡るものと推定される。

また，古代から中世にかけては，岡山平野南部は荘園地帯をなしており，藤原氏の殿下渡領であった鹿田庄や春日神社の社領であった荒野庄などの存在が知られている[註15]。特に，鹿田地区周辺は，鹿田庄の有力な比定地となっている。本遺跡においては，８世紀後半～９世紀，そして，11世紀～14世紀に属する多数の井戸・溝や多量の遺物が検出され[註8]，大規模な集落の存在が想定されており，記録上その成立が奈良時代に遡る鹿田庄との関係を考える上で注目される。また，旭川東岸では建物群などが検出された百間川遺跡群[註9]（米田遺跡）などがある。

近世以降，岡山平野南部地域は，干拓を中心とした大規模開発が進められる。その中で，本遺跡の東１kmに存在する二日市遺跡[註16]においては，寛永通宝鋳造関係遺構が検出され，銭座跡に比定されている。鹿田遺跡およびその周辺地域も，基本的に水田化され，水田地帯を形成していたものとみられる。本遺跡においては，1921年（大正10年）に岡山大学医学部および同附属病院の前身である岡山医学専門学校および岡山県立病院が建設され，また，周辺地域も漸次市街地化し，現在に至っている[註17]。

2．調査に至る経過

岡山大学に新たに医療技術短期大学部が新設にされるのに伴い，鹿田地区構内南東部に校舎が新営されることが決定した。

ところで，鹿田地区構内においては，従来より，岡山市教育委員会および岡山県教育委員会によって主として中世の遺構・遺物の存在が確認されており，1982年４月には鹿田地区内に埋蔵文化財包蔵地が存在することが，岡山市教育委員会から本学に対して通知されている。また，近年では，岡山大学埋蔵文化財調査室が，その設立後，1983年度から1984年度にかけて医学部附属病院外来診療棟改築予定地並びにNMR－CT室新営予定地の発掘調査を行ない，弥生時代中期から中・近世にかけての貴重な遺構・遺物が多量に検出されている。(註８)

こうした中で，医療技術短期大学部の校舎新営予定地は，前述の1982年の通知にある埋蔵文化財包蔵地の範囲からは僅かにはずれており，調査室による確認調査も行われていない，いわば，手つかずの状態であったため，1986年３月に岡山大学埋蔵文化財調査室が試掘調査を行った。試掘調査では校舎建設予定地域内３ヶ所に試掘坑をいれた。その結果，全域に中世の包含層が確認され，一部には古代に遡る可能性のある包含層の存在が推定されたため，本予定地全域に対して発掘調査を実施することが必要となった。

校舎新営工事は，1986年度に校舎部分と校舎から北および南に各々延びる共同溝部分とを行い，校舎完成後，1987年度に周囲の外溝工事が予定された。それに伴い，調査も1986年度と1987年度にわたり，1986年度にⅢ次調査として本体工事部分（a地区）と共同溝部分（b・c地区），1987年度にⅣ次調査として一部の外溝部分（a・b地区）の発掘調査を行った。後者については，当初，その掘削規模が全般的に狭小であることから，全て立会調査で納める方向で進んでいたが，設計図面の検討時に，配管の埋設が並列すること等から一部に掘削範囲・掘削深度が予想以上に大きい部分が確認された。特に，Ⅲ次調査で検出されていた南共同溝部分の河道施設関連遺構の破壊が予想されたため，設計変更を申し入れ，遺跡破壊を最小限に抑えた上で，回避不可能な部分に関しては発掘調査を実施した。

3．調　査　組　織

埋蔵文化財保護対策検討委員会

委員長　定兼　範明（教養部教授）

委　員　竹内　和夫（文学部教授）　　田邊　剛三（医学部教授）［1987年度］

近藤　義郎（文学部教授）　　小田嶋梧郎（歯学部教授）

	稲田　孝司（文学部助教授）		田坂　賢二（薬学部教授）	
	沼野　忠之（教育学部教授）	[1986年度]	河野伊一郎（工学部教授）	
	高橋　達郎（　〃　）	[1987年度]	本田　和男（　〃　）	[1987年度]
	藤井　俊雄（法学部教授）		岩佐　順吉（農学部教授）	
	土生　芳人（経済学部教授）		渡邊　基（教養部教授）	[1986年度]
	富永　久雄（理学部教授）		外村　直彦（　〃　）	[1987年度]
	中山　沃（医学部教授）	[1986年度]	小倉　義郎（医学部附属病院長）	
幹　事	谷口　裕（庶務部長）		勝俣　美治（経理部長）	
	栗栖　俊明（施設部長）	[1986年度]	星野　啓二（学生部次長）	
	上村　保人（　〃　）	[1987年度]		

調査主体	岡山大学学長	大藤　眞	
調査総括	埋蔵文化財調査室室長	稲田　孝司	
調査主任	埋蔵文化財調査室助手	山本　悦世	
＜Ⅲ次調査＞			
調　査　員	埋蔵文化財調査室助手	栄　一郎	1986年 6 ～10月
	〃　〃	石坂　俊郎	1986年10月
	〃　技術補佐員	大橋かおり（旧姓松岡）	1986年 6 ～11月
	〃　〃	保田　義治	1986年 6 ～10月
調査補助員	岡山大学経済学部学生	青木進治郎	
	〃　〃	伊藤　真	
	〃　〃	八谷　隆生	
	〃　〃	宮原　博幸	
	〃　〃	力竹　孝典	
調査協力者	〃　大学院文学研究科	大橋　雅也	
	〃　〃	絹川　一徳	
＜Ⅳ次調査＞			
調　査　員	埋蔵文化財調査室技術補佐員	大橋かおり	
調査補助員	岡山大学法学部学生	竹内　浩一　・　中塚　孝信	
	〃　経済学部学生	八谷　隆生　・　福田　真久	
	〃　〃	前原　伸也	

4．調査の方法と経過

（1）構内座標の設定と地区割り

岡山大学鹿田地区は岡山市の旧市街地南部に位置し，現在，本地区周辺には，市中央部において認められる正方位の条里地割りとは異なり，その南北軸を若干東に振った地割りが残存している。そこで，本地区では周辺の地割りに合わせた構内座標を設定した。すなわち，国土地理院第５座標系の南北軸座標値（Ｘ＝－149,800ｍ）と東西軸座標値（Ｙ＝－37,400ｍ）を原点とし，南北軸を座標真北から15°東へ振った構内座標を設定した。原点は本学鹿田地区構内の東北端から約18ｍ東北の地点にある（図２）。

調査においては，この構内座標に基づいて一辺５ｍの正方形の区画を設定した。すなわち，原点を通る東西線をＡＡ線とし，それより南へ５ｍごとの東西線をＡＢ線，ＡＣ線というように，また，原点を通る南北線を00線とし，西へ５ｍごとの南北線を01線，02線というようにそれぞれ呼び，両方向の線によって区切られる一辺５ｍの正方形の区画を調査区区割りの単位とする。５ｍ区画単位は，その東北角で交わる二方向の線名を組み合わせて，ＡＡ00区のごとく呼称する。

また，鹿田地区構内においては，構内のほぼ全域が鹿田遺跡に指定されており，調査ごとに別の遺跡名をつけると混乱を招く恐れがあること・構内座標による地区名の表示では非常に煩雑になること・現実的に発掘調査は建物の建設に伴って実施されていることなどから，発掘調査については，以後，調査実施順に通し番号を付けて「Ⅰ次調査」・「Ⅱ次調査」のごとく表記し，調査地点については「Ⅰ次調査地点」・「Ⅱ次調査地点」という形で示すものとする。そして，さらに，その中で，細分が必要な場合には「地区」を設定し，ａ・ｂを付けて「ａ地区」・「ｂ地区」のごとく表すこととする。また，上述の構内座標による地区割りは，基本的な最小単位の「区」として使用する。

従来の調査についてみると，構内で最初の発掘調査となった医学部附属病院外来診療棟改築予定地の調査がⅠ次調査に，続いて，Ⅱ次調査はNMR－CT室新営予定地の発掘調査にそれぞれ対応する[(註18)]。そして，今回の発掘調査はⅢ次調査およびⅣ次調査となり，Ⅲ次調査地点・Ⅳ次調査地点として報告する。

Ⅲ・Ⅳ次調査地点内での細分については後述する（３）**調査の概略**の項に譲りたい。

図２　鹿田地区全体図と調査地点　縮尺1/2500

（２）基本層序の設定

鹿田遺跡ではⅠ次調査地点（ＡＵ～ＢＤ28～40区），並びにⅡ次調査地点（ＢＧ・ＢＨ19～21区）の発掘調査結果を中心に基本層序を設定している[註8]。鹿田遺跡の中で，各地点の相互関係を捉えるために，大枠として，この基本層序に追従し，その上で，各調査地点内での細分を行うこととする。また，調査地点の増加に伴って基本層序自体の修正・細分も進めて行きたい。

今回のⅢ次調査においては，従来，古代～中世堆積層として一括されていたⅢ層を，大きく近世・中世・古代の三時期に細分することができた（Ⅲa～Ⅲc層）。

現時点での鹿田遺跡での基本層序は以下のようになる。

Ⅰ層：造成土。現地表の標高は2.0ｍ～2.8ｍ前後で，Ⅰ層の層厚は一般に１ｍ前後を測る。

Ⅱ層：灰色土。造成直前までの近代の水田土壌の累層。一般に水分を多く含む軟質の土壌で，乾燥すると淡灰色を呈する。鹿田地区全域に存在する。

Ⅲ層：茶褐色～黄褐色系の色調を呈する粘質土もしくは微砂土。Ⅲa層は近世の堆積土を，Ⅲb層は中世の堆積層を，Ⅲc層は古代に中心をおく堆積層を各々一括したもの。旧地形の高位部には存在しない。

Ⅳ層：灰茶色系の色調の粘質土もしくは微砂土。古墳時代後期以前で古墳時代初頭より新しい堆積層を一括したもの。包含遺物は乏しく，堆積時期・範囲はやや不明瞭である。

Ⅴ層：暗褐色または灰褐色系の色調を呈する砂質土層。弥生時代中期後半から古墳時代初頭の遺物包含層を一括したもの。鹿田地区北半部を中心に存在する。

Ⅵ層：Ⅴ層より下位の，現在まで遺物未検出の堆積層を一括したもの。黄褐色砂質土・暗灰色粘質土・粘土・青灰色砂層と続く。

ここで，これまでの調査結果を踏まえて，鹿田地区内の各層のあり方を簡単に述べたい。

鹿田遺跡において最古の遺構が認められているⅤ層（弥生時代中期～古墳時代初頭の微高地）は，今回の構内南半部に位置するⅢ次調査においてもその存在は確認されず，従来通り，Ⅰ・Ⅱ次調査地点を中心とする限定された地域に形成されていたものと考えられる[註19]。Ⅳ層についてはその性格などに不明確な部分が多いが，Ⅴ層が形成する微高地の縁辺部に厚く堆積する傾向が認められる。本調査地点においても確認されていない[註20]。Ⅲ層は高位部では後世の削平の影響で認められないが，本来は鹿田地区全域に存在したものと判断され，近・中世に属するⅢa・b層は本調査地点においても安定した広がりが認められる。古代に属するⅢc層は本調査地点では河道内埋土として確認されており，その残存範囲は限定されたものであった可能性が考えられる。ただし，本調査地点では，Ⅲc層にあてている河道内埋土は，大半は古代に属する

と考えられるが，その上部は古代末～中世初頭を含む。古代と中世の境界は大変不明瞭であるため，ここでは便宜的に一括して扱っている。

（３）調査の概略

Ⅲ次調査地点は工事の関係から，ａ地区（校舎工事部分）・ｂ地区（北共同溝部分）・ｃ地区（南共同溝部分）とに，また，Ⅳ次調査地点ではａ地区（北部分）・ｂ地区（南部分）とに各々分けられる。

Ⅲ次調査の調査面積はａ地区で2180㎡，ｂ地区で164㎡，ｃ地区で46㎡を測り，合計2390㎡である。調査期間はａ地区が1986年６月２日～10月31日，ａ地区終了とともに，引き続いて，同年11月１日～11月29日にｂ・ｃ地区の調査を行った。調査員はａ地区で４名が常勤し，ｂ・ｃ地区では各１名ずつで合計２名が担当した。

Ⅳ次調査の調査面積はａ地区で14㎡，ｂ地区で16㎡を測り，合計30㎡である。調査期間は1987年11月２日～21日で，調査員は１名が調査に当たった。

＜Ⅲ次調査＞

ａ地区（ＣＴ～ＣＸ19～27・ＣＸ～ＤＤ16～26区）

本地区北半部には本調査室の遺物収蔵庫としても利用していた旧精神科棟が建っていた。そのため，その建物の基礎撤去後に調査を開始した。当初，基礎下についても調査を実施する予定であった。しかし，発掘調査開始後，基礎工事時の掘削深度が標高0.25ｍまで達し，破壊がⅥ層中深くまで及んでいることや多量の松杭（長さ３～４ｍ，径20㎝前後）が密集して打ち込まれていることなどから，遺構が残存する可能性がきわめて低いことが判明した。その上，基礎の構造が予想以上に堅牢であることから，本格的な調査は不可能であると判断し，一部に深掘りを行って下層部の状況確認をするにとどめた。その面積は約400㎡である。

調査は機械により造成土（Ⅰ層）を除去し，Ⅱ層以下は手掘りで調査を実施した。Ⅱ層は近代の水田土壌である。Ⅱ層除去後，Ⅲ層については分層が可能であることから細分した層ごとに掘り下げ，調査を行った。

Ⅲａ層上面ではＤＢ線周辺において，南へ向かう落ちが検出された。このライン以南については表面の凹凸が激しく，湿地的様相が認められた。また，Ⅲａ層では，僅かに北半部において近世に属する溝が１条検出された。Ⅲｂ層上面では近・中世に属する土壙・溝が，下半では古代末～中世に属する掘立柱建物群・柱穴列・井戸・土壙・溝などの遺構多数が検出された。遺構は北半部に集中する傾向が認められる。Ⅲｂ層除去後，ＣＺ線辺りから以南には，東西に

主方向を有す大規模な河道の存在が認められた。その上層部では，自然流路の可能性が高い溝がＤＢ～ＤＣ線間および河道の肩部に当たるＣＺ線辺りに蛇行して検出された。いずれも古代末～中世初頭に属する。Ⅳ・Ⅴ層は確認されていない。

調査は全域を標高0.8ｍまで下げて行い，四方の側溝部分および23線・ＣＺ線に沿って標高約０ｍまでの載ち割りを行い，土層を記録した上で調査を終了した。

ｂ地区（ＣＮ～ＣＵ27・28区）

本調査区はａ地区の西から北へ延びる調査区で，28線以西についてはその大半が既設の共同溝による深い攪乱が標高－0.1ｍ前後の深さまで及んでおり，調査は不可能であった。また，調査区の北端部（ＣＭ27・28区）においても，大規模な攪乱が存在したため，調査区外とした。

調査はその区域が非常に幅狭いものであったことから，周囲全域に矢板を打った上で，実施した。

まず，造成土（Ⅰ層）および西半の攪乱部を機械で掘削した後，Ⅱ層以下を手掘りで下げた。調査方法はａ地区と同様である。Ⅱ層除去後，Ⅲａ層中からは近世に属する土壙・溝が，Ⅲｂ層からは中世に属する井戸・土壙・溝・柱穴等が検出された。遺構はＣＲ線以南に集中する傾向が認められる。Ⅳ・Ⅴ層は確認できなかった。調査は標高0.4～0.5ｍ（一部で標高５㎝）まで下げて行い，28線に沿って土層断面を記録して終了した。

ｃ地区（ＤＤ～ＤＧ22・23区）

本調査区はａ地区のほぼ中央部から南に延びる調査区で，南端部分には本調査区に接する特別高気圧変電室設営時の工事による大規模な攪乱が存在する。やはり，全域に矢板を打ち，調査を行った。

調査方法はａ地区と同様で，Ⅰ層を機械で除去した後，Ⅱ層以下を手掘りで下げ，Ⅲ層については細分される土層にそって調査を行った。遺構は非常に希薄で，Ⅲｂ層中からは全体的に不明瞭な柱穴が検出されたのみである。Ⅲｂ層除去後，Ⅲｃ層は大規模な河道内埋土となり，下層から杭列が検出された。粘土と砂の互層の中に大小の木杭が約160本出土した。その中には，橋脚遺構も含まれている。時期は河道底から出土する須恵器から古代（８世紀後半～９世紀）と考えられる。

調査は23線の土層断面を記録して，全域を標高－0.4ｍ前後まで掘り下げ終了した。

ｃ地区で検出した杭列の北限を確認するため，調査終了後のａ地区ＤＣ22・23区を，再度，杭検出レベル以下にまで掘り下げたが，杭の痕跡は認められなかった。

＜Ⅳ次調査＞

a地区（ＤＣ～ＤＦ25区）

a地区は11月２日から調査を開始した。Ⅰ層を機械で掘削し，Ⅱ層以下は手掘りで下げた。調査方法はa地区と同様である。中世土器を僅かに含むⅢ層の広がりは認められたが，河道内と考えられ，遺構は確認されなかった。全体を標高０ｍ前後まで下げた後，西壁断面を記録して，11月17日に終了した。

b地区（ＤＧ～ＤＩ27・28区）

b地区は11月４日から調査を開始した。a地区と同様に，Ⅰ層は機械で除去し，Ⅱ層以下は手掘りで下げた。Ⅲ層中より柱穴状遺構２基を検出し，Ⅲb層除去後，古代に属する溝３条およびその下部に，大規模な河道を確認した。この河道はⅢ次調査c地区で検出された河道の南側の肩部に対応し，また，Ⅲ次調査a地区の河道に対応する可能性が強い。調査区全体は標高０ｍ前後まで掘り下げ，遺構・遺物が検出された中央部に限っては，標高－0.4ｍまで掘り下げて調査を実施した。以下については，遺物の出土が認められたが，狭小な調査区に加え湧水・壁の崩落などが進み調査不可能な状態に至ったため，工事による遺跡破壊が全く及ばない深さであったことから，保存の形をとり東壁・西壁の断面を記録して，11月21日に調査を終了した。

（４）時期設定ほか

時期設定

古代：８世紀～11世紀前半

中世：11世紀後半～16世紀前半

岡山県南において中世土器の指標となる土師質高台付椀（いわゆる「早島式土器」）の存在が少なくとも11世紀後半まで遡る可能性が高いこと，土師質高台付椀の出現が一つの画期として捉えられると判断されることから，政治面から見た歴史的区分とは食い違うが，ここでは便宜的に，古代（平安時代）末に含まれる部分を一連の中世の流れの中で取り扱いたい。

近世：16世紀後半～19世紀中頃（明治時代以前）

本文中において，時期的により細分が可能で，実年代の明白なものについてはそれを明記した。

報告書内での文章・図・表の表記方法ほか

1　調査の概要は『岡山大学構内調査研究年報』４・５　1987・1988　において，既に，一部を報告しているが，本報告と相違がある場合は本報告をもって訂正したものとする。

2　遺物番号は，土器については遺構別に，その他の遺物については次の略号を付けて通し番号とした。土製品：Ｐ，石製品：Ｓ，木製品：Ｗ，金属器：Ｍ，骨角器：Ｂである。

3　観察表は，本文中に入れ，遺物については実測図とセットとし，遺構については章の最後に掲載している。

4　遺物観察表で胎土の表記は，微砂：径0.5㎜以下，細砂：径0.5㎜～１㎜，粗砂：径１～２㎜，細礫：径２㎜以上の基準で示している。

また，遺物の法量の欄では，残存部分が1/2以下のものについては（　）を付けている。

遺構観察表は基本的には次のような基準で表記している。

（　）：復元値あるいは復元形，〔　〕：残存値

＜包含物の量＞　◎：過多，○：多，△：少，×：過少

遺構・遺物番号は本文中の番号と一致する。

5　図・図版の縮尺は原則として下記のようになっている。

＜図＞　遺構：掘立柱建物　1/80，井戸・土壙・溝　1/30

遺物：土器・木製品　1/4，土製品・石製品・骨角器　1/3

＜図版＞遺物：土器・木製品 約1/3，土製品・石製品 約1/2

例外のものについては，各々についてその縮尺値を明記している。

6　本報告書で用いる高度値は標高であり，方位は真北を示す。

7　遺構名は文章・図中で掘立柱建物：建物・Ｂ，柱穴列：Ａ，井戸：Ｅ，土壙：Ｋ，溝：Ｄと略号化して使用した部分がある。

8　本調査区内の全体的な土層番号は，各遺構の説明中においては，遺構内埋土の土層番号と区別するために，〈　〉を付けている。

9　本報告書に掲載した地形図でＳ＝1/50000のものは建設省国土地理院発行の岡山北部と南部の図を合成したものである。

註

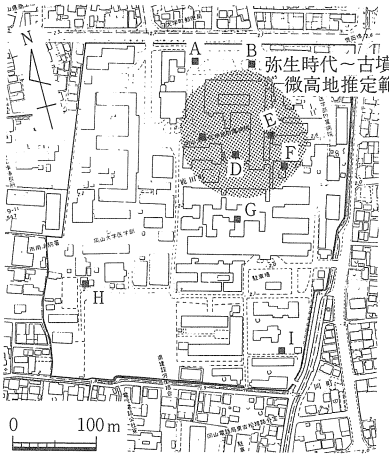
1　鎌木義昌「第１編　原始時代」『岡山市史（古代編）』1962　14～15頁
2　註１文献　16～17頁
3　岡山県教育委員会「百間川沢田遺跡２　百間川長谷遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59　1985
4　岡山県教育委員会「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1972
5　註１文献　33頁
　鎌木義昌・亀田修一「朝寝鼻貝塚」『岡山県史　第18巻　考古資料』1986　41頁
6　津島遺跡調査団『昭和44年岡山県津島遺跡調査概報』1969
　岡山県教育委員会『岡山県津島遺跡調査概報』1970
7　岡山大学埋蔵文化財調査室「岡山大学津島地区遺跡群の調査」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第２冊　1986
　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『岡山大学構内遺跡調査研究年報』５・６　1988　1989
8　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第３冊　1988
9　岡山県教育委員会「旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査」Ⅰ～Ⅶ『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39・46・51・52・56・59・74　1980～1989
10　岡山市遺跡調査団「南方（国立病院）遺跡発掘調査報告」1981
　岡山県教育委員会「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40　1981
11　岡山県教育委員会「上伊福遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』14　1984
12　出宮徳尚「天瀬遺跡」『岡山県史　第18巻　考古資料』1986　116頁
13　七つ坑古墳群発掘調査団「岡山市七つ坑古墳群」1987
14　岡山大学埋蔵文化財調査室「岡山大学津島北地区小橋法目黒遺跡（ＡＷ14区）の発掘調査」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第１集　1985
　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター『岡山大学構内遺跡調査研究年報』５・６　1988　1989
15　藤井　駿「備前国鹿田庄について」魚澄惣五郎編『瀬戸内海地域の社会史的研究』1952
16　出宮徳尚「岡山県二日市遺跡」『日本考古学年報』35　1985　248～251頁
17　本節は『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第３冊　1988　の「第１章の１．遺跡の位置と周辺遺跡の概要」を基に，一部加筆したものである。また，図１の作成には，岡山市教育委員会発行の『岡山市埋蔵文化財分布地図』1983 を参照した。
18　既刊の，「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第３冊　1988　の中で医学部附属病院外来診療棟改築予定地をⅠ地点に，Ⅱ地点をＮＭＲ－ＣＴ室新営予定地に各々設定して報告しているが，ここで，Ⅰ地点をⅠ次調査地点，Ⅱ地点をⅡ次調査地点にそれぞれ改めたい。
19　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第３冊　1988　８頁

> 「Ⅴ層は弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけての遺物包含層を一括したものである。現在のところ，本層は本地区南半部では認められず，本地区北側部分（Ｃ～Ｆ地点）を中心に確認しており，中でもＥ地点において最も高位に位置している。これらの地点のⅤ層は，主に暗黄褐色または灰褐色系の色調を呈する砂質土層であるが，本地区北端部のＢ地点のⅤ層相当層はいずれも砂層であり，遺物は周辺から流れ込んだものである。これらの状況から，弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけての微高地が，今回の２つの調査地点を中心とした範囲に存在したものと推定される。」

20　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊　1988
7頁

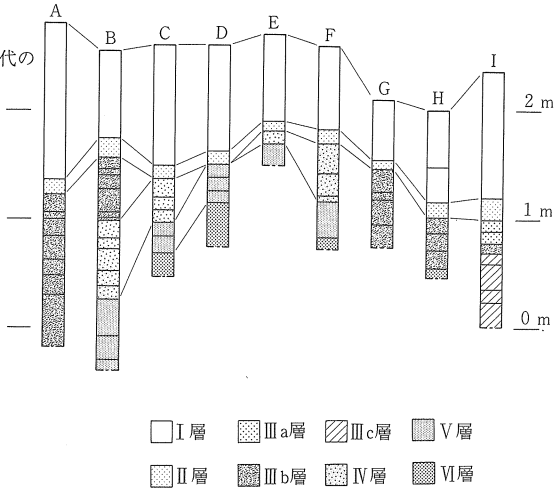
「Ⅳ層は古墳時代後期以前で，古墳時代初頭よりも新しいと推定される堆積層を一括しているが，包含遺物が乏しく，その堆積時期は必ずしも明瞭ではない。本層としたものは，一般に灰茶色系の色調の粘質土もしくは微砂土であるが，本地区北端部（B地点）でⅣ層としたものは，流水下の堆積とみられる細砂であり，地点によって堆積状況に相違が認められる。」

とし，図3中でⅠ地点（Ⅲ次調査地点）でⅣ層の存在を考えていたが，今回の調査において，それが調査区南半に広がる古代の河道内埋土であり，Ⅲ層に含まれることが判明した。また，Ⅲ層上部についても（中世末～）近世に属する部分が分離できたことから，Ⅲ層をａ～ｃに細分し，図3の地点の柱状図に一部修正を加えている。



微高地推定範囲および調査地点

縮尺1/9000



土層柱状図　縮尺1/70

第２章　Ⅲ次調査の概要

１．調査区の位置

本調査は既述のように岡山大学医療技術短期大学部新営予定地に対して実施した。調査地区は本学鹿田地区の南東部に位置し，旧脳代謝研究棟と看護婦宿舎，そして構内の南端に建つ特別高圧電気変電所に囲まれた地域である。調査地区内の北半には調査室が収蔵庫として利用していた旧精神科棟が建ち，その南半部は緑地兼駐車場であった。

調査区は校舎の本体部分（ａ地区）を中心に，校舎北西部に取り付き，道路に沿って北に延びる北共同溝部分（ｂ地区）と，校舎南面に取り付き南に延びる南共同溝部分（ｃ地区）の三地区に分けられる。

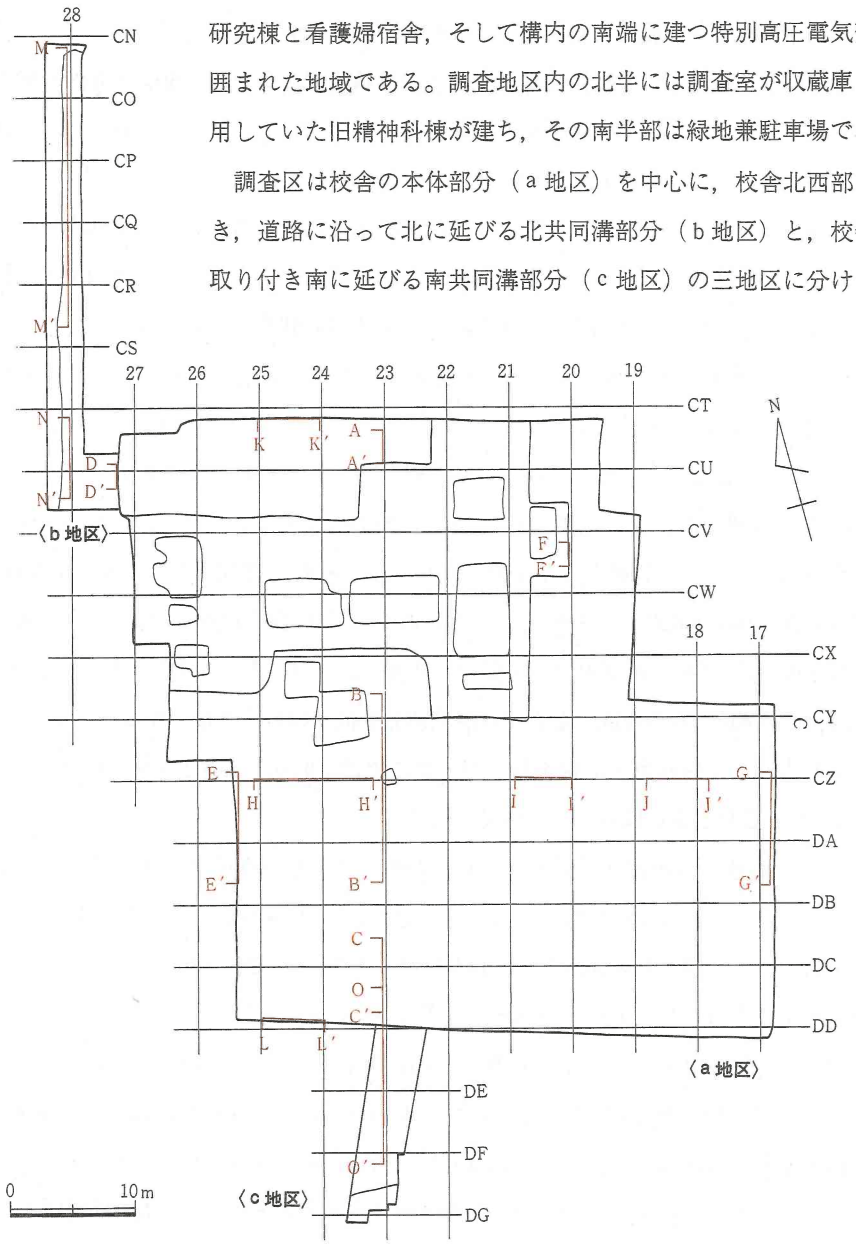


図３　調査地区区割り図　縮尺1/600

a地区は東西40～45m・南北約50mを測り，ＣＴ～ＣＸ19～27・ＣＸ～ＤＤ16～26区に位置する。b地区は東西３～5.5m・南北約39mを測り，ＣＮ～ＣＵ27・28区に，また，c地区は東西約4m・南北約16mを測り，ＤＤ～ＤＧ22・23区にそれぞれ位置する。

2．層　序

鹿田地区では，第１章で既述したようにⅠ～Ⅵ層の基本層序を設定している。ここではａ～ｃ地区の土層観察位置を示した後，各層およびその堆積状況，そして，遺構・遺物の検出状況を説明した上で，基本層序との対応関係を明確にしたい。そして，最後に，簡単に地形復元を行っている。なお，発掘前の地表面の標高は2.3mである。

a地区の調査では厚さ0.8～1.2mの造成土を機械掘削した後，南北方向の土層堆積を見るために23線に，また，東西方向についてはＣＺ線に沿って各々土手を設定し，断面土層を観察・記録した。また，調査区の東西南北各壁面についても土層の観察・記録を行った。南北方向ではほぼ23線上で３ヶ所（Ａ断面＜Ａ－Ａ'断面を示す＞：ＣＴ2.1Ｓ－ＣＴ4.9Ｓ＜ＣＴ線の南2.1mから同線の南4.9mの地点までを示す＞，Ｂ断面：ＣＸ3.5Ｓ－ＤＡ3.5Ｓ，Ｃ断面：ＤＢ3Ｓ－ＤＣ4Ｓ），西壁面で２ヶ所（Ｄ断面：ＣＴ4Ｓ－ＣＵ1Ｓ，Ｅ断面：ＣＹ4.5Ｓ－ＤＡ3.5Ｓ），東壁面で２ヶ所（Ｆ断面：ＣＶ－ＣＶ2Ｓ，Ｇ断面：ＣＹ4.5Ｓ－ＤＡ3.5Ｓ）を取り上げている。東西方向では，ＣＺ線上で３ヶ所（Ｈ断面：25W0.5－23W0.9＜25線の西0.5mの地点から23線の西0.9mの地点＞，Ｉ断面：20W4.5－20，Ｊ断面：18Ｗ４－17Ｗ４），北壁面で１ヶ所（Ｋ断面：25－24），南壁面で１ヶ所（Ｌ断面：25－24）を取り上げている（図３）。

b地区では厚さ約0.9mの造成土ならびに攪乱部分を機械掘削した後，28線から約0.5m西側の位置[(註21)]で南北方向の土層観察・記録を行った。ここではＭ断面：ＣＮ1.5Ｓ－ＣＲ４Ｓ，Ｎ断面：ＣＴ0.5Ｓ－ＣＵ２Ｓを取り上げている（図３）。

c地区ではａ地区との連続性を考慮にいれ，23線上に南北方向の土手を設定し，土層の観察・記録を行った。ここではＯ断面：ＤＣ２Ｓ－ＤＦ1.3Ｓを取り上げている（図３）。

次に，各層ごとの説明と基本層序との関係を明確にしたい（図４～６）。

１層は造成土でⅠ層に対応する。基本層序と差はない。

２層は均一な灰色土である。上面は全体としては標高1.4～1.5m（以下，標高は略す）を測る。ＣＺ線の南辺りから南向かって下降し，南壁面（ＤＤ線）では1.17mに至る。湿地的様相を示す凹凸が顕著に認められる。出土遺物は近代の陶磁器が大半を占め，Ⅱ層に対応する。

３層は鉄分をほとんど含まない淡灰褐色土を基調とするが，調査区北西部のＤ断面および東壁のＥ断面では，鉄分の沈着も認められ，色調も黄色を強め，淡黄褐色を呈する。上面高は

1.2～1.3ｍを測る。堆積状況は，２層と同様に，ＣＱ～ＣＺ線間は比較的水平堆積を示し，それ以北・以南に向かって下降する。また，南半部上面の湿地的様相を呈す凹凸も顕著に認められる。出土遺物は陶磁器の割合いが減少し，土師質・須恵質の遺物が増加する。

４層は鉄分の集積層が分化・発達した状態を呈し，３層とは比較的明瞭に区別される。淡黄緑色土を基調とする。上面高は1.15～1.2ｍで，ＣＺ線付近から南への傾斜は上層に比べて強い。東西方向では東に向かって緩やかに上昇するが，23線付近でやや窪み状をなす。遺物は，土師質・須恵質土器が多いが，17世紀後半～18世紀に属する陶磁器類も含まれる(註22)。遺構は土壙・溝がｂ地区を中心に検出されている。中世末～近世に属する可能性が高い。

３・４層は近世，17世紀後半～18世紀以降の堆積土層と考えられ，Ⅲａ層に対応する。

５層は，鉄分の集積に加えてマンガンの集積が加わる。層厚は北で厚く，南に向かって薄くなっている。一般的に北部（微高地部）ではマンガン・鉄分の集積の度合いで，２～３層に分層可能な部分も認められる。特に，ｂ地区では明瞭である（Ｍ断面）。しかし，４層との関係が不明瞭な部分もあり，Ａ・Ｈ・Ｌ断面では確認できなかった。上層にみられた南への傾斜や23線付近での窪みは同様に認められる。遺物は土師質・須恵質土器のみとなる。土師質土器の中では高台付椀が約1/2を占める。椀の高台径から13世紀～14世紀前半までの堆積と考えられる。遺構は中世の土壙に加えて，近世の土壙・溝がａ地区を中心に検出されている。こうした状況は近世段階に５層上面までの比較的大規模な削平が行われた結果，中世に属する掘削深度の深い遺構のみが残り，近世の遺構と共存した形となったと考えられる。以上のことから，５層は中世前半に属する堆積層であると考えられる。６層は５層から７層への漸移的な層である。色調は場所によって差があり，Ａ・Ｂ断面では暗黄緑灰色土で上半に鉄分，下半にマンガンを含む。Ｂ断面では５層との差が不明瞭で，また，Ｄ・Ｆ・Ｇ・Ｌ・Ｎ・Ｏ断面では未確認である。上面高は0.9～１ｍである。

７層は茶褐色粘質土を呈す。マンガンを多く含み，鉄分はほとんど含まない特徴的な層である。北半部では一部で層厚が厚く細分できる。Ｂ断面では二分され，ｂ層は鉄分の割合いが高く黄褐色を呈し，砂も少し含まれる。Ｈ断面では全体に砂質が強まり，ａ層：淡黄灰色土，ｂ層：マンガンを多く含む灰色砂質土となる。ｂ地区ではＭ断面でａ層：暗灰褐色粘質土，ｂ層：鉄分を含む暗茶灰色粘質土に二分される。このようにＣＺ線周辺（河道肩部）が砂質を強めて細分される。上面高はＣＱ～ＣＺ線間では0.85～0.95ｍとなる。南北方向への傾斜も小さく，0.8ｍまでで納まり，全体的に水平な状態を保つ。その中でＣＺ線周辺はやや高く，上層に認められた同線周辺が低い状況とは異なる。遺物は，本層が最も多く出土しており，大形破片の占める割合いも高い。時期的には12世紀を中心とする遺物が主流である。調査区西北部では本層の下面から弥生～古墳時代初頭の遺物が僅かに認められている。本層は遺構検出数も最多で，

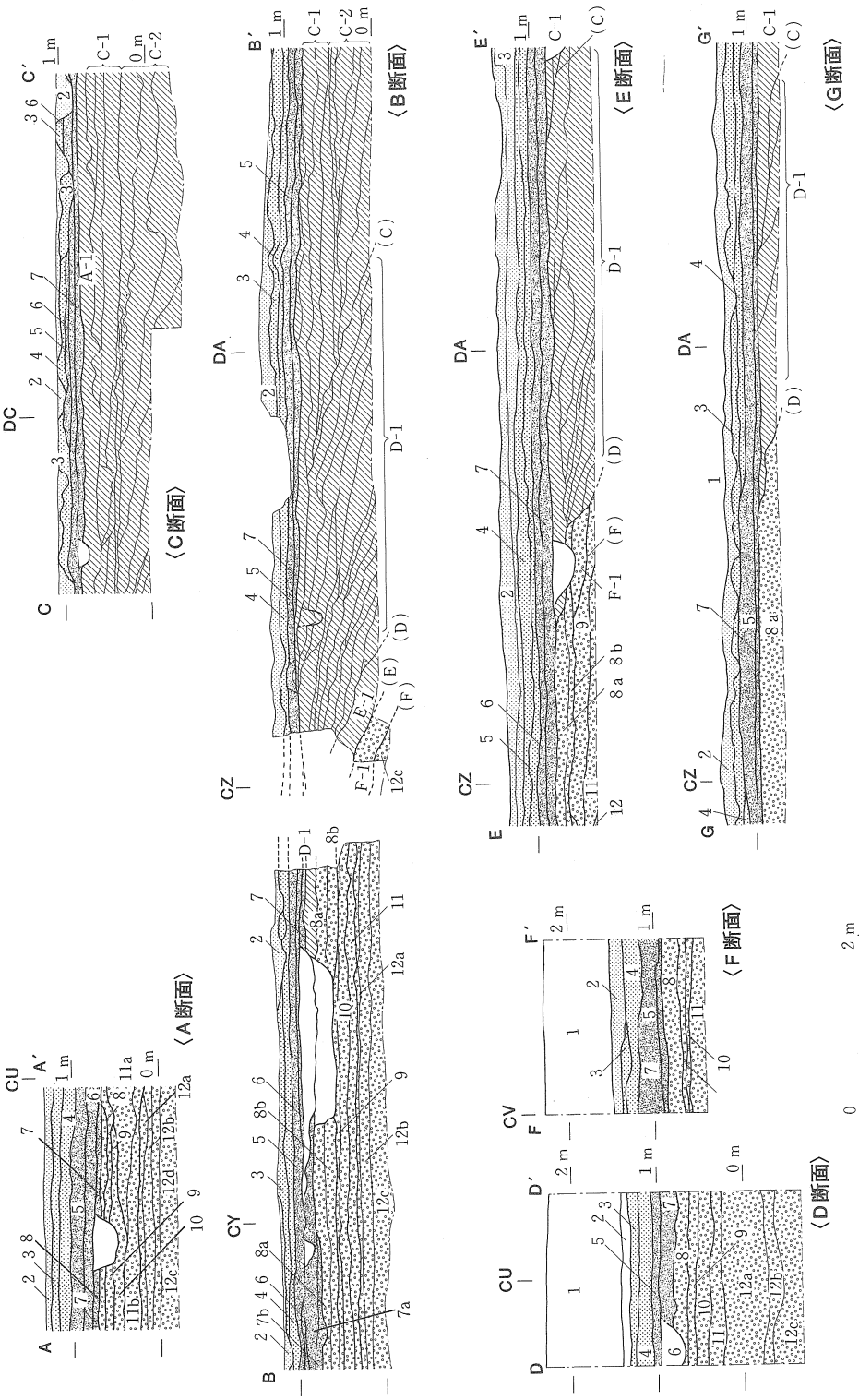
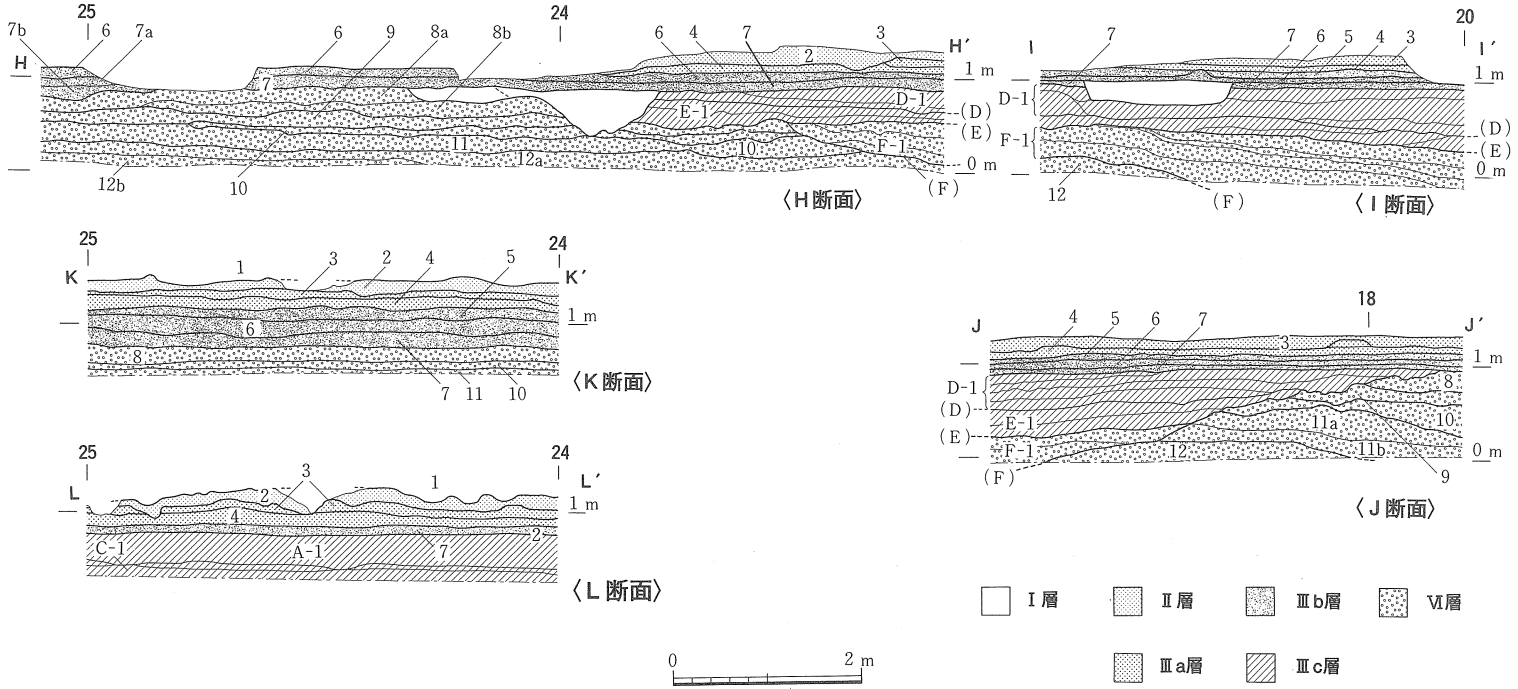
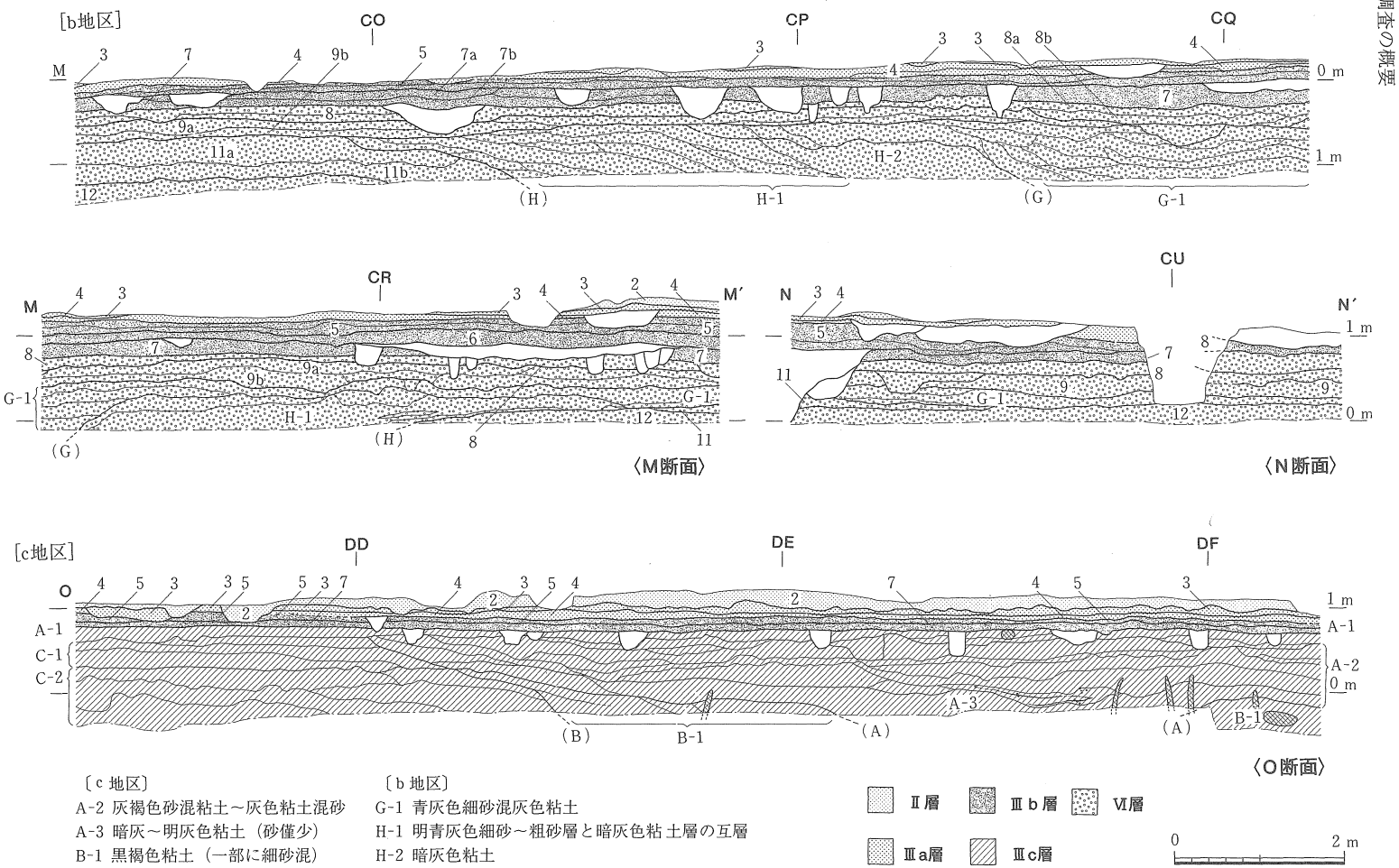


図４　調査区土層断面図（１）　＜a 地区　南北方向＞　縮尺1/80



1　造成土
2　灰色土
4　淡黄緑色土　(Fe多)
5　黄緑色土　(Mn多)
6　黄灰色土　(Fe・Mn)
7　茶褐色粘質土 (Mn・土器多)
8　黄灰褐色粘質土 (Fe柱状に多い)
～灰褐色粘質土
10　灰黒色粘土
11　灰色粘土
12　暗灰色粘土
A-1　淡黄褐色砂質土 (Fe多)
＜A-2・B-1はｂ・ｃ地区＞
C-2　淡灰色～暗灰色の細砂層と粘土層の互層
(上面にFe沈着)
D-1　灰色～暗灰色 細～粗砂層と粘土層の互層
(砂の割合がC-2層よりも多い)
E-1　黒褐色粘土 (粗砂少)
F-1　黒灰色粘土

図5　調査区土層断面図（2）　＜a 地区 東西方向＞　縮尺1/80



〔c 地区〕
A-2 灰褐色砂混粘土～灰色粘土混砂
A-3 暗灰～明灰色粘土（砂僅少）
B-1 黒褐色粘土（一部に細砂混）

〔b 地区〕
G-1 青灰色細砂混灰色粘土
H-1 明青灰色細砂～粗砂層と暗灰色粘土層の互層
H-2 暗灰色粘土

図6　調査区土層断面図（3）　＜b・c 地区 南北方向＞　縮尺1/80

掘立柱建物・井戸・土壙・溝・ピット多数が確認された。調査区全域に比較的水平に堆積し，土質も均質で，遺構・遺物も集中することから，造成土的な性格が考えられる。

5～7層はⅢb層に対応する。

8～12層は北半部のみの堆積である。

8層の上面高は，ＣＺ線上が若干高い傾向はあるが，0.7～0.8ｍでほぼ水平である。ａ層：黄灰褐色粘質土（鉄分多い），ｂ層：灰褐色粘質土（鉄分少ない）に二分される。土質は北半部では粘土に近くなる（Ａ・Ｋ・Ｍ・Ｎ断面）。9層の上面高は0.6～0.7ｍでほぼ水平であるが，ｂ地区のＣＱ線から北へ向かっては下層の落ちの影響を受けて下降する。この層は鉄分を多く含む淡黄(灰)褐色粘質土であるが，Ｂ断面：灰白色粘質土（白色粘土含む），Ｄ断面：茶褐色土，ｂ地区のＭ断面ではａ層：淡黄白色砂質土～砂混粘土（部分的に砂が多い），ｂ層：黄褐～黄白色粘土など不均質な状態が認められる。10層は局部的に堆積する灰黒色粘土で，上面高は0.5～0.6ｍでほぼ水平である。11層は灰色粘土である。上面高は0.4ｍ前後で，南北方向は水平であるが，東西方向では18線から東に向かって下降していく（Ｊ断面）。上層では認められなかった傾斜である。Ａ断面上半は淡黄灰色粘土，Ｊ断面下半は細砂を含む暗灰褐色粘土，Ｍ断面ではａ層：明灰色粘土，ｂ層：灰色粘土を呈す。12層は0.3ｍ以下の層をさす。上面はほぼ水平であるが，ｂ地区ではＣＲ線から河道の落ちが確認される。上面には，その河道埋没時の土層（G-1，H-1･2層）が覆っている。また，11層同様に東西方向では18線辺りから東に向かって下降する。概して，暗灰色粘土であるが，一部で細分される。Ａ断面ではａ層：暗灰色粘土，ｂ層：青灰色粘土，ｃ層：暗黒灰色粘土，ｄ層：暗灰黒色粘土となる。Ｂ断面ではａ層：暗灰色粘土，ｂ層：灰色粘土，ｃ層：灰黒色粘土，Ｄ断面ではａ層：灰色粘土，ｂ層：青灰色粘土，ｃ層：青灰色砂，Ｈ断面ではａ層：灰黒色粘土，ｂ層：灰色粘土，Ｉ断面では暗灰褐色粘土，Ｊ断面では黒褐色粗砂となる。

8～12層は無遺物層で，Ⅵ層に対応する。

A-1～H-1･2層は河道の埋土である。

A-1層は，鉄分を多量に集積する淡黄褐色砂質土層である。ＤＢ線以南で河道上を覆い，上面高は0.7～0.78ｍである。A-2層はｃ地区河道(Ａ)の埋土で，灰褐色砂混粘土～灰色粘土混砂のレンズ状堆積をまとめたものである。上面に鉄分が集積する。ただし，底部のA-3層は暗灰～明灰色粘土で砂はほとんど含まない。一時期の河道の底部を形成していたものと考えられる。

B-1層はｃ地区河道(Ｂ)の埋土である。砂をほとんど含まない黒褐色粘土である。

C-1層はＤＢ線以南に存在し，河道(Ｃ)を覆う堆積層である。上層は白色粘土が薄層状に流入し，砂も多く含まれる。下層はやや粘質を帯び，茶褐色に近い色調を呈す。C-2層はＤＡ線辺りから南に堆積する河道(Ｃ)の埋土をまとめたものである。淡灰色～暗灰色の細砂層と粘土

層が南に向かって連続的に堆積している。ＤＡ～ＤＣ線の急傾斜部分には砂層が細かに走り，ＤＣ～ＤＤ線の緩傾斜部分には暗(黒)灰色粘土が溜る。また，23線周辺では北へ延びており，河道の肩が調査区中央付近で北へ張り出している状態が予想される。

D-1層は河道(D)の埋土を一括したものである。灰色～暗灰色の細砂～粗砂層と粘土層が南に向かってレンズ状堆積を示す。C-2層以上に砂の割合が高く，かなりの水量を考えさせる土層である。C-2層同様に調査区中央部で北への河道の肩の張り出しが認められる。

E-1層は河道(E)の埋土で河道(D)の底を形成する層である。黒褐色粘土であるが，Ｈ～Ｊ断面では二分でき，上半はやや砂質を帯びる。東西両断面ではD-1層に削平される。

F-1層は河道(F)の埋土である。灰黒色粘土であるがＨ・Ｉ断面では下半に砂の混入が認められ，その度合いによって三分された。

G-1層はｂ地区河道(G)の埋土の一括である。青灰色細砂混灰色粘土がレンズ状に堆積し，砂の混入は比較的少なく粘土が主体である。

H-1層はｂ地区河道(H)の埋土である。明青灰色細砂～粗砂層と暗灰色粘土層がレンズ状堆積をしている。砂の割合が高く，南側では砂が細かい縞状をなして層内に認められる。H-2層は暗灰色粘土層で砂を含まない。河道(G)の底を成していた可能性が考えられる。

出土遺物はA-1・C-1・D-1層上半（７層下面)からは少量の中世・古代の遺物が出土している。また，A-2層下半・B-1層では杭にからんで，かなりの量の古代の遺物が出土しており，特に，A-3層上面では木製品も検出された。C-2・E-1～H-2層は無遺物であった。

A-1～E-1層(河道(A)～(E))はⅢc層に，F-1～H-1･2層(同(F)～(H))はⅥ層に対応する。

最後に地形復元を簡単に行いたい。

本地区の地形は微高地部と河道部に大別される。最初の河道(H)はｂ地区の北，ＣＱ線の北に存在する。続いて，河道(G)が形成され，この埋土は広く南側の微高地上も覆い，完全に埋没し，９層以降，ａ地区北半と同一の微高地部となる。その後，ａ地区でＣＺ線の南側を東西に走る河道(F)が出現する。

古代の段階に入ると，河道は(E)に始まり，同(D)・(C)へと南へ位置を移動する。そして，やや北へ蛇行しつつ徐々に埋没していく。ｃ地区内河道(A)を最後に完全に埋没する。この河道(A)あるいは(B)では杭などの水利施設を伴う人工的なものとなっている。その間，北半部の微高地部では遺構は確認されていない。

中世に入ると造成（７層）により一面水平化するが，ＣＱ線以北・ＣＺ線以南における旧河道の影響は残存し，ＣＱ～ＣＺ線間が安定した微高地を形成し，集落として利用される。近世に近づくと，全体的に水田化が進み，近代の造成に至る。その間，近世段階においても，少なくとも一度の造成（５層）が行われている。　　(山本)

3．遺構・遺物

本調査区では各時代を通じて，北半に微高地が，南半に低地部が認められた。古代にはａ地区南半からｃ地区にかけて大規模な河道の存在が確認され，ｃ地区では橋脚遺構が検出された。古代末～中世には，ａ地区で掘立柱建物３棟・柱穴列６列・井戸１基・土壙14基・溝14条・柱穴多数が，ｂ地区では井戸１基・土壙３基・溝７条・柱穴多数が各々確認され，本調査区への集落の進出が認められる。中～近世では，再び遺構数は減少し，ａ地区の北半部において土壙７基・溝６条，ｂ地区では土壙３基・溝２条等が各々検出されるのみである。ｃ地区では，柱穴が検出されてはいるが，いずれも不明瞭であった。（山本）

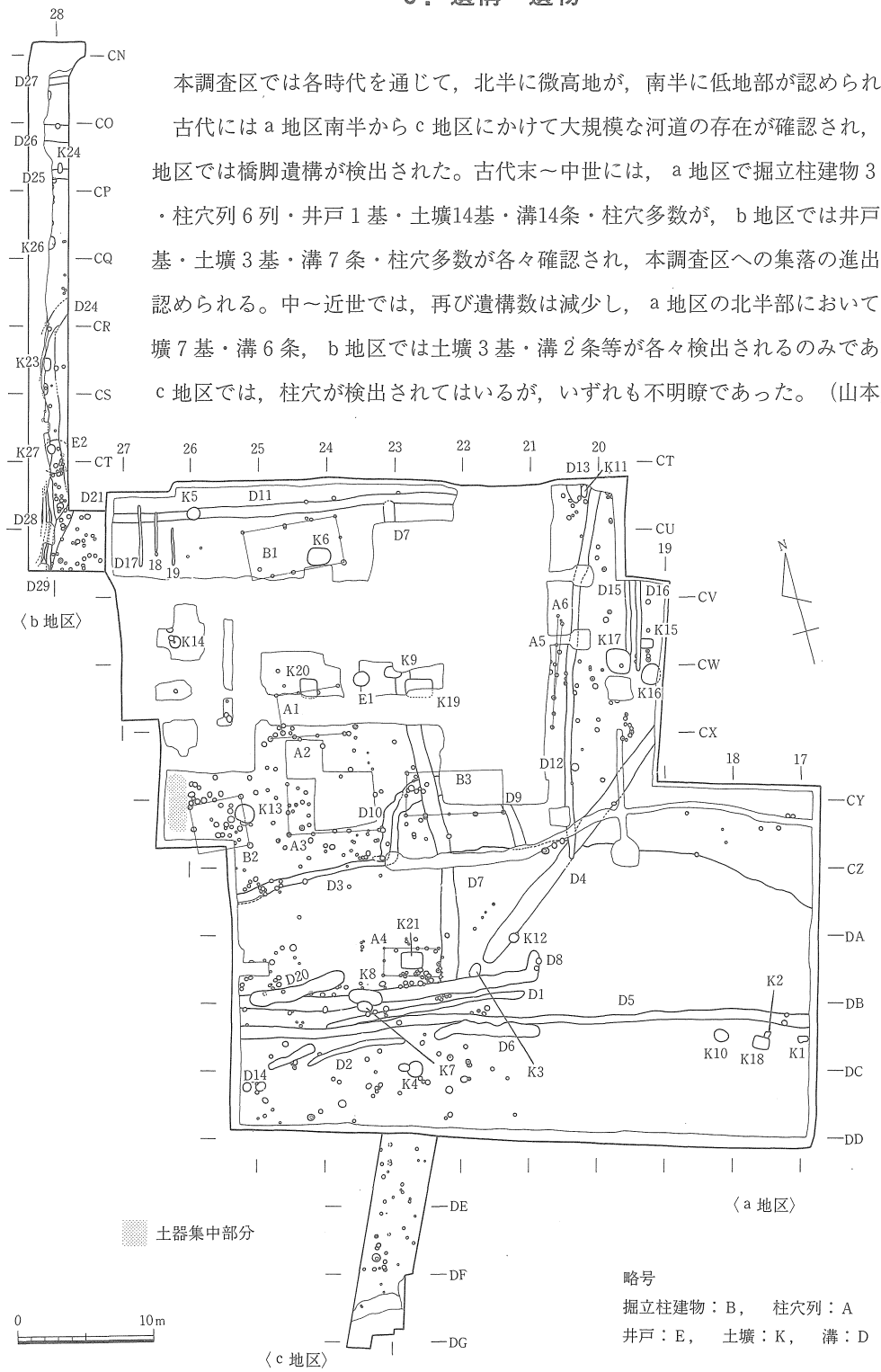


図７　調査区全体図　縮尺１/500

（1）古　代

a．河　道

河道－1（図8～14，図版3～5）

c地区DD線以南で検出された自然河道である。調査区が狭かったため，河道規模は明らかにできなかったが，幅員12.1m以上，深さ1.2m以上を測る。流路は東西方向である。

河道－1は，a地区CZ線から南へ流路を変える一連の河道の最終段階のものである。土層観察から，安定した河床面が2面確認でき，それぞれの河道を，河道－1（A）・（B）とする(註22)。河道－1（B）は，DD線より2m南で急な落ちを持つ。河道－1（B）の埋土（14～18層）は砂質を含まない，しまった黒灰色粘土で，緩やかな水流の中で堆積したことが推察される。河道－1（A）は，DE線とDF線付近で，わずかな落ちがある。12層は，遺物や有機物を多く含む粘土で，安定した河道底面を形成していたと考えられる。これらより上部層は，砂質土と粘質土が互層状に堆積しており，河道が急速に埋没していった様相を呈する。

DD線より約2m南から，DG線にかけて，規則的に，あるいは，無作為に打ち込まれた約160本の杭群と，径18～32cmを測る6本の大形杭が検出された。杭・柱群は，そのほとんどが，14～18層，12層より下方に打ち込まれ

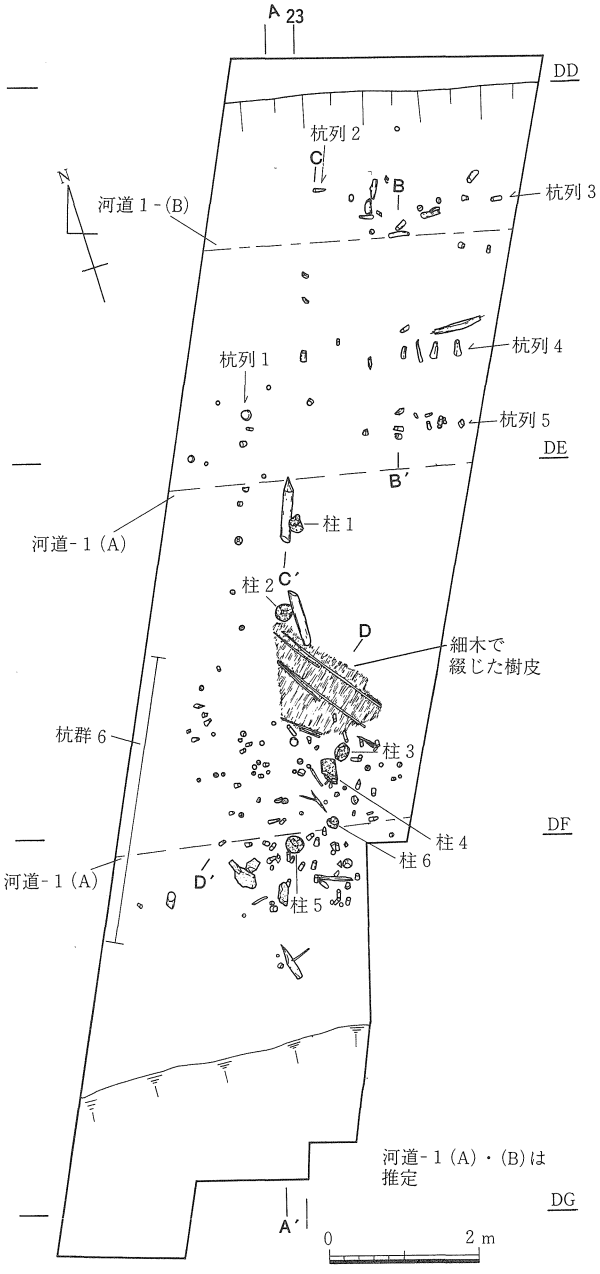
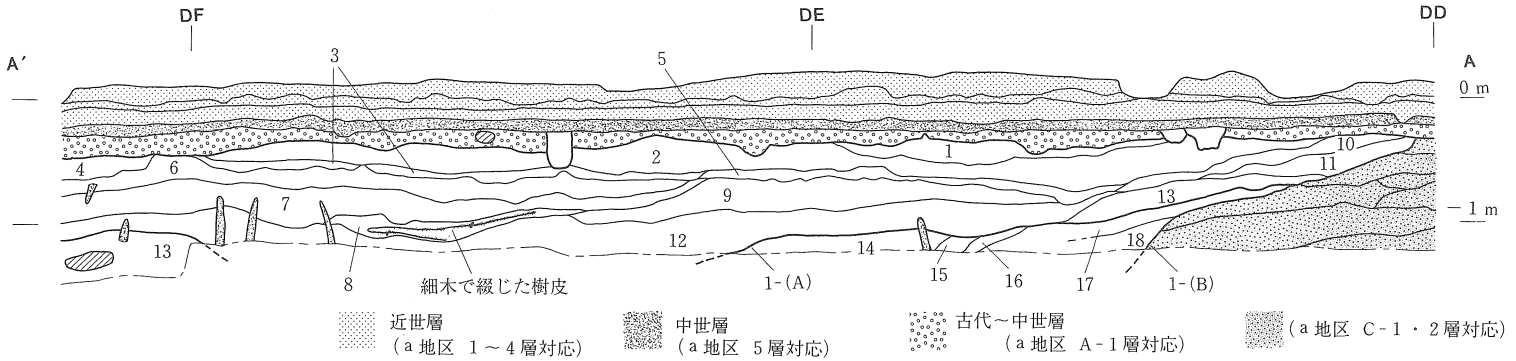
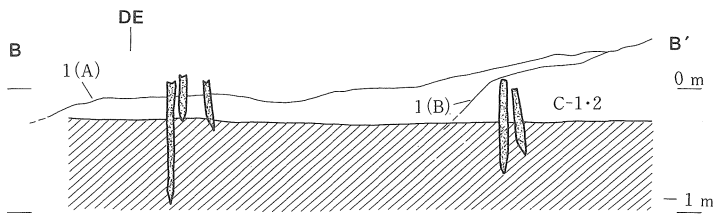
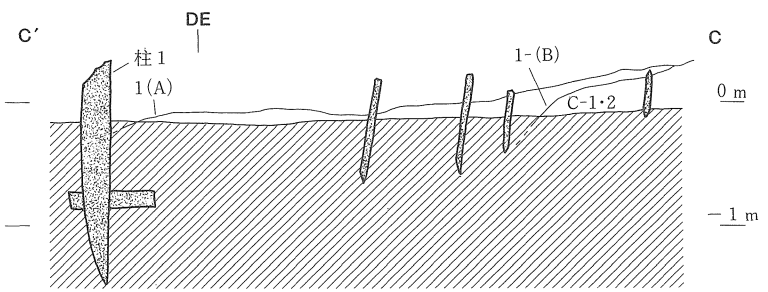


図8　河道－1　縮尺1/100





1 灰茶褐色砂質土
2 灰黄褐色粘質土
3 濃灰橙褐色粘質土（Fe）
4 淡灰茶褐色砂質土（Fe,Mn）
5 暗灰褐色細砂混粘土
6 灰色砂質土（一部粘質増）
7 灰色粘土
8 暗灰褐色粘質土
（細木で綴じた樹皮含む）
9 暗灰褐色粘土
（互層状に灰色砂含む）
10 灰褐色砂質土（Fe,Mn）
11 灰茶褐色粘質土
12 暗灰色粘土
（木質等有機物多く含む）
13 灰色粘質土
（互層状に砂層含む）
14 黒褐色粘土（砂混）
15 黒茶褐色粘土
16 黒褐色粘土（炭混）
17 暗灰褐色粘土（Fe）
18 黒灰色粘土



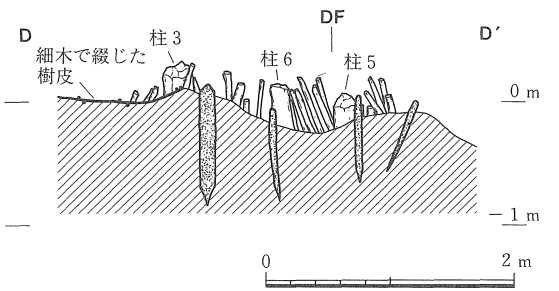
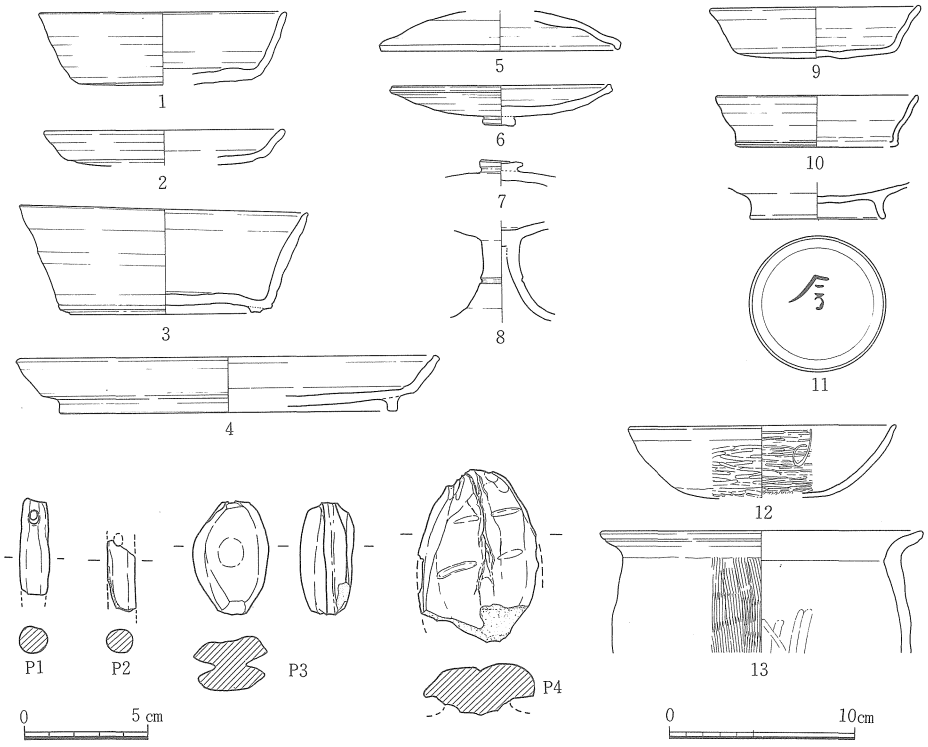


図 9　河道－1　断面　縮尺 1/60

ており，河道－１（A）・（B）底面の安定していた時に，打ち直しや補強を繰り返しながら，形成されている。杭群はその並び方から，杭列１～５と杭群６に分類される。杭列１・２は，杭の間隔は不規則であるが，水流方向に直交する列を成しているところから，堰としての機能をもっていたと想定できる。岸辺に沿って打ち込まれている杭列３・４・５は，しがらみによる



遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土
1	須恵器 杯	(14.6)	(10.3)	4.3	横ナデ，底部外面篦キリ痕残存，口縁部重ね焼き	㈠淡灰 ㈡灰褐	微砂㋑
2	〃 〃	(14.2)	－	－	〃，底部外面篦削り後ナデ，ロクロ回転㋐	淡灰	微砂・粗砂㋑
3	〃 〃	16.0	11.2	6.2	〃，底部内面押圧後ハケ，外面篦キリ後押圧	㈠淡灰 ㈡暗～黒灰	細砂㋑
4	〃 盤	(24.7)	(20.0)	3.3	〃，底部内外面に二次焼成痕	淡灰白	〃
5	〃 杯蓋	(14.1)	－	－	〃，天井部篦ケズリ，内外面煤付着	灰黒	微砂
6	〃 〃	13.0	－	3.4	「転用硯」，天井部篦ケズリ・自然釉，内面不定方向のナデ・墨付着	㈠黒灰 ㈡淡緑灰	微砂㋑，黒色粒㋭
7	〃 〃	－	－	－	横ナデ，外面自然釉	灰白	〃
8	〃 高杯	－	－	－	〃	青灰色	微砂㋫
9	土師器 杯	(12.3)	3.0	(9.2)	〃，底部外面ヘラ切り後押圧，底部外面丹塗り	㈠淡赤褐 ㈡淡灰白	粗砂㋑
10	〃 〃	(11.9)	3.1	(9.3)	〃，内外面丹塗り，内面煤少量付着	明橙	微砂㋑
11	〃 〃	－	－	9.8	〃，〃，底部外面墨書あり	淡茶灰	〃
12	〃 椀	(15.7)	－	－	外面押圧後篦ミガキ・ナデ，内面細かい篦ミガキ，「黒色土器A」	㈠黒褐 ㈡淡茶褐	金雲母㋬
13	〃 甕	(19.0)	－	－	外面押圧後ハケ，内面工具ナデ，内外面煤付着	㈠淡灰白 ㈡淡茶灰	粗砂㋫

遺物番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
P1	土錘	〔3.7〕	1.2	1.1	8.0	棒状土錘，ナデ，一部黒斑有り	黄灰	精良，微砂㋫
P2	〃	〔2.7〕	1.1	0.9	2.9	〃 〃	淡乳白	〃
P3	〃	4.6	3.1	2.1	31.0	有溝土錘，指押え後ナデ	淡黄白～明黄褐	細砂㋭
P4	〃	6.9	(4.7)	〔1.8〕	46.6	半欠の有溝土錘，粘土のしわ・工具痕残る	淡灰褐	細・粗砂㋭

図10　河道－１　出土遺物（１） 縮尺１/３・１/４

護岸施設で，北岸が侵蝕されるにしたがって，北へ造替した状況が窺える。杭群６は，杭列１～５が北岸寄りにまとまりを持つのに対して，南側で群をなし，ＤＦ線を中心に不規則に打ち込まれている。６本の大形杭は，23線に柱１・２・５，約0.8ｍ東に柱３・４・６が並列している。６本とも全て先端部を削り，打ち込みによって据え付けられているが，内，柱３・４・６は斜めに倒れかかっていた。これらの出土状況から，６本の大形杭は，橋脚の片側と考えられ，柱３・４・６の橋脚が倒壊したのち，柱１・２・５を造替したのであろう。対となる橋脚は，今回の調査区外にあると想定される。柱１・２・５からなる橋脚間は，北から1.2ｍ，3.1ｍ，梁間は橋脚が調査区の東西どちらかにあると想定して，2.2ｍ以上となる。

遺物は，主に12層から出土している。特に，杭群６周辺に集中しており，南岸からの流れ込みによる遺物が多い。土師器・須恵器・土製品・獣骨・木製品が出土しており，転用硯・墨書土器等が，注目されるものとしてあげられる。木製品では，木の皮を細木に挟んで綴じた草壁か屋根の材が，河道－１(Ａ)底部から出土している。また，河道－１(Ａ)埋土から出土した獣骨は，ウマの上・下顎臼歯および上・下顎骨破片である。

柱１～６は，径18～32㎝，長さ1.5～2.5ｍを測る。表面を平刃手斧の瓜剝き仕上げをしている柱１は，土壁，または草壁の横桟用の枘穴が３対あり，掘立柱を橋脚に転用していることがわかる。柱２～５は，枝を落とした丸木の先端を加工したものである。(註24)

杭は，径４～８㎝の自然木の先端を削ったものが主であるが，一部に，角材も含まれている。先端の加工は，材の全周，あるいは，１～２面を削って尖らせている。中には，杭の両端に加工がなされているものもある。樹種はマツ属，コナラ属クヌギ節がそれぞれ23％を占める。(註25)

出土遺物から，河道－１は８世紀後半～９世紀に存在していたと考えられる。この時期，今回調査したａ地区には，集落のあった可能性は少ないが，橋脚の存在は，古代の集落が，医学部構内よりも南へ広がる可能性を示唆し，重要である。（藤原）

遺物番号	杭列・群	残存長(cm)	幅・径(cm)	樹　種	加工面数	形　態　の　特　徴
Ｗ１	柱　１	250.0	18.6	カヤ	11・15	手斧痕が残存，３対の枘穴あり，転用材
Ｗ２	柱　２	209.0	20.8	モミ属	9	
Ｗ３	柱　３	－	24.0	アカマツ	9面以上	
Ｗ４	柱　４	241.0	25.4	モミ属	6	
Ｗ５	柱　５	220.0	32.0	アカマツ	8	
Ｗ６	柱　６	149.6	28.0	アカマツ	15	
Ｗ７	杭　列　４	91.5	6.0	スダジイ	4	
Ｗ８	杭　群　６	92.5	5.6	コナラ属クヌギ節	5	
Ｗ９	〃	73.7	5.3	ヒサカキ	4	両端とも４面加工，樹皮残存
Ｗ10	〃	63.6	9.1	モミ属	5	樹皮残存
Ｗ11	杭　列　４	70.5	8.3	コジイ	5	角材
Ｗ12	杭　群　６	156.6	6.8	マツ属複維管束亜属	4	
Ｗ13	〃	153.8	7.4	モミ属	5	
Ｗ14	〃	153.0	6.0	モミ属	4面以上	
Ｗ15	〃	162.0	4.4	モミ属	2	
Ｗ16	〃	110.8	4.9	クロマツ	4	
Ｗ17	杭　列　５	206.0	7.6	モミ属	4	

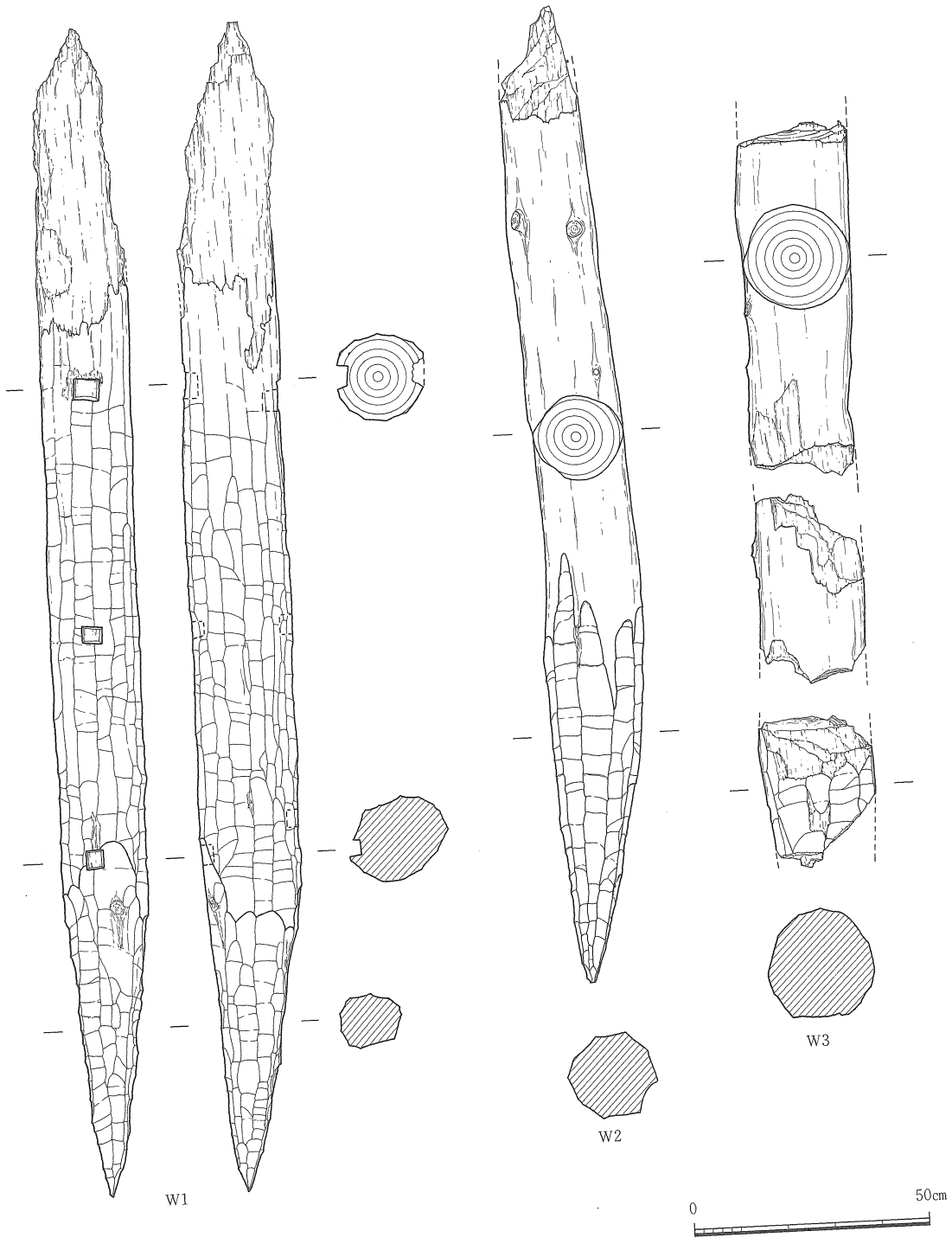


図11　河道－1　出土遺物（2） 縮尺1/14

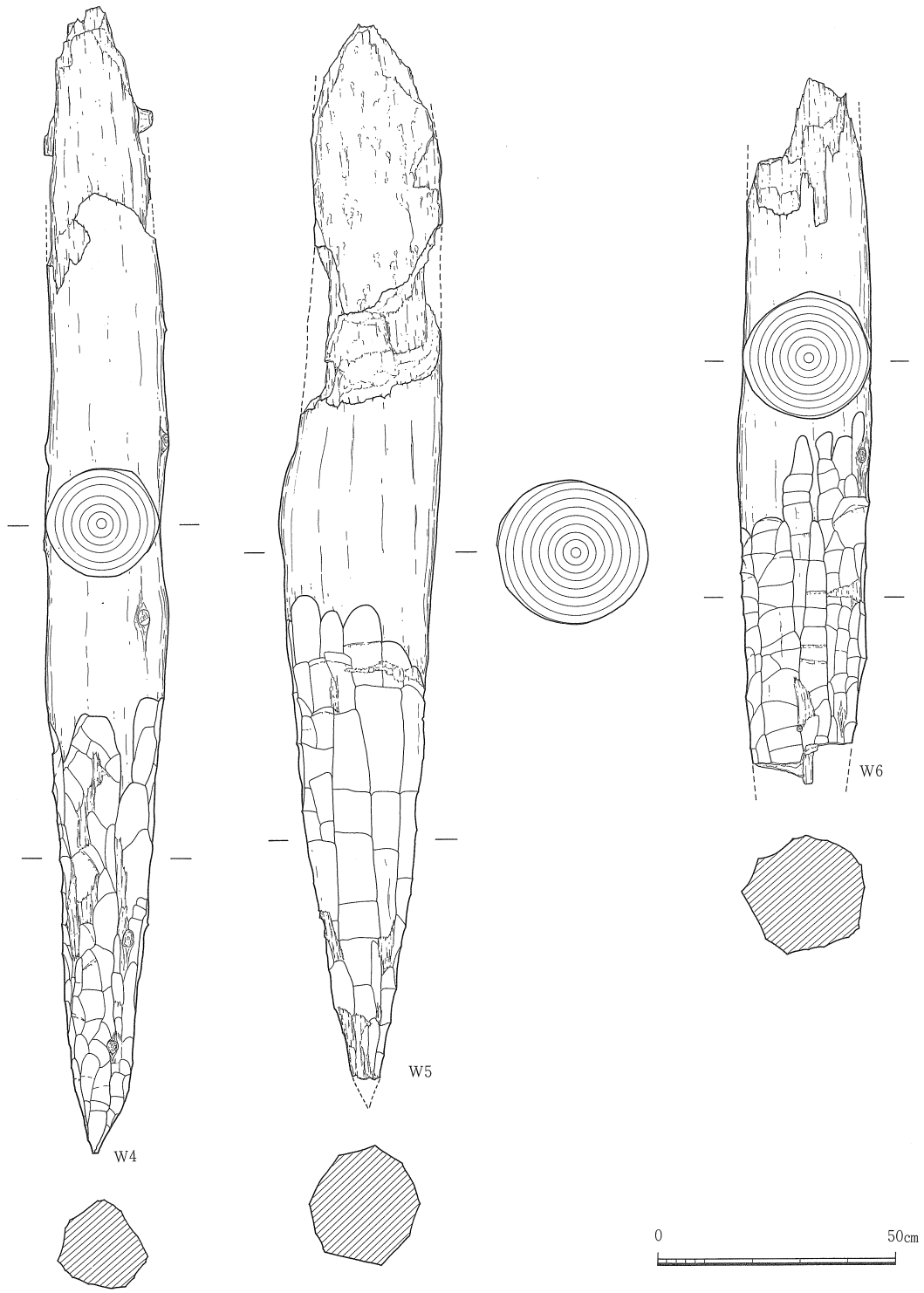


図12　河道－1　出土遺物（3） 縮尺 1/14

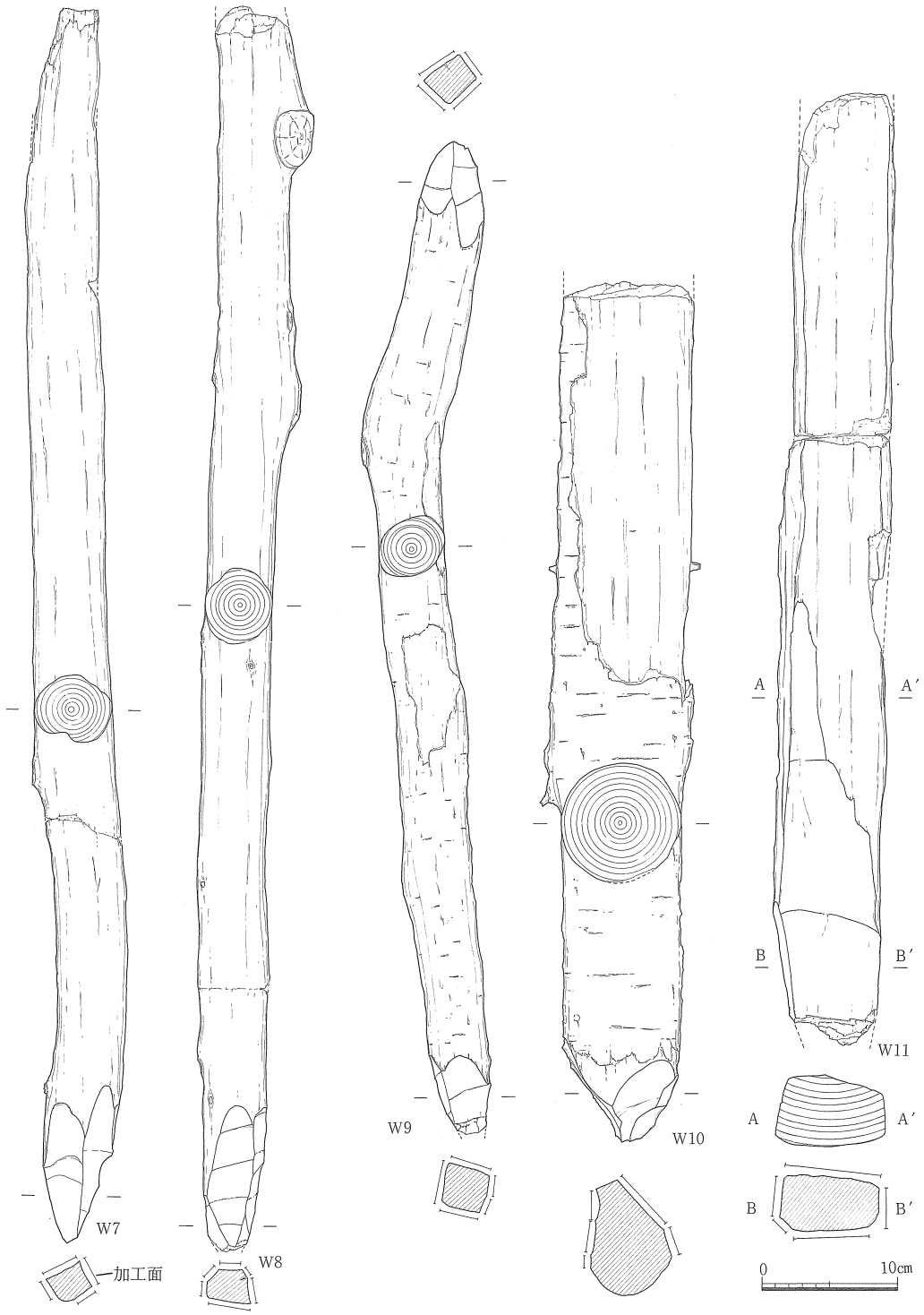


図13　河道－1　出土遺物（4） 縮尺1/5

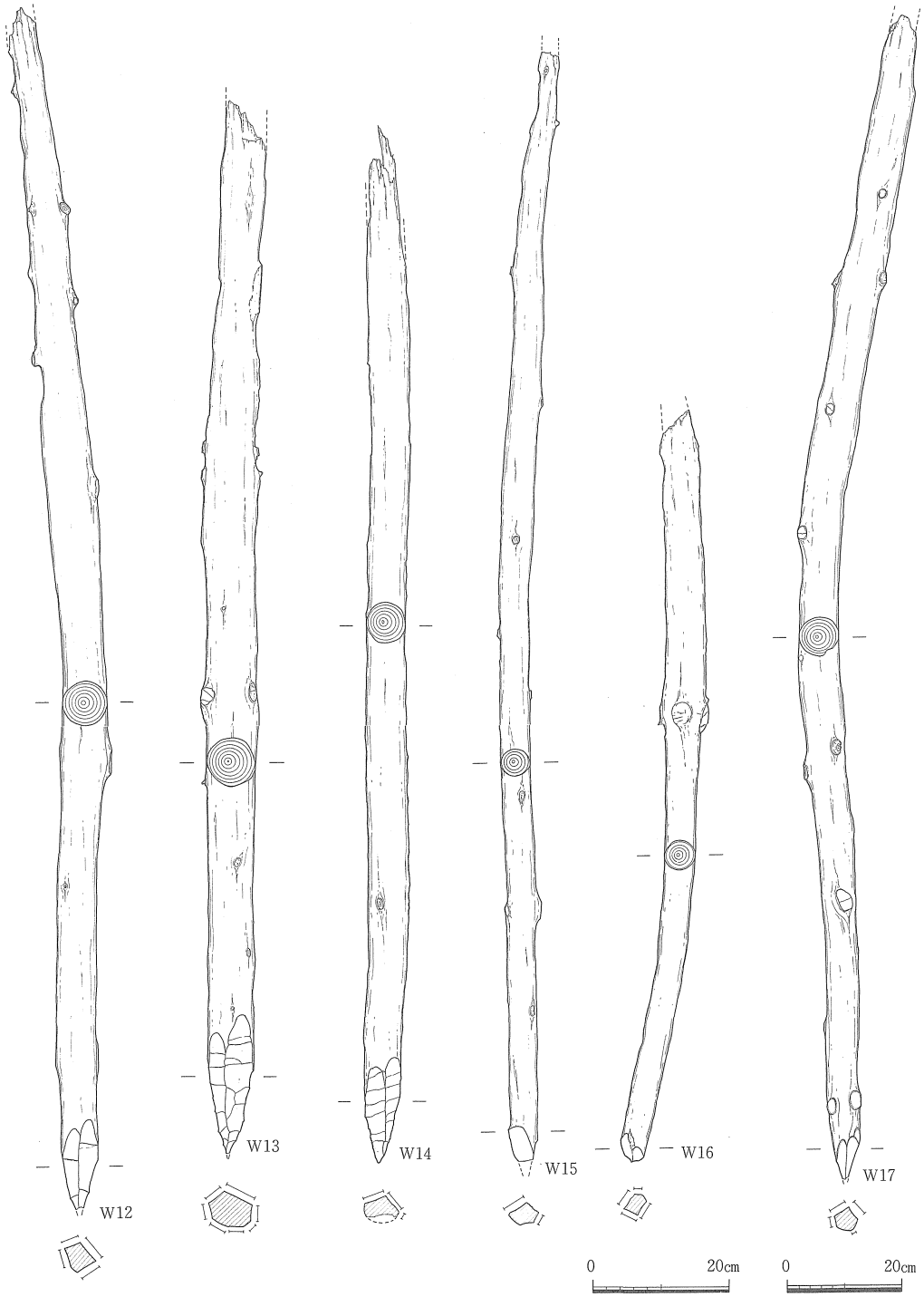


図14　河道ー1　出土遺物(5)　縮尺1/10（12～16）・1/12（17）

（２）古代末～中世

ａ．掘立柱建物

掘立柱建物－１（図15）

本遺構はａ地区，ＣＴ・ＣＵ23・24区で検出された。検出面は標高70～90cm，〈７〉層～〈８〉層上面である。周辺は柱穴などの遺構が非常に僅少な地域で，いずれも茶褐色粘質土の充満した柱穴が，非常に明瞭に判別された。

規模は桁行４間（688cm），梁間２間（349cm）を測る。棟軸方向はＮ－95°－Ｅで，柱間は桁行方向で156～310cmを測り，不揃いである。柱穴は径25cm前後の円形のものが８ヶ所確認された。深さは30cmが中心であるが，柱穴５・７では５cmと非常に浅いものも認められる。また，未確認の柱穴の内，本建物の西南隅にあたる部分および柱穴７と８の間の部分は攪乱内で破壊されている。柱穴１と２の間・柱穴１の南隣の部分については，柱穴５・７のように浅い柱穴であったため，上部削平で消失したのか，あるいは，本来的に存在しなかったのかは不明確である。柱穴埋土は黄褐色～灰黄褐色粘質土である。径が小さいことなどを考えると柱痕の可能性が高く，本来の掘削面は上層になると推定される。

所属時期は，伴出遺物が認められず，また，周辺部においても遺物が極めて少ないことから不明確であるが，検出面など周囲の状況から古代末～中世初頭と判断される。

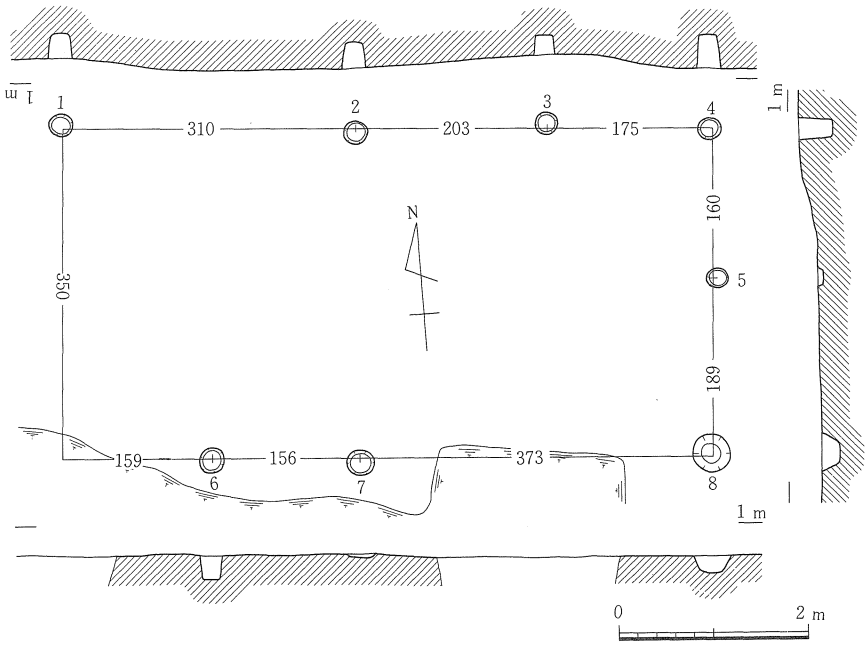


図15　掘立柱建物－１　縮尺１/80

掘立柱建物－2（図16）

本遺構はａ地区の西部，ＣＸ・ＣＹ25区で検出された。検出面は標高80～85cm，〈7〉層および〈8〉層上面である。柱穴が集中する地域である。

桁行２間（382cm），梁間２間（374cm）を測る建物と考えられる。棟軸方向はＮ－93°－Ｅである。柱穴は径35cm前後の円形のものが６ヶ所確認された。深さはいずれも25cm前後で，南側の２ヶ所（柱穴４と７の間）は攪乱で消失している。埋土は赤みがかった灰黄褐色粘質土で，建物－１とは異なる。柱間は174～197cmを測り，柱穴の並びは不揃いの感がある。

所属時期は，柱穴４から出土した土師器の細片や周辺から出土している遺物が古代末～中世初頭のものであることから，該期に属すると考えられる。建物－１とは柱穴の形状・埋土などに相違が認められるが，その棟軸方向が比較的近いことから関連遺構と推定される。

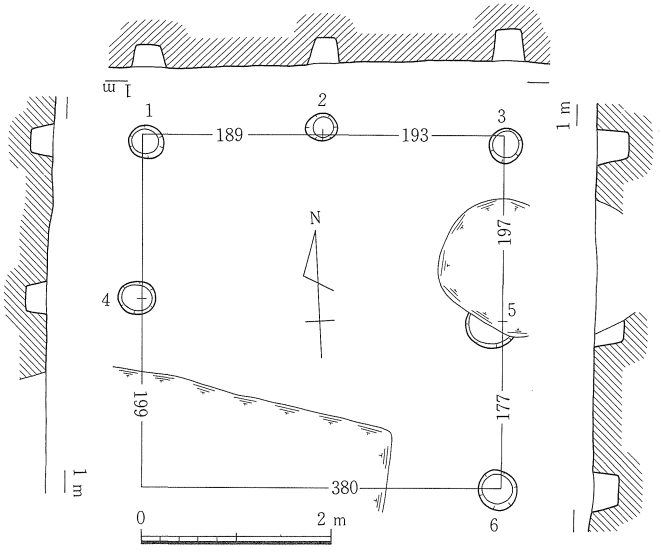


図16　掘立柱建物－2　縮尺１/80

掘立柱建物－3（図17）

ａ地区の中央付近，ＣＸ・ＣＹ21・22区で検出した。検出面は標高約90cm，〈7〉層である。

建物規模は桁行４間（716cm），梁間２間（307cm）を測り，東西に長い形状となっている。柱間は桁行方向で143～207cmを，また，梁間方向で142～165cmを測る。棟軸方向はＮ－104°－Ｅを示す。柱穴は径25cmの円形を呈し，深さは，柱穴４がやや浅いが，全体的には検出面から30～40cmである。東側の柱穴６・７では柱痕が確認された。北東半部分は攪乱によって消失している。柱穴内埋土は淡黄褐色～淡黄灰色の砂質土が中心である。この建物も他と同様に本来の掘削面はもう少し上層であったと考えられる。

共伴遺物は柱穴６・７から出土している土師質高台付椀（いわゆる早島式土器）・土師質鍋・土師質皿の細片が挙げられる。椀は口縁部が２点あり，両者とも内外面に篦ミガキが認められる。１点については内面が炭化している。これらの遺物量は他の建物に比べるとやや多いが，やはり細片であるため，図化できなかった。

所属時期は，上記の遺物の様相から中世初頭（12世紀代）を考えている。

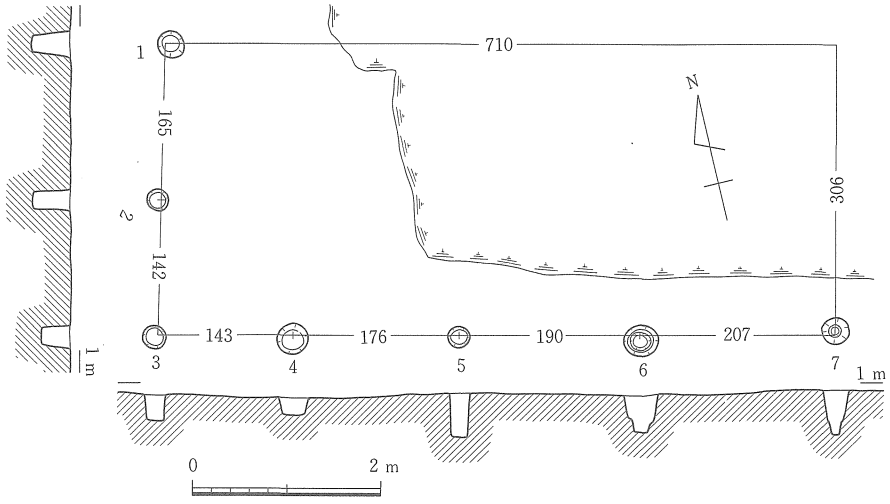


図17　掘立柱建物－３　縮尺１/80

ｂ．柱穴列

柱穴列－１（図18）

ａ地区，ＣＷ23・24区で検出した。上述した建物－１の南側にあたる。標高80～85cm，〈７〉層で検出した。周辺部が昭和初期の建物基礎によって大規模に攪乱を受けており，島状に残った非常に狭い部分での検出のため，非常に不明瞭な形でしか確認できなかった。

東西方向で柱穴３ヶ所（柱穴１～３），南北方向で柱穴２ヶ所（柱穴１・４）を確認した。柱間距離は柱穴１と２の間で167cm，柱穴２と３の間で287cmを測り，東西454cmを示す。柱穴２と３の間隔が広く，その間に柱穴の存在が予想されるが，近世の土壙によって破壊され不明となっている。柱穴１と４の間隔は274cmを測る。この間についても大規模な攪乱のため柱穴の有無は不明である。長軸方向はＮ－94°30′－Ｅを示し，建物－１と軸をほぼ同じくする。短軸は長軸に直交する。建物－１との距離は南へ約10ｍである。柱穴は径25cm，

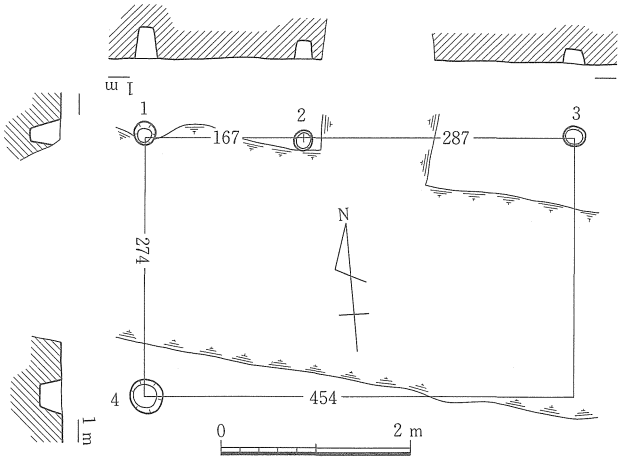


図18　柱穴列－１　縮尺１/80

深さ20～35cmを測る。平面形は円形を呈し，埋土は建物－１と類似する黄褐色粘質土である。以上のように，本遺構は攪乱のため，本来の姿を復元することは困難であるが，掘立柱建物－１との共通点も考慮に入れると，東西３間（454cm），南北２間（274cm）の建物の可能性も考えられる。しかし，ここでは確認された柱穴が少ないため，柱穴列として取り扱っている。

所属時期は，共伴遺物が認められないため不明確であるが，長軸方向・柱穴の形状および埋土・検出面などの点で建物－１と共通しており，同建物と関連性をもつ一連の構造物である可能性が非常に高いことから，同時期と判断し，古代末～中世初頭としたい。

柱穴列－２（図19）

ａ地区，柱穴列－１の南側，ＣＸ23・24区に位置し標高79～84cm，〈７〉層で検出された。

東西方向に柱穴が４ヶ所確認されており，軸の方向はＮ－100°－Ｅを示す。規模は東西541cmを測り，柱間距離は西から183cm・167cm・191cmである。柱穴はいずれも径25～30cmの円形を呈し，深さは柱穴３がやや浅いが他は30～36cmである。埋土は柱穴１・３は黄褐色粘質土，柱穴２・４は赤黄褐色～暗灰褐色粘質土で，やや相違が認められる。柱穴５は柱穴１・３と共通の埋土で，また，柱穴５から直角に南に振った位置にも同様の埋土が充満する柱穴があることから，柱穴５が本遺構の北東隅をなす可能性も残る。

伴出遺物がなく，時期は不明瞭であるが，周囲の状況から古代末～中世初頭に属すると考えられる。

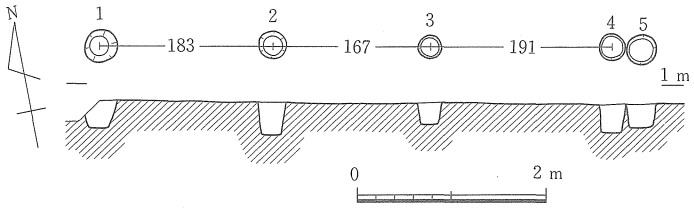


図19　柱穴列－２　縮尺１/80

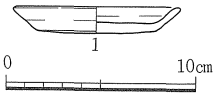
柱穴列－３（図20）

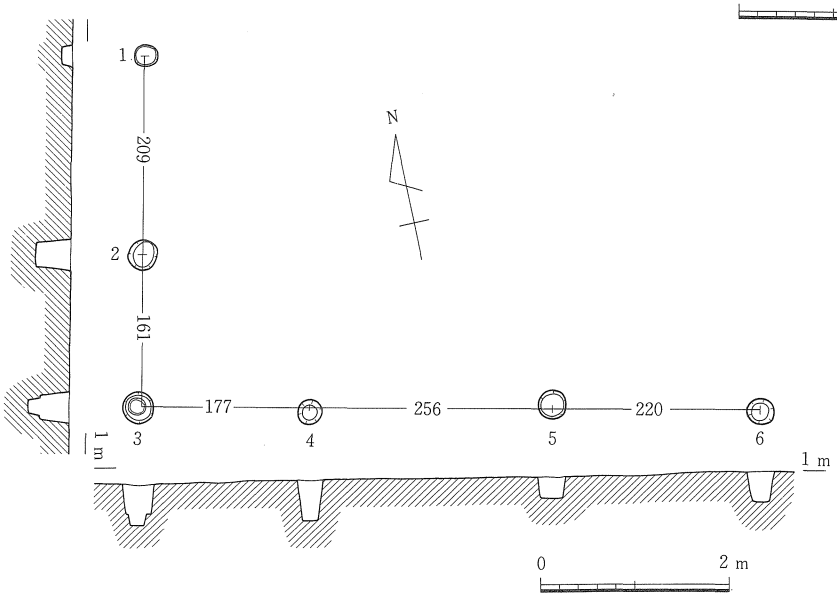
ａ地区，ＣＸ24，ＣＹ23・24区において標高82～99cm，〈７層〉で検出された。

柱穴は東西方向に４ヶ所，南北方向に３ヶ所がそれぞれ確認された。東西ラインと南北ラインは直交しており，長軸（東西）方向はＮ－101°30′－Ｅを示す。柱間距離は柱穴１と２の間が209cm，柱穴２と３の間が161cm，柱穴３から６まででは，西から177cm・256cm・220cmを測る。柱穴は径25～30cmの円形を呈す。深さは最も浅い柱穴１が12cm，最も深い柱穴３・４が44cmを測る。また，柱穴３では柱痕が確認されており，柱穴１～５においてもその可能性が認められている。埋土は柱穴１～５では赤黄褐色粘質土，柱穴６では淡黄褐色土である。このように柱穴１～５については柱痕を有する可能性が高く，埋土も共通するのに対して，柱穴６はその様相をやや異にすることから，東西ラインは柱穴５までの可能性も残る。

遺物は柱穴５から土師質小皿（１）のほか中世土器片数点が出土している。

以上のことから，本遺構は中世初頭に属する，東西３間（753cm）・南北２間（370cm）のＬ字形の柱穴列と考えられる。他の遺構との関係では，柱穴１～５の埋土が，前述の柱穴列－２の柱穴２・４の埋土と共通する点や軸の方向の近似性などから，柱穴列－２と関連性が高いことが想定される。





遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師質 小皿	(8.8)	6.3	1.4	底部外面篦キリ，他は横ナデ，ロクロ回転㊧	淡黄褐	細砂

図20　柱穴列－３，出土遺物　縮尺１/80，１/４

柱穴列－４（図21）

ａ地区，ＤＡ22区において検出された。溝－７と８がほぼ直交するコーナー部に位置する。検出面は柱穴６～８が標高78cm，〈８層中〉，柱穴４が標高90cm，〈７～８〉層である。

柱穴列としては柱穴１～８を考えている。長軸（東西）方向はＮ－107°－Ｅを示し，南北軸とは直交する。規模は西辺で205cm(柱穴３ヶ所)，南辺で424cm(柱穴４ヶ所)，北辺で404cm(柱穴３ヶ所)を各々確認している。柱間距離は西辺では北から95cm・110cm，南辺では西から162cm・127cm・135cm，北辺では西から250cm・154cmを測る。柱穴は径20～30cm・深さ20～30cmのものが主流で，底面高はいずれも標高約60cmで揃っている。埋土は黄褐色土を中心とする土層でいずれも類似性は高い。遺物は出土していない。

柱穴９・10は，南辺および北辺からそれぞれ直角に振った位置に確認された柱穴である。柱

穴の諸状況は他のものと類似しており，本遺構の東辺を構成する可能性はあるが確実性は低い。本遺構は周辺の状況から古代末～中世初頭と考えられる。

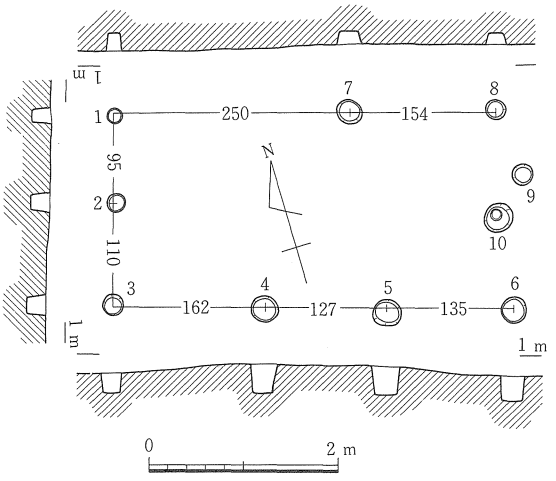


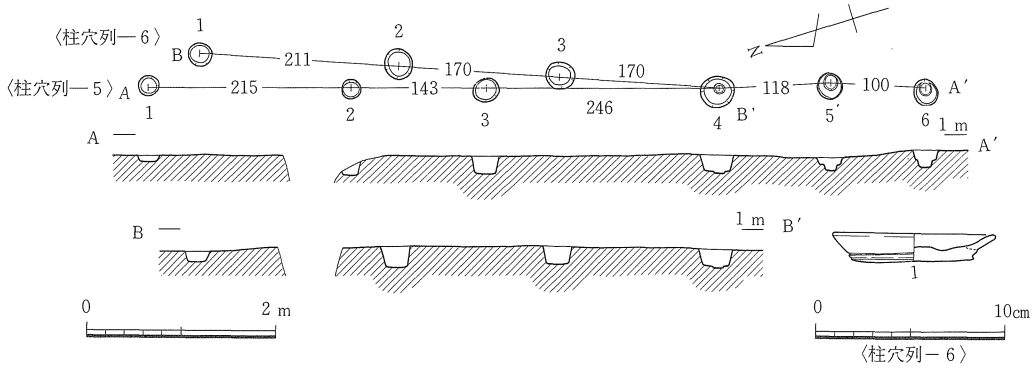
図21 柱穴列－4 縮尺1/80

柱穴列－5・6（図22）

ＣＷ・ＣＸ19区において，柱穴列－5は標高70～80cm，同－6は標高80cm前後，〈7～8〉層で検出された。

柱穴列－5はＮ－17°20′－Ｅ，柱穴列－6はＮ－21°15′－Ｅの軸方向をそれぞれ示す。両列の規模は前者が822cm（柱穴6ケ所），後者が451cm（柱穴4ケ所）である。いずれの柱穴も径25～30cmの円形を呈し，底面高は前者で標高60cm前後，後者で標高60～65cmである。埋土は前者の柱穴1～3では（暗）灰褐色土，柱穴4～6および後者の柱穴1～3では暗灰褐色砂質土を示す。また，柱穴4～6で確認された柱痕についても，柱穴3（柱穴列－6）でその可能性が認められた。出土遺物は両列とも、各々柱穴1の上面から土師質の小皿などの破片が出土している。

以上のことから，当初は長さ822cmを測る柱穴列－5が溝－12の西側に構築され，その後柱穴1～3の部分が改修によって，方向をやや東に振った形で柱穴列－6の柱穴1～3に替わり，柱穴4～6については柱穴列－5を踏襲したと考えられる。柱穴列－6の柱穴1～4の距離は451cmである。所属時期は出土遺物から中世に含まれる。



遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師質 小皿	8.7	6.5	1.6	底部外面篦キリ，他は横ナデ，ロクロ回転㊧	淡黄褐	細砂，赤色粒

図22 柱穴列－5・6，出土遺物 縮尺1/80，1/4

c．井　戸

井戸－1（図23・24，図版6・7）

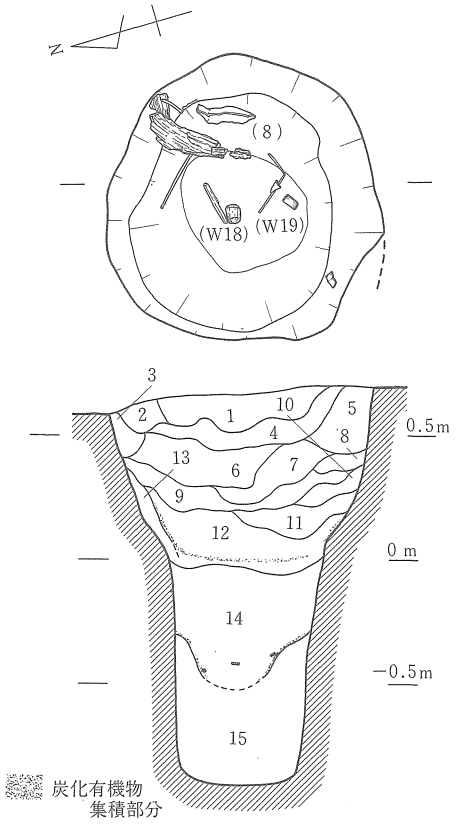
本遺構はa地区の北半中央部，柱穴列－1の東側で検出された。CW23区である。後世の大規模な攪乱で西半部分の上半は大きく破壊されている。東半部についてはかろうじて島状に残った部分にかかっており，標高70cmで検出できた。

現状での形状および規模は，平面形が長軸115cm・短軸111cmを測る円形で，深さは東半部で検出面下160cmである。掘り方は，上半部は擂鉢状に開いており，検出面から約60cm下の辺り（標高0m）で屈曲し，以下ほぼ垂直に灰色湧水砂層まで掘り込まれている。底面高は標高－91cmで，底面形は径約50cmの不整円形を呈する。

埋土は大きく上部層（1～9層）と下部層（10～15層）とに二分される[註26]。上部層の特徴は炭化物を多量に含むことである。そのため黒色を強める層が多いが，灰褐色土を基本としている。炭化物は井戸の中央部に特に厚く堆積しており，井戸内周辺部には炭化物を含まない層が挟まれる。4・9層では炭化物の薄層状堆積がみられる。また，上部層のうちでも上半にあたる1・4・6層では炭化物に加えて焼土も含まれる。9層の炭化物の性格については，灰像分析の結果，稲藁であることが判明してる[註27]。

下部層は灰色粘土を基本とする。11～14層では，上部層とはやや質の異なる炭化物を多く含む。12層では厚さ1cm弱のムシロ状の炭化物が，14層では木質状の炭化物がそれぞれ下面に集積して確認された。また，本井戸は埋土中に流入土などが認められないことから，本来の掘削面は，現状より，少なくとも20～30cmは上と考えられる。

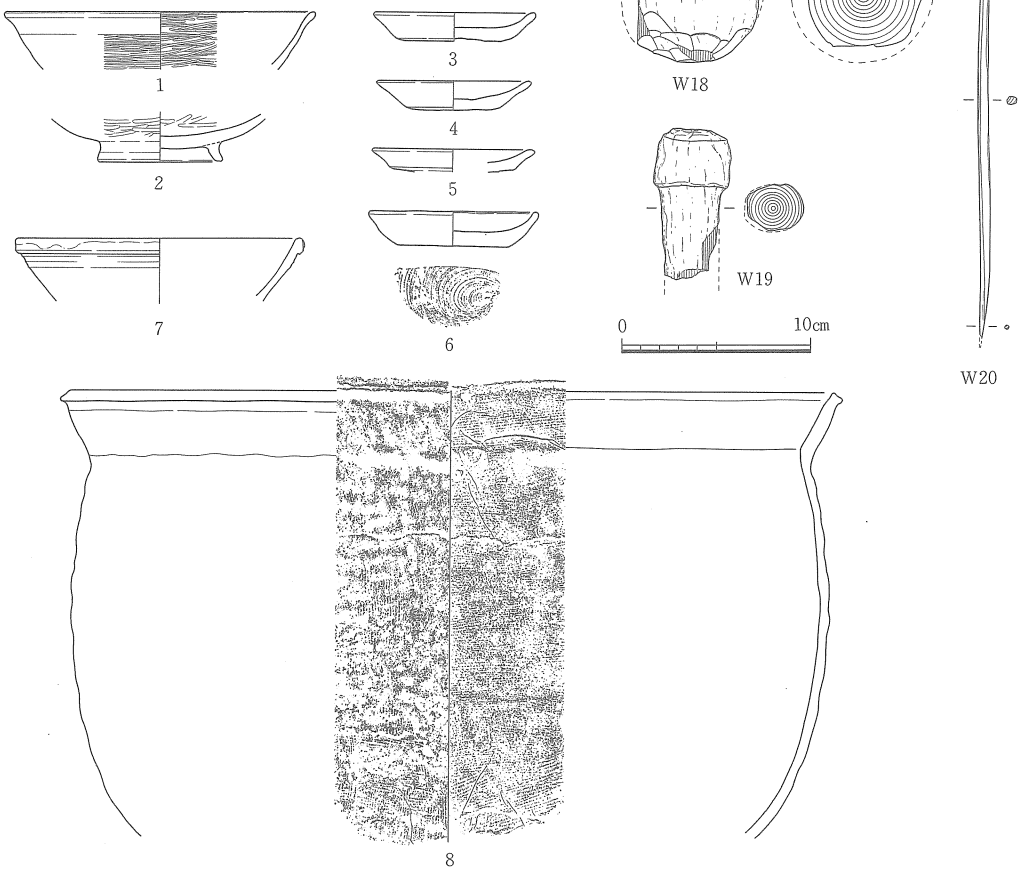
遺物は，上部層では炭化物層を中心に出土する。土師質高台付椀（1・2）・小皿（4・6）・鍋



1　黒色土（炭過多，焼土・土器，軟質）
2　灰褐色土　（Fe）
3　淡灰色
4　暗青灰色土（炭多，焼土・土器）
5　青灰褐色土（Fe）
6　暗灰褐色土
　（炭多，焼土，黄灰・青灰色土粒）
7　黒色土　（炭過多）
8　淡灰色土　（Fe）
9　黄褐色土　（炭・Fe多，土器）
10　暗灰色粘土（炭少）
11　淡灰色粘質土（炭下半に多）
12　淡灰色粘土
　（炭下半に多，ムシロ状炭化物）
13　暗灰色粘土（黄灰色粘土）
14　淡灰色粘土（炭化物多）
15　暗灰色粘土

図23　井戸－1　縮尺1/30

（8），白磁碗（7）などがあるが，量は少なく，大半は小～細片である。鍋（8）は掘り方に沿って，落ち込むような状態で9層下面の炭化物層内から出土した。下部層では土器は一層少なく，14層中から土師質小皿（3・5）などが出土した程度である。その他では，木器・木片が出土



遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師質 椀	(16.4)	－	－	内外面細かい篦ミガキ，口縁部外面横ナデ，小破片	淡灰白	細～粗砂
2	〃 〃	－	6.6	－	〃 篦ミガキ（不鮮明），底部外面ナデ，高台部横ナデ，二次焼成痕	(内)淡黄灰 (外)暗灰褐	細砂㋑，細礫㋑
3	〃 小皿	(8.6)	(6.0)	1.5	摩滅で不明	淡黄白～淡黄灰	細～粗砂
4	〃 〃	(8.2)	(5.0)	1.5	底部外面篦キリ，全面摩滅で不鮮明	淡灰白	細砂
5	〃 〃	(8.6)	(6.7)	(1.2)	〃 〃，他は横ナデ，ロクロ回転㋐	淡黄白～淡赤白	〃
6	〃 〃	(9.0)	5.8	1.85	〃 糸キリ，〃 ，〃 〃	(内)灰褐 (外)淡赤白	〃
7	白磁 碗	(15.3)	－	－	内外面横ナデ・施釉（口縁部に厚い）	淡灰白	緻密，黒色粒
8	土師質 鍋	(40.6)	－	－	内面横ハケ，外面縦ハケ（下半縦＋横）・押圧・煤付着，口縁部外面押圧	暗茶褐	細砂㋑

遺物番号	器種	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	形態の特徴
W18	毬	7.6	7.4	6.6	コナラ属クヌギ節	丸木の両端を加工し，球状に整える．遊具．芯持材
W19	加工品	8.0	4.1	3.5	クロマツ	円柱状の材に緩やかな段をつけ，一方を細く削っている．栓か．芯持材
W20	箸	21.4	0.6	0.4	ヒノキ	両端に向かって，細く削り込む

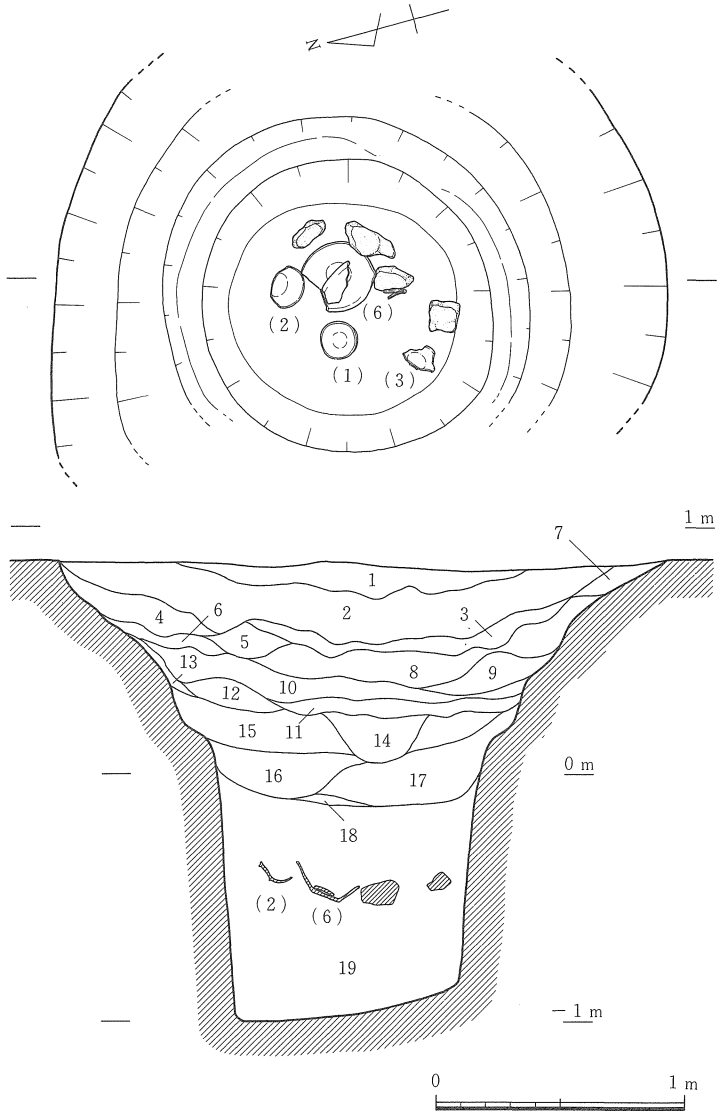
図24　井戸－1　出土遺物　縮尺1/4

している。木器は14層下面の炭化物集積部分に認められた。両端を加工した毬状のもの（W18）や箸状のもの（W20）などが挙げられる。

本井戸の廃棄時期は出土遺物から古代末～中世初頭（12世紀代）と考えられる。

井戸－2（図25・26，図版8・9）

本遺構はb地区の南半部分，ＣＳ・ＣＴ27・28区で検出された。西半部分は後世の大規模な攪乱によってその上半を削平されている。また，東端部分についても調査区外に延びるため，



1　淡黄灰色粘土（褐色土塊少）
2　茶褐色粘土
　（黄色粘土・〈7〉層土塊）
3　暗灰褐色粘土（Fe）
4　暗黄灰色粘土
　（土器・Mn・Fe）
5　淡黄白色粘質土
6　茶褐色土　（Fe）
7　淡茶褐色土
　（土器・炭・Fe・Mn）
8　淡灰褐色粘土（土器・炭）
9　淡灰褐色粘土（Fe）
10　灰褐色粘質土（土器・炭）
11　淡黄灰色粘質土（Fe，軟質）
12　淡黄灰色粘土
13　灰色粘土　（炭・Fe）
14　淡灰色粘土（上面に炭）
15　灰色粘土
16　暗灰色粘土（軟質）
17　〃
　（有機物多・土器）
18　暗灰色粘土
19　〃
　（土器・有機物）

図25　井戸－2　縮尺1/30

一部確認できなかった。検出面は標高85cm，〈7〉層上面である。

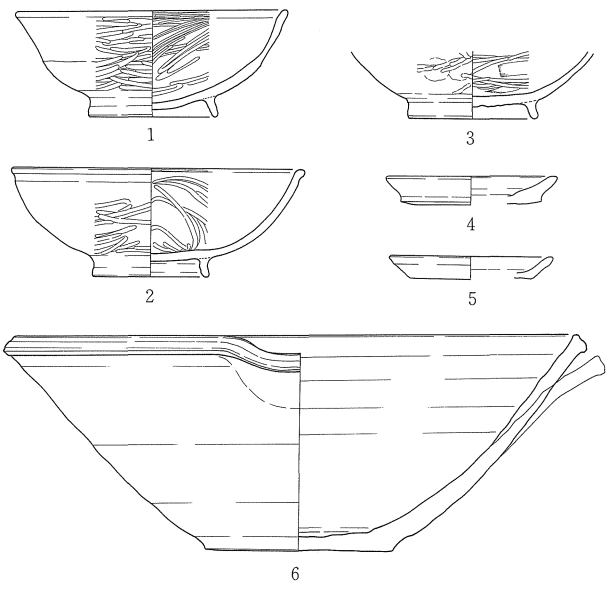
平面形は，現状では南北方向が246cm，東西方向が143cm（残存値）を測り，南北方向に軸を有す楕円形が推定される。掘り方は，深さ85cm（標高０ｍ）辺りに大きな屈曲が認められ，上方に向かっては約45°で段を持ちながら開き，下方に向かってはほぼ垂直に掘り込まれる。深さ約185cm（標高約－１ｍ）で灰色湧水砂層に達し，径約90cmの円形の底面をなす。

埋土は大きくは上部層（１～13層）と下部層[註28]（14～19層）に二分され，さらに，上部層は二つに細分可能であることから，ここでは，上層（１・２層），中層（３～13層），下層（14～19層）に分けて説明したい。

上層は茶～黄褐色粘土で，〈7〉層の土粒あるいは土塊が包含される特徴がある。中層と明瞭に分かれ，流入土と判断される。中層は灰褐色系の粘質土でブロック状の堆積層が多い。炭化物は，中央部に比較的多く含まれるが，全体としては非常に少ない。下層は灰～暗灰色粘土で17・19層は有機物を多量に含む。19層下半の有機物中にはコギシギシ・マクワウリ・キカラスウリ・センダンといった種子および炭化米・炭化大麦が検出された[註29]。

遺物は上層から土師質小皿（５）などが出土しているが，量的には少ない。中層では上層よりは量的には多いが，図化不可能な小～細片である。下層では，個体数は少ないが大形破片が多い。標高－50cm辺りで土師質高台付椀（２・３）・小皿（４）・須恵質鉢（６）が角礫を伴って，また，底面では完形の土師質高台付椀（１）が出土した。

本井戸の廃棄時期は共伴遺物から古代末～中世初頭（12世紀代）と考えられる。



遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師質 椀	14.4	6.9	5.7	内面ナデ後篦ミガキ，外面横ナデ後篦ミガキ㊀，底部外面ナデ	淡黄白	細砂㋑，精良
2	〃 〃	15.6	6.2	5.8	〃 〃 〃 ㊀，外面押圧篦ナデ後篦ミガキ㊀，底部外面押圧	淡黄灰白	粗砂
3	〃 〃	－	6.9	－	内面工具使用ナデ後篦ミガキ㊀，外面押圧後篦ミガキ㊀，底部外面押圧	〃	細砂
4	〃 小皿	(9.1)	(7.5)	1.5	強い横ナデ，底部外面篦キリ	淡乳灰白	微砂㋒，赤色粒
5	〃 〃	(8.7)	(5.6)	1.2	横ナデ，底部外面篦キリ	明橙～乳白	微～細砂，赤粒㋑
6	須恵質 鉢	29.9	10.0	11.6	〃，底部外面糸キリ後ナデ，内面下半は使用により摩滅	㈠淡灰 ㈡暗灰	微砂㋒

図26　井戸－２　出土遺物　縮尺１/４

d．土　壙

［a地区］

本地区では，７層下面（A･C-1層）・７層上面・６層中・5･層上面において，14基の土壙が検出された。

A･C-1層中では４基の土壙（土壙－１～４）が検出された。いずれも調査区南半部の河道上に認められる。ある程度，一定した形状を保つもの（土壙－３・４）もあるが，中には非常に不整形で土壙の機能に疑問をもたされるもの（土壙－１・２）も存在する。本層は河道上面に短期間の内に繰り返し堆積した土層であり，時期は，７層堆積直前の古代末～中世初頭が考えられる。土壙－２は土壙－１と諸状況が近似しているため，ここでは説明を省略している。

７層上面では６基の土壙（土壙－５・６・11～14）が検出された。所属時期は古代末～中世である。分布状況は比較的高位部で安定した北半部に多く，形状は一定しない傾向がある。

６層中で確認された１基（土壙－９）は，その上面を削平されており，諸状況から，本来の掘削面は５層上面にまで上がると考えられることから，上層では４基の土壙（土壙－７～10）が存在すると判断される。土壙の分布は調査区全域に広がり，形状は楕円形に近い形をとる傾向が認められる。

土壙－１（図27）

ＤＢ16・17区において標高76㎝，〈A-1〉層で検出した。遺構密度が非常に低い調査区南東部に位置する。

平面形は，直線的な北面に対して，南面は西半部分が南に丸く張り出し，不定形な形状となっている。東西74㎝，南北は西半部で38㎝・東半部分で50㎝を測る。凹凸をもつ底面は標高56㎝前後の位置にあり，深さは６～10㎝を示す。

埋土は単一層で，マンガンが多く沈着した暗灰褐色粘質土層が充満する。本土壙の上部被覆層の〈７〉層に非常に類似した土である。出土遺物は僅少で，詳細な時期決定には不十分であるが，検出面を考慮に入れて，古代末～中世初頭と考えたい。

本土壙の性格は，形状が非常に不整形であることに加え，掘り方にも凹凸が認められ，深さも一定していないことなどの点から，人為的な遺構とは考え難い要素も多く，河道上のやや深い窪み部分であった可能性も考えられる。

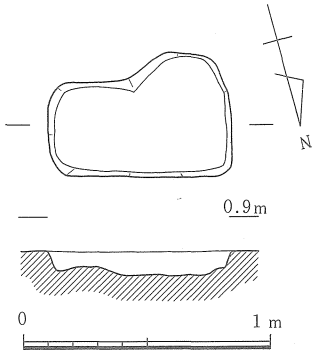


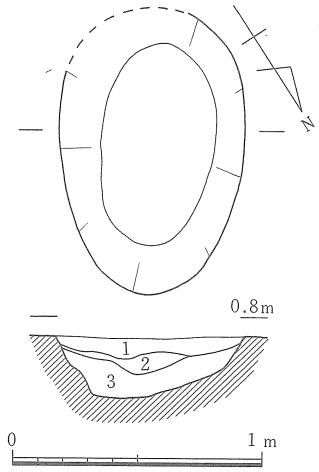
図27　土壙－１　縮尺１/30

土壙－3（図28）

ＤＡ21区において標高約73cmの面で検出された。〈C-1〉層中である。南端部を溝－８によって破壊されている。

平面形は南北115cm（推定），東西74cmを測る南北に長い楕円形を呈す。底面は平坦ではなく傾斜を持ち，最深部で標高47cm，深さ約25cmである。埋土はいずれも灰色土粒を含む褐色系の砂質土で，特に，３層は全体的に汚れている。

所属時属期は，遺物が全く出土していないため，確定できないが，検出面や遺構などの関係から古代末～中世初頭と考えられる。



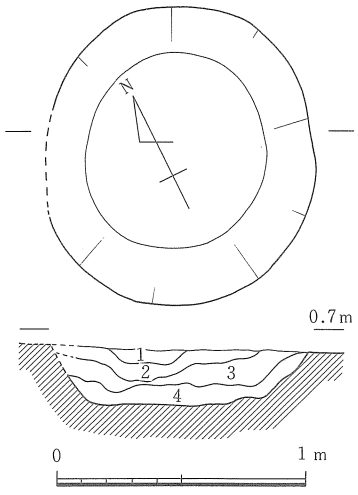
1　灰褐色砂質土（Mn・Fe多）
2　淡灰褐色砂質土（灰色土粒）
3　暗灰褐色砂質土（灰色土粒・Mn・Fe多）

図28　土壙－3　縮尺1/30

土壙－4（図29）

ＤＢ・ＤＣ22区において，標高70cm前後の面で検出した。〈A-1〉層中である。遺構の西南部分の一部をピットによって破壊されている。

平面形は径120×108cm（推定）を測る東西にやや長い円形を呈す。深さは約22cmで，底面高は標高39cmである。埋土は灰褐色系の粘質土で，一部に鉄分を含む。また，上層（１・２層）は炭化物を比較的多く含む。本土壙の時期は，中世土器と考えられる土師器片がごく僅かではあるが出土していること，そして，検出面を考慮すると，古代末～中世初頭と考えられる。



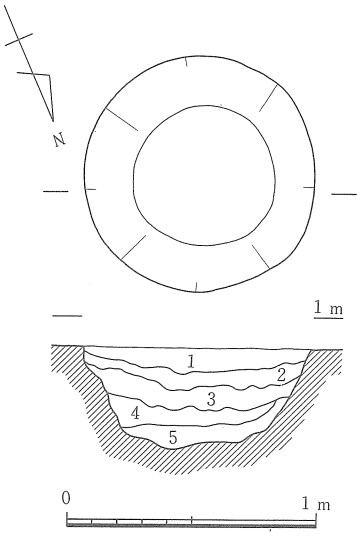
1　灰褐色粘質土（炭多）
2　黄灰褐色粘質土（炭）
3　赤黄灰褐色粘質土（Fe多）
4　赤黄褐色粘質土

図29　土壙－4　縮尺1/30

土壙－5（図30）

ＣＴ25区において，標高88cm，〈７〉層上面で検出した。溝－11の上部に位置する。

平面形は，径95×93cmを測る円形を呈し，深さは約41cm，底面高は標高約47cmである。掘り方は全体的に少し



1　淡灰褐色土（Mn多）
2　淡黄灰色土（Fe多）
3　黄灰褐色土（Fe過多）
4　暗灰褐色粘質土
5　淡灰色粘質土（Fe過多）

図30　土壙－5　縮尺1/30

凹凸を持つ。埋土は，下半は粘質を帯びる傾向があり，鉄分の沈着が２・３・５層に顕著であるほかは各層間に大きな差は認められない。

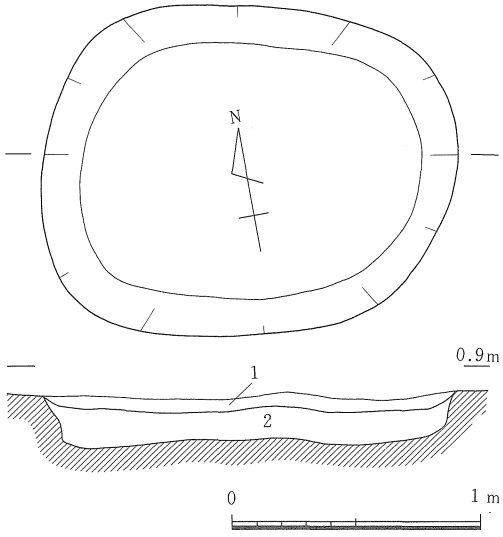
遺物は全く出土していないため，本遺構の時期決定は困難であるが，周囲の状況を考慮に入れると，中世に属する可能性が考えられる。

土壙－６（図31）

ＣＵ23・24区において，標高約80cmの面で検出した。〈７〉層上面である。

東西方向に軸を有し，長軸167cm，短軸133cmを測る比較的大形の楕円形土壙である。深さは20cm前後で，底面高は標高60cm前後を示す。掘り方はやや不明瞭である。

埋土は上半が茶褐色土で土器・マンガンを含む。また，下半は灰褐色粘土で黄色粘土粒・鉄分を多く含む。遺物は上面から出土している。中世土器片に混ざって古代の遺物も含まれるが，混入物と判断され，所属時期は古代末～中世と考えられる。



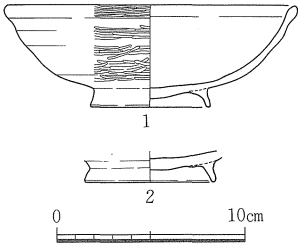
1 茶褐色土（土器・Mn多）　2 灰褐色粘土（黄色粘土・Fe多）

図31　土壙－６　縮尺１/30

土壙－７（図32・33，図版10）

ＤＢ23区において，標高95cm前後の面で検出した。〈５〉層上面である。溝－８・土壙－８の上部に位置する。

東西に軸を有し，長軸103cm（推定），短軸84cmの隅丸方形を呈す。深さは24cmを測り，底面高は標高73cmである。掘り方は比較的緩やかな立ち上がりを見せる。埋土は単一層で，やや砂質を帯びた暗青灰褐色土が充満する。鉄分・マンガンを多く含み，やや汚れているが，炭化物などの包含物は認められない。底面にはほぼ中央に約15cm角の焼石が，そして，そのやや南方，



遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師質 椀	(15.5)	6.3	5.4	内面ナデ，外面篦ミガキ・下端は篦ケズリ，底部外面ナデ(砂粒の動き)	淡黄白	細～粗砂
2	〃 〃	－	7.0	－	底部外面ナデ	〃	微砂

図32　土壙－７　出土遺物　縮尺１/４

壁際に土師質高台付椀１個体が潰れた状態で検出された。

時期は出土遺物から中世初頭（12世紀末）と考えられる。

検出面は〈５〉層上面であるが，この面では時期的に新しいと考えられる遺構も検出されていることから，本来の掘削面はより上層にあり，新しい段階に上部が削平された可能性が強い。

土壙－８（図33・34，図版10）

ＤＡ23区において，標高約100㎝前後の面で検出された。検出面は〈５〉層上面である。南端部は土壙－７によってその一部を破壊され，また，溝－８を破壊してその上部に作られている。

東西方向に軸を有し，長軸250㎝，短軸104㎝（推定）の長楕円形を呈す。深さは42㎝前後，底面高は標高約58㎝を測り，掘り方の立ち上がりは土壙－７よりは急傾斜をなし，特に，短軸方向については，直角に近い角度を示し，断面台形を呈す。

埋土は五分割される。１層は灰褐色土で鉄分・マンガンは少ない。２層は茶灰褐色系の粘質土で下半は鉄分・マンガンが多い。３層は淡灰褐色砂質土でやや目が粗い。４層は黄茶褐色砂質土，５層は灰茶褐色砂質土で，いずれも目が粗く，炭化物を多く含む。４層と５層はこのよ

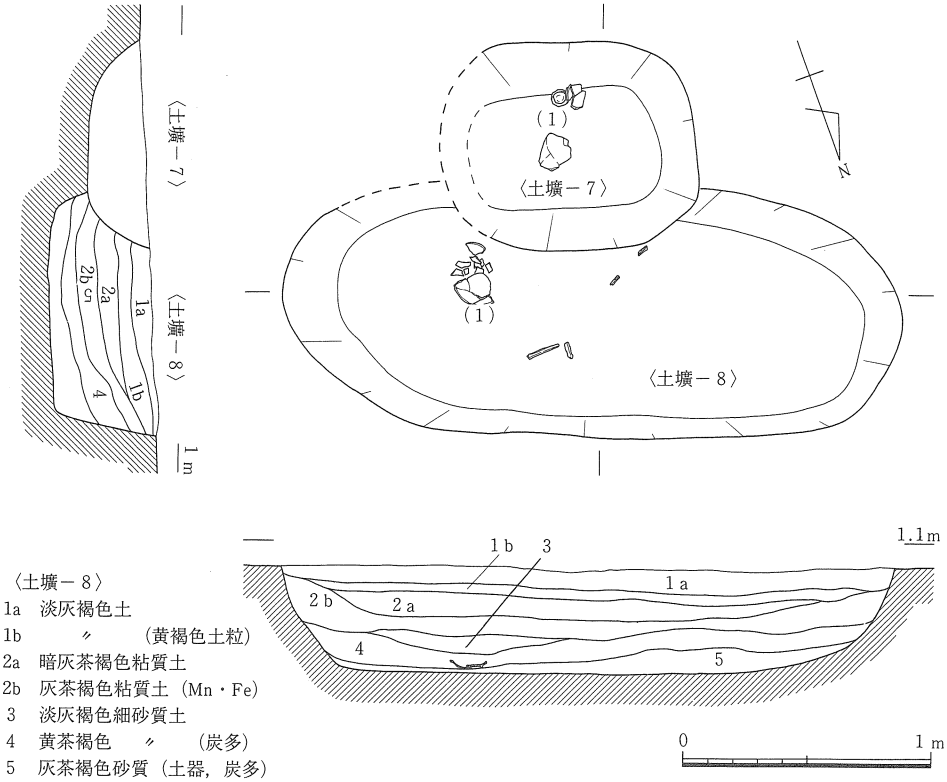
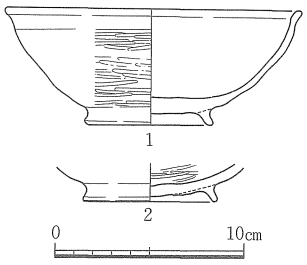


図33　土壙－７・８　縮尺１/30

うに類似しているが，５層上面で土師質高台付椀が検出されたことから，上面を本土壙の床面と考えて区別した。５層上面高は東半部が標高約50cm，西半部が約55cmを示し，東に向かって傾斜している。遺物は前述のように５層上面で，東端から約80cmの位置に完形の土師質高台付椀（１）が潰れた状態で検出された。この遺物は原位置を保っていると判断される。他には，遊離した状況で少量の土器片・鉄器片・木片などが出土している。

時期は出土遺物から中世初頭（12世紀代）が考えられる。

本遺構は形状・規模・遺物出土状況などから土壙墓としての性格が想定される。



遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師質 椀	15.7	6.75	6.2	内面丁寧なナデ，底部外面ナデ・押圧，口縁部やや肥厚，重ね焼き痕	淡黄白	微砂
2	〃 〃	—	(7.1)	—	〃 篦ミガキ，外面不明，高台部横ナデ	淡灰白	細～粗砂◎

図34　土壙－８　出土遺物　縮尺１/４

土壙－９（図35）

ＣＷ22・23区において，標高80cm前後，〈６〉層中の面で検出された。後世の大規模な攪乱により，北東部と上面を破壊されている。そのため，本来の掘削面は不明確であるが，出土遺物が中世土器であること，〈６〉層上面に遺構がほとんど検出されていないことから〈５〉層上面の可能性が強い。重複遺構としては下部に溝－７がある。

平面形は東西に軸を有する楕円形を呈す。長軸126cm，短軸80cm（推定），深さ約20cmを測り，底面高は標高約65cmである。埋土は単一層で黄色土粒・淡灰色土粒を少し含む黄褐色土層である。

所属時期は，出土遺物から，中世に属すると考えられる。

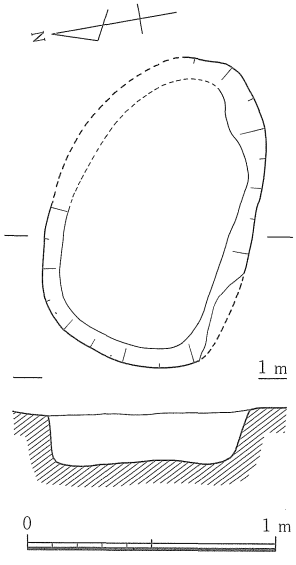


図35　土壙－９　縮尺１/30

土壙－10（図36）

ＤＢ18区において，標高約100cm，〈５〉層上面で検出された。非常に遺構密度の希薄な地区である。

平面形は東西108cm，南北95cmを測る不整円形を呈す。掘り方断面は皿状を呈し，底面高は標高75cm前後で，深さは約15cmである。

埋土は単一層で黄灰～灰色の粘質土である。鉄分が多く

マンガンもブロック状に散在する。遺物は少量であるが，土師質高台付椀や須恵質土器などの小片が含まれ，所属時期は，中世と判断される。

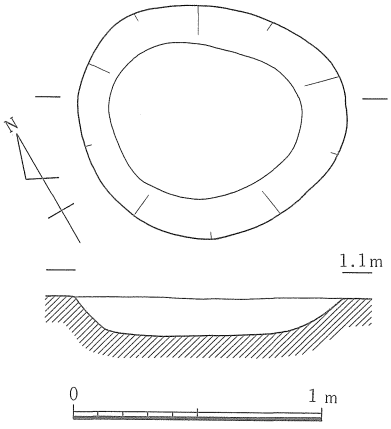


図36　土壙－10　縮尺1/30

土壙－11（図37）

ＣＴ20区において，標高80㎝前後の面で検出された。〈7〉層上面に対応すると考えられる。西側面を溝－13によって破壊されている。

平面形は南北に軸を有す長楕円形を呈す。長軸93㎝，短軸45㎝（推定），深さ28㎝を測る。埋土は上層が淡黄褐色砂質土で砂質が強い。下層は灰黄褐色砂質土で鉄分が多く，白色砂質土が混在する。上下層間の差は小さい。

本土壙の時期決定は出土遺物が全くないため不明確であるが，検出面から古代末～中世と考えたい。

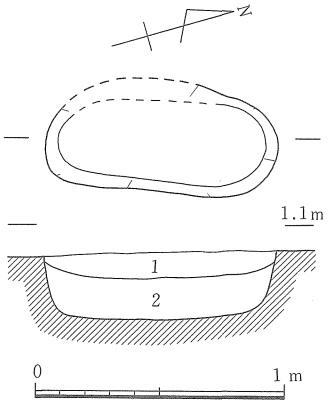
土壙－12（図38）

ＣＺ・ＤＡ21区において，標高95㎝前後，〈7〉層上面で検出された。溝－4の東部分に位置し，また，北東隅の一部には後世のピットが重複している。

平面形は径71㎝の円形を呈す。底面は平坦ではなく，ボール状にカーブしており，中央部が最も深く，標高48㎝を測り，深さは約48㎝である。

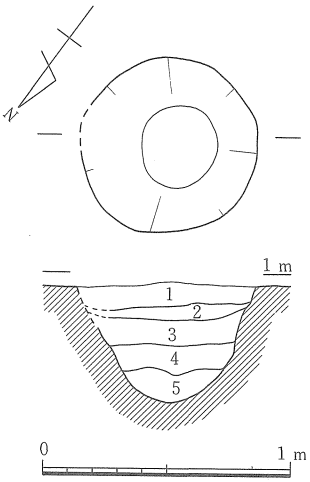
埋土は上半が砂質土層，下半が砂層となる。

遺物は僅少であり，古代と考えられる須恵器の細片もあるが，混入物と判断されることから，本土壙の時期は，検出面などから古代末～中世に属すると捉えられる。



1　淡黄褐色砂質土
2　灰黄褐色砂質土（白色砂土・Fe）

図37　土壙－11　縮尺1/30



1　淡青灰色砂質土
2　淡赤灰色砂質土（Fe）
3　淡灰褐色細砂質土
4　黄灰色微～細砂（Fe）
5　灰色細砂

図38　土壙－12　縮尺1/30

土壙－13（図39・40，図版11）

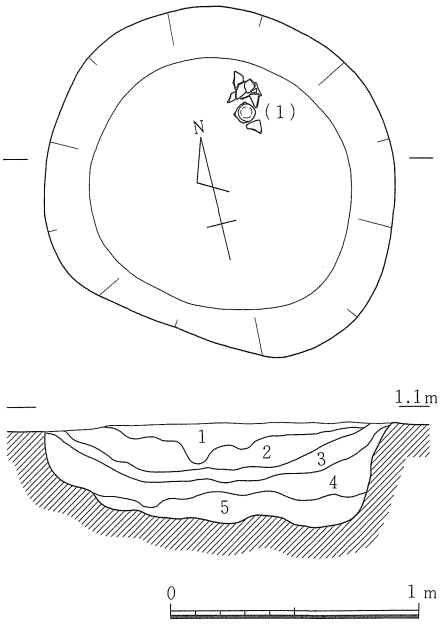
ＣＹ25区において，標高約100cmの面，〈7〉層上面で検出された。

平面形は径150×130cmの不整円形を呈する。深さは37～42cmを測る。底面高は標高42～49cmに位置し，小さな凹凸が認められる。

埋土は基本的には各層間に大きな差は認められない。1・2層はやや砂質を帯び，マンガンが多く，3～5層は粘質を帯び，鉄分が多く沈着しており，上方から下方に向かって粘質を強める傾向がある。包含物では炭化物が1・3層で多く認められ，5層においても黒色の汚れとして現れている。

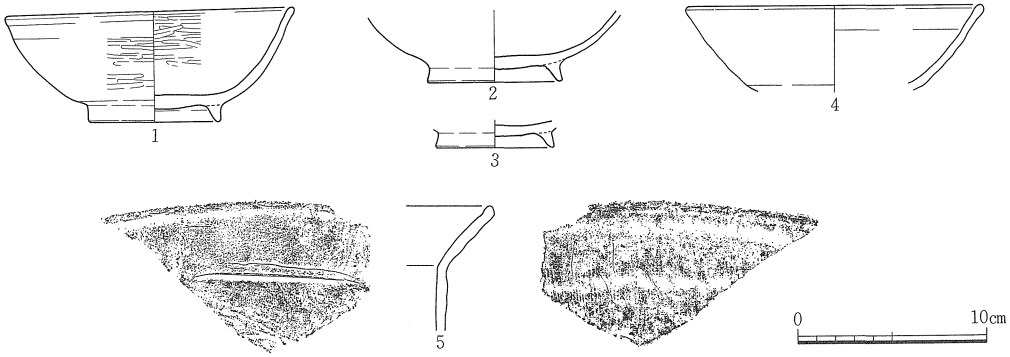
遺物は全体的に含まれているが，特に，2層において大形破片が検出された。他の土壙に比べると比較的遺物量は多い。

時期は出土遺物から中世に属し，12世紀代と考えられる。



1　灰褐色砂質土（炭多）
2　黄褐色砂質土（土器，Mn）
3　灰褐色粘質土（炭多，土器）
4　暗灰褐色粘質土（Fe）
5　暗黄褐色粘質土（Fe）

図39　土壙－13　縮尺1/30

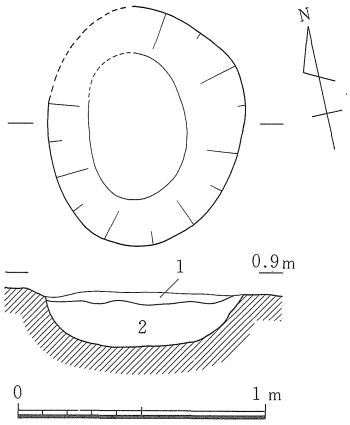


遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師質　椀	15.2	7.0	6.0	内外面篦ミガキ（やや摩滅），底部外面押圧，内面重ね焼き痕	淡黄白	細砂
2	〃　〃	－	7.1	－	〃　ナデ，底部外面押圧	〃	〃
3	〃　〃	－	6.3	－	全面摩滅で不鮮明	〃	粗砂
4	須恵質　〃	(15.8)	－	－	内外面ナデ，口縁部外面重ね焼きによる変色（黒色化）	淡灰白	細砂㋐
5	土師質　鍋	－	－	－	内面細かいハケメ，外面ハケメ後押圧・煤付着，口縁部横ナデ	暗茶褐	細～粗砂

図40　土壙－13　出土遺物　縮尺1/4

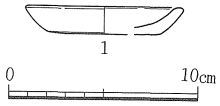
土壙－14（図41）

ＣＶ26区において，標高80～85cmの面，〈7〉層上面で検出した。北西隅の一部をピットによって破壊されている。



平面形は，径が97×79cmを測る不整円形を呈し，深さは検出面から約22cmとなる。底面高は標高約60cmである。埋土は，その大半を２層（灰色粘質土）が占め，上部を覆う状態で１層（淡灰色土）が３cm前後の厚さで埋積している。本土壙の時期は，土師質土器が少量出土しているが，いずれも細片のため詳細な時期決定は難しく，遺物からは大きく中世の範囲で捉えたい。

1　淡灰色土
2　灰色粘質土（Fe）



遺物番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	土師質　小皿	(8.4)	(6.0)	1.45	摩滅で不明瞭	淡乳～黄白	細砂◎，赤色粒

図41　土壙－14，出土遺物　縮尺１/30，１/４

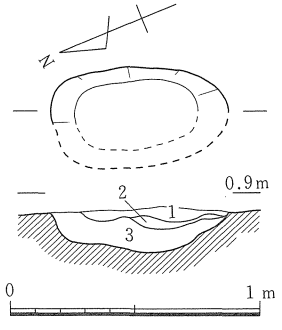
［b地区］

本地区では３基の土壙が検出された。検出面は，土壙－22・23が７層上面，土壙－24が５層上面である。埋土は各々の遺構の被覆層に近似しており，特徴的な包含物は認められない。遺物は土壙－24で僅かに出土しているが，それ以外では検出されていない。

土壙－22（図42）

ＣＮ28区において標高約80cmの面，〈7〉層上面で検出された。西半部は共同溝設置時の攪乱により，破壊されている。

平面形は南北方向に軸を持つ隅丸方形を呈すると予想される。長軸は70cm，短軸は残存部分で14cmを測る。深さは18cm，底面高は標高65cmである。埋土は灰褐色系の土で下半には炭化物が多い。本土壙は，遺物を伴わないため時期決定は困難であるが，検出面から中世の範囲に属すると考えられる。



1　淡灰褐色土
2　灰褐色土
3　暗灰褐色土
（炭多，土器）

図42　土壙－22　縮尺１/30

土壙－23（図43）

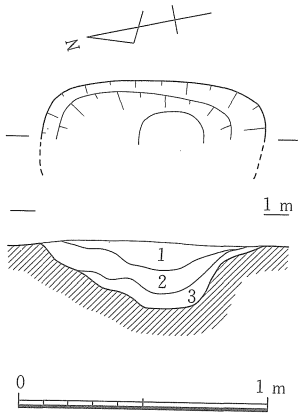
ＣＲ28区において，標高約88㎝の面，〈7〉層上面で検出された。西半部は既設共同溝設置時の攪乱によって，ほぼ半分を破壊されている。

平面形は南北に軸をもつ隅丸方形を呈すると考えられる。長軸は90㎝を測るが，短軸は約30㎝程度の部分が残存しているのみで不明確である。掘り方は平坦ではなく，段を有し，底部はやや南に片寄っている。深さは約30㎝を測り，底面高は標高62㎝である。

埋土は三分される。

１・２層は茶褐色系の土を基調とする。いずれも黄色土粒を含みマンガンの沈着が認められる。２層の方が，色調は暗くなる。また，１層は本土壙を覆う〈6〉層と色調的には類似している。

３層は黄灰褐色土で，鉄分の沈着が認められ，上層との差は明瞭である。



1　茶褐色土（黄色土粒，Mn）
2　暗茶褐色土（　〃　，〃）
3　黄灰褐色土（Fe）

図43　土壙－23　縮尺1/30

出土遺物が認められないため，遺構の所属時期は不明瞭であるが，検出面が本来の土壙掘削面と判断されるため，古代末～中世の時期が考えられる。

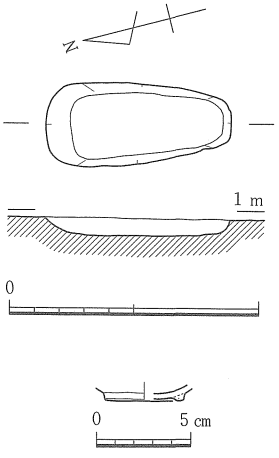
土壙－24（図44）

調査区の北端に当たるＣＯ27区において，標高約100㎝の面，〈5〉層上面で検出された。

平面形は南北方向に軸を有す長隅丸方形を呈し，長軸74㎝，短軸34㎝を測る。掘り方は浅い皿状を呈し，深さ約10㎝，底面高は標高約90㎝である。

埋土は淡青灰色粘質土の単一層で，本土壙の被覆層〈4〉層に類似する。遺物は僅少で，高台部が小形化した土師質高台付椀（1）などが含まれる。

本土壙の時期は中世（14世紀前半）と考えられる。



遺物番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	土師質　椀	－	(4.2)	－	内面摩滅で不明，外面押圧	内淡乳白　外黄褐	微砂

図44　土壙－24，出土遺物　縮尺1/30，1/4

e．溝

［a地区］

本地区では14条の溝状遺構が検出された。これらは検出面から三分（7層下面，7層上面，6層）される。7層下面検出の溝は6条で，いずれも調査区南半（DB線周辺）に集中し，主として東西方向あるいは蛇行する傾向をもつ。共伴遺物も僅少で，自然流路の可能性が強く，溝－14については説明を略した。7層検出の溝は7条で，調査区全域に存在する。溝の中には溝－7・8のように共伴遺物も多く，掘立柱建物群・井戸等と非常に関連した方向を示すなど，集落構成上重要な機能を果たしていた可能性が強い遺構が認められる。6層検出の溝は1条で，調査区北東隅で確認された。

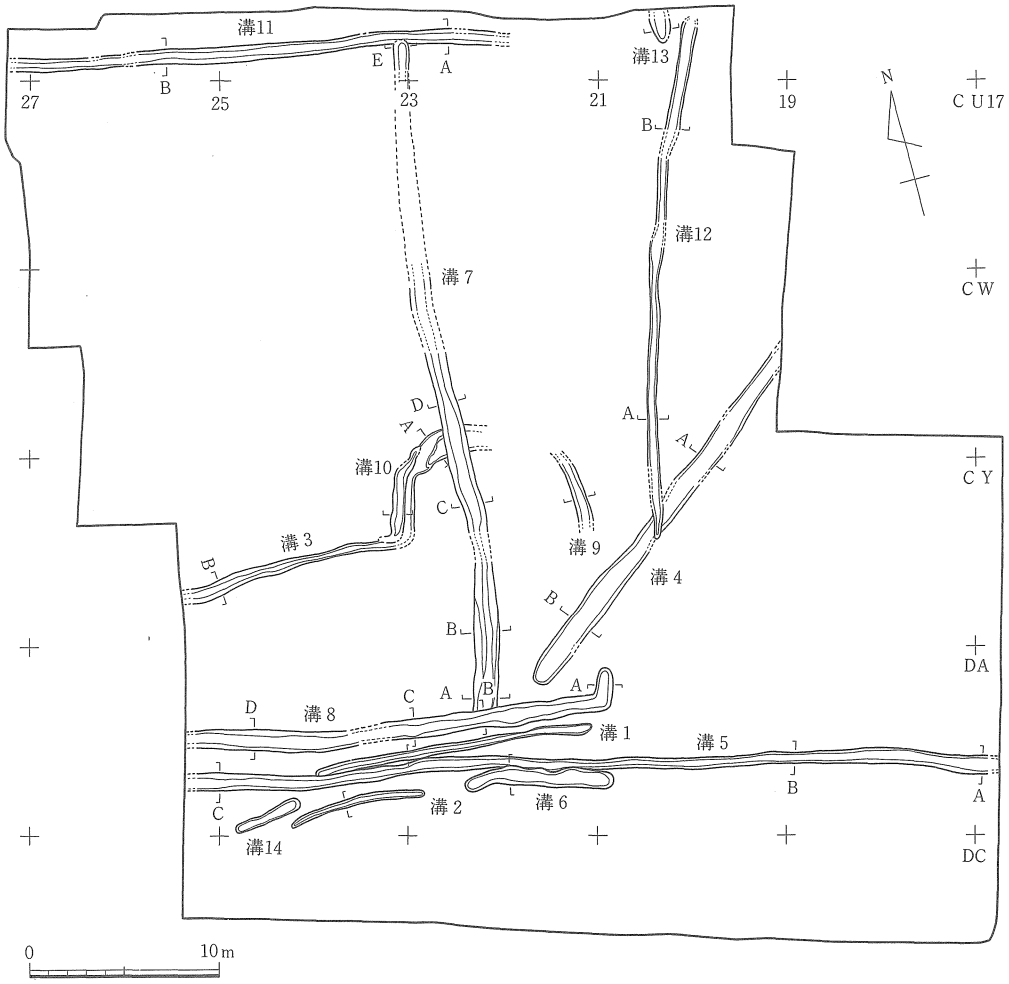
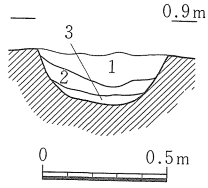


図45　a地区溝全体図・断面位置図　縮尺1/400

溝－1（図46）

ＤＡ21～ＤＢ23区において検出された。検出面は標高75cm，〈C-1〉層である。本遺構は砂と粘土が混在しながら急速に埋没した河道上に位置し，溝－５掘り込み層の下面から掘削されている。その上面もまた砂を少し含む黄灰色微砂土で覆われている。

幅は32～56cmでばらつきが認められるが，52cm前後が中心である。長さは14.8ｍで両端は緩やかに立ち上がる。方向はほぼ東西方向（Ｎ－95°－Ｅ），深さは約15～20cm，底面高は標高52～60cm程度で，部分的に凹凸部分がある。



1　黄褐色砂（粘土粒，Fe）
2　黄灰色砂（　〃　，Mn）
3　黄灰色砂混粘質土（Mn多）

図46　溝－1
縮尺１/30

埋土は黄褐色系の砂が主体となるが，下半はやや粘質を帯びる。遺物は出土していないため時期決定は困難であるが，土層の堆積状況から溝－５以前ではあるが，時期的に大きな断絶は認め難く，古代末～中世初頭と考えられる。本遺構の性格は自然流路の可能性も大きい。

溝－2（図47）

ＤＢ23・24区において，標高80cm前後，〈A-1〉層中で検出された。溝－１と同一面である。方向はほぼ東西方向で溝－１と平行する。長さ7.4ｍ，幅40～50cm，深さ20cmを測る。底面高は標高60cm前後である。両端は自然に緩やかに立ち上がり消失する。

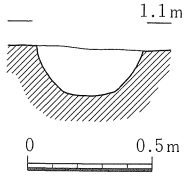


図47　溝－2
縮尺１/30

埋土は灰黄褐色砂～砂質土の単一層で，砂の目はやや粗く細砂程度である。出土遺物は認められない。溝－１と諸状況が類似しており，同じく古代末～中世初頭に属する自然流路の可能性が考えられる。

溝－3（図48）

ＣＸ22～ＣＺ25区において，標高80～90cm，〈８〉層と〈D-1〉層上面で検出された。全体的に蛇行しており，幅・深さにはばらつきが認められる。走行方向は25線の西約１ｍから23線まではほぼ東西方向，ＣＺ23杭付近で北へ約90°方向を変え（Ｎ－15°－Ｅ），23線上を北上し，ＣＹ線付近から再び東に緩やかに弧を描いて延びる。22線の西１ｍ付近から東へは大規模な攪乱に入り消失する。東端部については本遺構の埋土が比較的明瞭であったことから，東半地区での検出漏れは考え難く，攪乱内で終わる可能性が強い。ＣＺ線からＣＹ線付近までの南北方向に走る部分では，溝－10が重複しており，本遺構の西側の肩部上半は破壊を受けている。

溝の幅は平均的には50～70cmを測るが，全体に均一ではなく，最小で40cm，最大で約140cmを測るなど，かなりのばらつきを見せる。ＣＺ線上で狭くなり，ＣＹ線以北（23線以東）に向

かって幅を広げる傾向が認められる。底面高は標高53cm前後で，一部に凹凸が存在するが，全体としては西に向かって下降する。深さは約30cm前後である。杭ＣＹ23より東に向かっては，掘り方の北側にテラス状の段を有し，南半部がやや深くなり，10cm程度落ち込んだ状態を呈す。深い部分の底面高は標高54cm，テラス状部分で標高60cmを測る。

埋土は上下に区別され，上層は粘土粒が混在する黄灰褐色微砂が中心であるが，やや粘質を強める部分もある。下層は暗灰褐色砂混粘質土で鉄分の沈着が多い。いずれも，砂を含んでおり，流水の影響が強いと考えられる。前述の底面高の高低差から，大きくみて，東から西への流れが想定される。

また，本遺構の性格については，存在位置が微高地部を形成する〈8〉層の落ち際にほぼ一致していること，前述のように蛇行する流れ，不揃いな幅や底面高などから，自然流路的性格が予想される。

所属時期については，遺物が出土していないためのため不明確であるが，土層関係から古代末～中世初頭と考えられる。

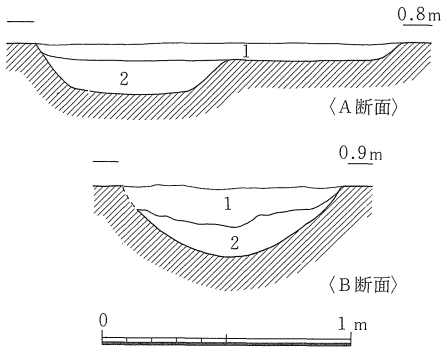


図48　溝－3　縮尺1/30

溝－4（図49）

ＣＸ18区～ＤＡ21区において，北東から南西方向（Ｎ－52°－Ｅ）に向かって検出された。検出面は〈8〉層・〈C-1〉層上面であったが，本来の掘削面は調査区東壁部および東西断面から標高95～100cm，〈7〉層上面と判断された。

溝の幅は80～130cmを測り，北東部が狭く南東部に向かって幅を広げる。深さは本来27cmが予想されるが，残存部では15～20cmであった。底面高は北東端で標高66cm，南西端で標高63cmを測り，幅が狭くてやや深い北東部から南西に向かって幅を広げながら浅くなっていく状況が認められる。

埋土は鉄分を含む砂に近い砂質土で，上下層の差は少ないが，粘質の強い基盤層とは明瞭に区別される。

出土遺物には黒色土器片も含まれているが，全体的に量が少なく（２～３点程度）細片であるため，詳細な時期決定はできないが，土層の堆積関係も考慮にいれ，古代末～中世初頭の時期を考えたい。

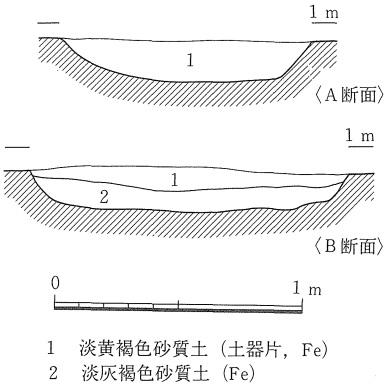


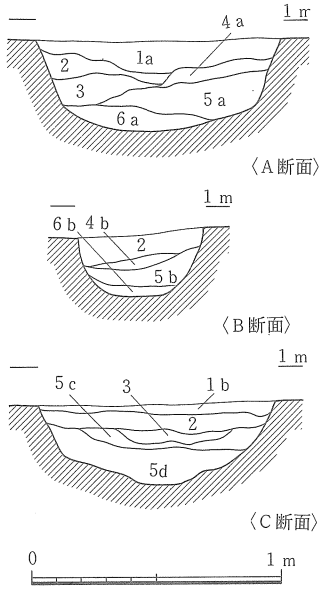
図49　溝－4　縮尺1/30

溝－5（図50・51，図版15－6）

ＤＢ16～25区において，標高80～95cm，〈A-1〉層上面で検出された。東部が高い傾向を持つ。方向は東西方向（Ｎ－105°－Ｅ）であり，両端は調査区外に延びる。

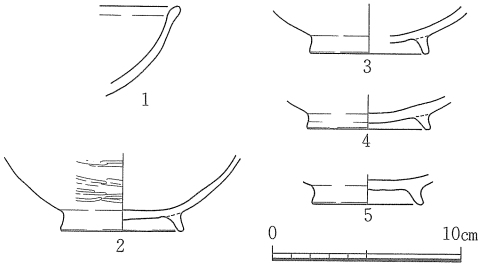
幅は一定ではなく，調査区の東端部（18線付近以東）と西端部（24線付近以西）で90～100cm，中央部で50～60cmとなる。平面形において凹凸が目立つ。長さは約45ｍ以上となる。深さは，東西両端部が深く，40～35cm，中央部の浅い部分で25cm前後を測り，底面高は23線以東において標高55～60cm，以西において約50cmとなり，西に向かって下降する傾向が窺われる。

埋土は上層（１～４層）と下層（５・６層）とに比較的明瞭に区分される。上層は，さらに，流入土（１層）とそれ以外の層（２～４層）とに分けられる。２層は鉄分の沈着が顕著で，全域に堆積し，中央部分（19～23線間）に厚い傾向が認められる。３層はマンガンの沈着が顕著である。部分的堆積層で，場所によっては砂質を強めるなど，土質は幅を持つ。４層は灰褐色を基調とし，西に向かって砂の混入度合いを高め砂質を強める。５層は中央部の底面高の高い部分を除き，ほぼ全域に比較的厚く堆積する。マンガンの沈着が強い茶褐色系の砂質土が基本である。18線以西では砂の混入が認められ，特に，23線以西では砂層をなす。６層は20線以西にのみ堆積する褐色系の土で，部分的に粘質あるいは砂質を強める。鉄分の沈着が目立つ。このように，５・６層は底面高の低い部分に集中的に砂が溜るなど，流水の影響を強く受けていることが



1a 灰黄褐色砂質土
1b 灰褐色土
2 黄灰褐色砂質土（Fe多）
3 灰茶褐色土（Mn多）
4a 灰褐色土
4b 淡灰褐色砂質土
4c 〃 砂混土
5a 暗灰茶褐色砂混土（Mn多）
5b 淡灰茶褐色土（Mn多）
5c 茶灰色砂質土（粘土粒，Mn多）
5d 灰褐色微～細砂（褐色粘土，Mn多）
6a 暗灰茶褐色粘質土（Mn多）
6b 淡灰褐色砂質土（灰色粘土）

図50　溝－5　縮尺１/30



遺物番号	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師質 椀	－	－	－	全面摩滅で不明	淡黄白	微砂
2	〃 〃	－	6.5	－	底部外面押圧，他は摩滅で不明	茶褐	細砂
3	〃 〃	－	(6.3)	－	全面摩滅で不明，外面煤付着	内黄白 外灰褐	微砂
4	〃 〃	－	(6.5)	－	〃 ，焼成不良	暗灰褐	〃
5	〃 〃	－	(5.9)	－	底部外面押圧，他は摩滅で不明	淡黄白	細砂

図51　溝－5　出土遺物　縮尺１/４

窺われ，短時間で埋没した可能性が高い。４層では西に向かって砂質を強めるなど５層に類似した状態であり，量的には少ないと考えられるが，流水の影響の存在が想定できる。２・３層は本溝廃棄時の埋め土と考えられる。

掘り方については，部分的に不明瞭な部分もあるが，全体としては，鉄分の沈着・粘土粒の包含などによって比較的明瞭に判別される。

遺物は，全体的に出土しており，集中傾向は認められない。土師質高台付椀などが出土しているが，いずれも小破片であるため詳細な時期決定はできない。また，他の遺構との関係からは，本遺構は溝－６以前，溝－１以後の存在となることを考え合わせて，古代末～中世初頭（12世紀代）には埋没したと考えられる。

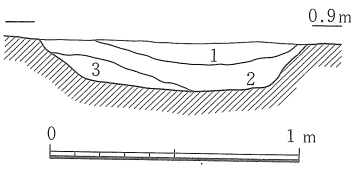
溝－６（図52，図版15－４）

ＤＢ20～22区において，標高80～85cmの面，〈A-1〉層上面で，溝－５を切る形で検出した。

規模は幅90～110cm，長さ約7.8ｍを測り，両端は緩やかに立ち上がり終息する。方向はほぼ東西方向（Ｎ－105°－Ｅ）を示すが，全体的に不整形な感が強く，蛇行気味である。底面は標高45～60cmに位置し，深さは検出面から20～30cmを測る。南側が深い傾向はあるが，数値のばらつきが大きく一定していない。

埋土は各層間に明瞭な差は認められず，全体的に鉄分の沈着が著しい。また，下半部の埋土は砂質あるいは粘質のブロックを少し含む。少量の遺物が含まれており，古代末～中世初頭（12世紀）に埋没したと考えられる。

本遺構の性格については，平面の形状が不整形であること，底部に凹凸があり底面高が一定していないこと，埋土に人為的な混入物がほとんど含まれないことなどから，人為的なものとするにはいくつかの疑問点が存在する。溝－１・２・14・20などの溝群と以上の点で共通していること・それぞれの存在位置が調査区南半の旧河道上に集中していること・いずれも東西方向の溝であることなどから，自然流路あるいは溜り的な性格を有するものである可能性も考えられる。



1　淡青灰褐色土（Fe）
2　淡茶灰褐色土（Fe多）
3　暗灰褐色細砂土（Fe過多）

図52　溝－６　縮尺１/30

溝－７（図53～55，図版14）

ＣＴ23区およびＣＷ～ＤＡ22区において，標高92cm，〈７〉層上面で検出された。後世の大規模な攪乱によって，特に，その北半部は大きく破壊されている。ＣＷ22区ではかろうじて破壊を免れた島状部分上において検出されたが，その肩部も土壙－９・19によって切られている。

また，北端部（ＣＴ23区）においても，僅かにその先端部が残存していたのみである。こうした状態であったため，その連続性は捉え難いものであったが，その方向性および埋土の状況から同一の遺構と判断し，調査区のほぼ中央を南北に走る溝状遺構と考えた。方向は全体としてＮ－２°～７°－Ｅを示す。北端部はＣＴ23区の調査区内で，そして，南端部はＤＡ22区内で溝－８に合流し，それぞれ終息している。

規模は，ＣＺ線を境に，南北で様相が異なる。ＣＺ線以南では，幅は110～120cm，以北では100～110cmを測る。この差は基盤層の違いによるもので，前者は砂質が強く，溝の肩が崩れた結果と考えられる。底面高は同じくＣＺ線以南では，標高60～70cm，以北では標高50～55cmを測る。これはＣＺ線以北では一段階古い時期の溝が重複した結果であり，最終段階の上層溝埋土（１～４層）の底面高は，標高58～70cmとなる。北端部（Ｅ断面）で58cm，中央部（Ｃ断面）で70cm強，南端部（Ａ断面）で66cmとやや中央部（ＣＺ線付近）が高く，北へ下降気味ではある。また，下層溝の底面高は標高50～55cmとなる。深さは20～40cmである。

上層溝の埋土は１～４層と考えられる。１層はＣＸ線以南においては炭化物・焼土・土器を多量に含み（1b層），下層と明瞭に区別される。しかし，ＣＷ線とＣＸ線の間でそうした包含物は減少し（1a層），北端部では不明瞭となる。２～４層は褐色土を基調とした層で，比較的類似する層である。４層については，やや底面高が低い部分（ＣＺ線からＤＡ線間）で砂の混入が顕著に認められ（4b層），特徴となっている。

下層溝（５・６層）は，ＣＺ線以北に存在する。粘質を帯びる傾向が強く，炭化物なども含

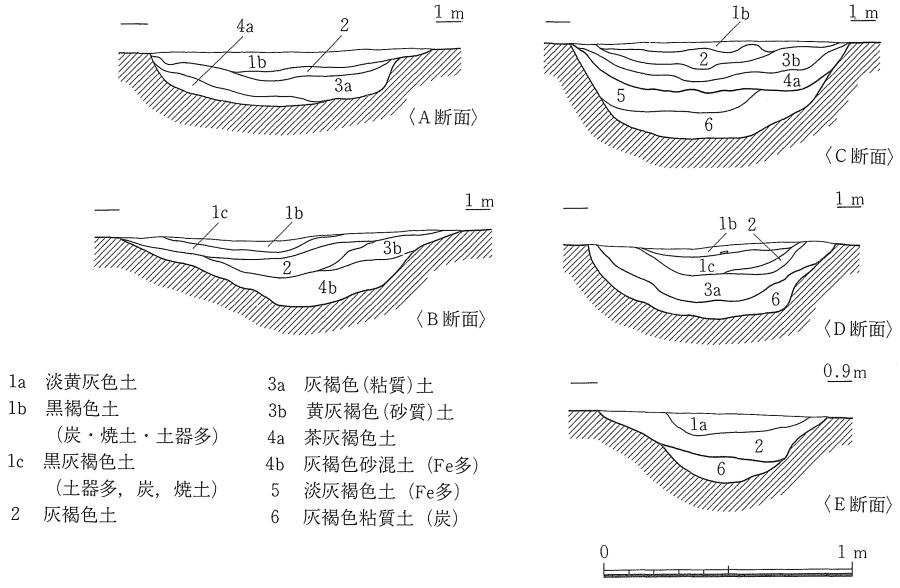
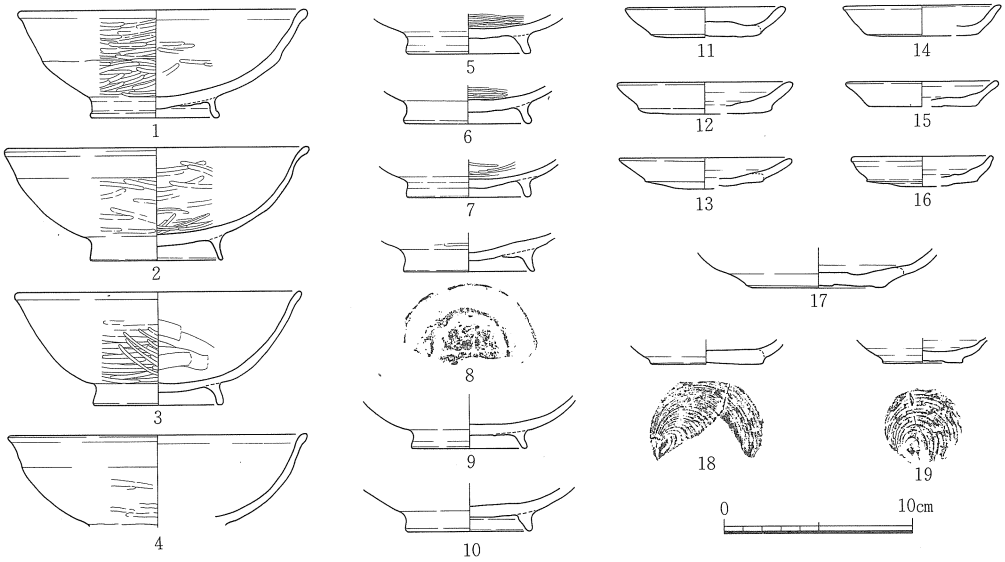


図53　溝－７　縮尺１/30

まれる。しかし，上層との差は明瞭とは言えず，時間的差は小さいと考えられる。

遺物はほとんどが１層（炭化物包含層）から出土している。また，ＣＸ～ＣＹ22区においては，比較的集中して出土した。出土遺物は土師質高台付椀・皿が主体を占め，他には，土師質鍋・白磁碗・須恵質椀などがある。土師質高台付椀については，内外面に篦ミガキが認められるタイプと認められないタイプがあるが，両タイプは出土地点などによっての分離は不可能で，両者は同時廃棄されたと判断される。

本遺構の所属時期は，最終的に廃棄された土器が12世紀後半～末頃と比定され，また，各土層間の隔絶が大きくないことから，上下溝ともそれにごく近い時期まで機能し，12世紀末まで

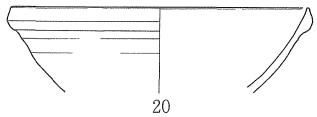


遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師質 椀	15.3	6.8	5.8	内面篦ミガキ㊁，外面篦ミガキ㊀，底部外面ナデ	淡黄白	粗砂
2	〃 〃	(16.0)	7.0	6.0	〃 〃 ，外面押圧後篦ミガキ，底部外面ナデ，高台部歪み	〃	〃 ㊂
3	〃 〃	15.2	6.9	6.0	内面工具使用ナデ，外面篦ミガキ，底部外面ナデ	〃	〃
4	〃 〃	(15.7)	－	－	内面摩滅で不明，外面篦ミガキ（摩滅で不鮮明）	淡灰白～淡赤白	微砂
5	〃 〃	－	6.6	－	内面篦ミガキ，底部外面ナデ，外面摩滅で不明・煤付着	内淡茶灰外暗茶褐	〃
6	〃 〃	－	6.8	－	〃 〃 ， 〃 押圧， 〃	淡灰白	細～粗砂
7	〃 〃	－	6.6	－	〃 〃 ， 〃 ナデ， 〃	淡黄白	細砂
8	〃 〃	－	6.9	－	内外面摩滅で不鮮明，底部外面押圧・線刻「×」あり	〃	微砂，細砂㋐
9	〃 〃	－	6.2	－	〃 〃 不明，底部外面ナデ	〃	〃
10	〃 〃	－	6.8	－	〃 〃 〃 ， 〃 押圧，高台部変形	〃	粗砂
11	〃 小皿	(8.5)	(5.8)	1.6	底部外面篦キリ，底部内面仕上げナデあり，他は横ナデ	暗灰褐	微砂㋁
12	〃 〃	(9.3)	(7.0)	1.7	全面ナデ	淡黄灰～暗灰	〃
13	〃 〃	(9.1)	(6.2)	1.6	底部外面篦キリ，他は横ナデ	淡黄白～淡黄褐	〃 ㊁，赤色粒
14	〃 〃	(8.4)	(5.8)	(1.6)	〃 〃 ， 〃 ，ロクロ回転㋒	淡黄灰	〃
15	〃 〃	(8.1)	(5.7)	1.4	〃 〃 ， 〃	淡黄褐	細砂㋁
16	〃 〃	(7.5)	5.9	1.6	〃 〃 ， 〃	淡灰	微砂㋐
17	〃 皿	－	7.4	－	〃 〃 ， 〃 ，ロクロ回転㋒	淡黄白	細砂㋁
18	土師質 椀	－	6.0	－	底部外面糸キリ，他は横ナデ，焼成不良のため土師質となる	暗灰褐	微砂㋐
19	須恵質 〃	－	4.3	－	〃 〃 ， 〃 ，焼成不良，外面煤付着	内淡黄白 外黒灰	細砂

図54　溝－７　出土遺物（１） 縮尺１/４

にはその大半が埋没したと考えられる。

他の遺構との関係を検討してみると，まず，溝－８との先後関係は溝－８のＢ断面の検討から，少なくとも，溝－８の下層溝が存在する以前に，ある程度は埋没していると判断される。ただし，溝－８の４層と本遺構の１層はいずれも多量の炭化物などを包含し，面的には区別が非常に困難であるなど，状況が類似していることから，溝－８下層溝が埋没する段階に，本遺構の上部は依然として窪んでおり，同時に堆積した可能性が考えられる。一時的に同時並存した可能性も残る。また，掘立柱建物－１および柱穴列－１の棟軸方向がＮ－95°－Ｅであるのに対して本遺構の方向はＮ－２～７°－Ｅとなり，直交する方向となっていることから，関連性が強く想定される。



遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
20	白磁 碗	(15.8)	－	－	内外面ナデ・厚い施釉	白(㈱)	緻密，黒色粒㋐
21	〃 〃	－	6.2	－	内面ナデ・沈線・施釉，外面ナデ・施釉，底部外面篦ケズリ	淡灰白	〃 〃 〃
22	土師質 鍋	(39.0)	－	－	内面ハケ，外面粗いハケ・押圧・煤，口縁部には横ナデ・押圧が及ぶ	(内)淡褐 (外)黒褐	細～粗砂

図55　溝－7　出土遺物（２）　縮尺１/４

溝－８（図56・57，図版15－１～３）

ＤＡ20～25区，ＤＢ23～25区で検出された。東西方向に走り，東端部分で北に折れ曲がり，西端部分では調査区外へ延びる。方向はほぼ東西方向（Ｎ－97～100°－Ｅ）である。土壙－７・８に切られている。検出面は，標高90cm，〈７〉層上面である。

本溝は埋土の状況から改修が認められる。

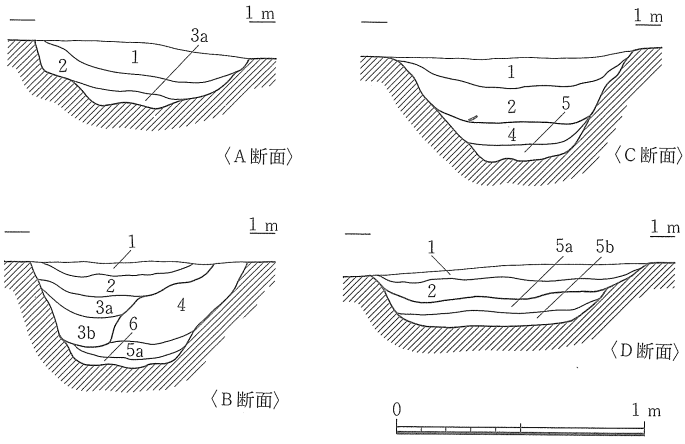
上層溝（１～３層）は，幅は90～100cmを基本とし，深さは浅い部分で15cm，深い部分で35cm，平均的には25～30cmと考えられる。底面の標高は低い部分で55cm，高い部分で70cmを測る。東端部分は北へ折れ曲がり，約150cmの長さを持って終息する。埋土は大きく上下に二～三分される。１・２層では，底部の低い部分（22線付近から西，24線と25線の中間付近まで）において炭化物・焼土・土器の堆積が顕著であるが，両端部では激減し，ほとんど認められない。また，３層はＢ断面以東にのみ確認される。

下層溝（４～６層）は，幅は100cm前後と考えられ，深さは30～60cm，底面高は標高40～60cmを測る。西端部は調査区外へ延びるが，東端部は21線と22線の間で上層溝に内に消える。埋土は二分され，上層（４層）には多量の炭化物・焼土・土器が含まれる。４層は，底面の深い部分にあたるＢ断面からＤ断面の東までにおいてのみ確認された。下層（５・６層）は砂質が強く，砂を混入あるいは砂層をなす部分もあり，流水の影響を窺わせる。

遺物の多くは上下溝とも炭化物層から出土している。土師質高台付椀を中心に遺物量は多いが，大半は小破片である。土師質高台付椀などの特徴は，先述した溝－７のものと共通しており，同じく12世紀後半～末に属すると考えられる。

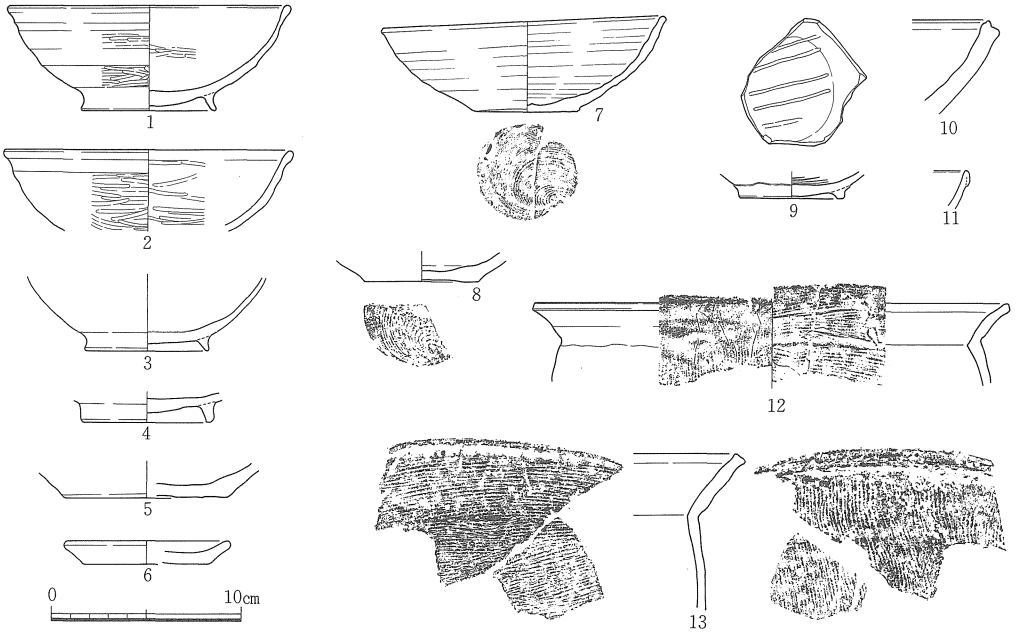
他の遺構との関係をみると，溝－７については本遺構下層溝の４層と溝－７の１層（炭化物層）が類似している点から溝－７の上部埋没と本遺構の埋没が同時であった可能性があること，上層溝については溝－７埋没後形成されていることを指摘した上で，両遺構間の時間差はごく短時間であることを先述した。また，掘立柱建物－１・柱穴列－１との関係については両者の棟軸方向に対して平行関係の位置にあり，溝－７共々，強い関連が推定される。

本遺構は，遺物・遺構の重複関係から12世紀末には埋没したと考えられる。



1　黄灰褐色砂質土（一部に炭，焼土）
2　淡灰褐色砂質土（炭，焼土，土器，Mn）
3a　灰褐色土（炭，焼土，土器，Mn）
3b　灰褐色粘質土（Mn多）
4　黒灰褐色粘質土（炭・焼土・土器多）
5a　黄灰褐色砂混土（Fe）
5b　茶灰褐色砂混粘質土（Mn）
6　黄灰色砂（暗灰色粘質土粒）

図56　溝－８　縮尺1/30



遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師質 椀	14.9	7.1	5.5	内外面ナデ・篦ミガキ㊉，口縁部横ナデ２回，底部外面ナデ	黄白	粗砂
2	〃 〃	(15.3)	—	—	〃 〃 〃 (不鮮明)，口縁部強い横ナデ	淡黄白	〃
3	〃 〃	—	6.6	—	底部外面押圧，他は摩滅で不明，内面重ね焼き痕（径6.5）	〃	微砂
4	〃 〃	—	7.0	—	全面ナデ，内面重ね焼き痕（変色）	淡灰白	〃
5	〃 皿	—	8.5	—	底部外面篦キリ，他は横ナデ，ロクロ回転㊊	淡黄灰白	〃
6	〃 小皿	(8.8)	(6.5)	1.25	横ナデ，底部外面摩滅で不明	明橙	〃 ㊉，精良
7	須恵質 椀	15.1	5.7	5.1	底部外面糸キリ，他は強い横ナデ，口縁部重ね焼き痕（暗灰色化）	灰	〃 ㊊
8	〃 〃	—	(6.0)	—	〃 〃，他は横ナデ，焼成不良	茶褐	細砂㊎
9	瓦器 〃	—	5.6	—	内面暗文，全体的に摩滅で不明，「和泉型」	灰黒	微砂
10	須恵質 鉢	—	—	—	全面横ナデ，「東播系」	淡灰	微～細砂㊎
11	白磁 碗	—	—	—	〃 ナデ・施釉	白㈱	緻密
12	土師質 甕	(25.0)	—	—	内外面ハケメ	茶褐	微～細砂㊎
13	〃 鍋	—	—	—	内面ハケメ，外面ハケメ後押圧・煤付着，口縁部上半横ナデ	㈱黄褐 ㈱茶褐	細砂㊎

図57　溝－８　出土遺物　縮尺１/４

溝－９（図58）

ＣＹ・ＣＺ21区において，標高85㎝，〈７〉層上面で検出された。南端部はＣＺ線の南約50㎝で緩やかに上がり，北端部は西にやや弧を描きながら攪乱部に出て行く。

幅は約70㎝，底面高は標高約70㎝，深さ15㎝程度を測る。

埋土は黄褐色の均質な砂層で鉄分が多量に沈着する単一層である。基盤層と比較的明瞭に区別される。

遺物が出土していることから，時期決定は困難であるが，土層堆積関係から古代末～中世の範囲で捉えたい。

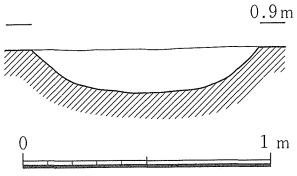


図58　溝－９　縮尺１/30

溝－10（図59）

ＣＹ23区において標高85cm，〈7〉層上面で検出された。溝－３の上部に一部で重複している。大きくは南北方向に走っているが，南端部はＣＺ23杭の北西50cm付近で直角に西方向に曲がり終息し，北端部はＣＹ23杭の南西約50cm付近から緩やかに弧を描きながら東に向かい，同杭の北東約30cm付近で終息するなど蛇行気味である。

平面形は全体的に凹凸が多く不整形な感を受ける。幅は約60～70cm，底面高は標高70cm前後，深さ15cm程度を測る。埋土は単一層で黄褐色の砂層である。出土遺物がないため，時期決定は困難であるが，土層関係から古代末～中世の範囲で捉えたい。本遺構は検出面・底面高・規模・埋土などの点で前述の溝－９と類似性が非常に高く，同一遺構の可能性が考えられる。

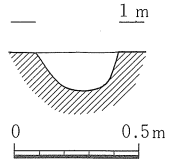


図59　溝－10
縮尺１/30

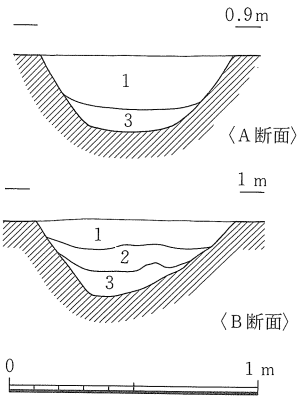
溝－11（図60）

ＣＴ22～27区において，東端で標高80cm前後・西端で90cm前後，〈7〉層上面で検出された。方向はほぼ東西方向（Ｎ－101°－Ｅ）を示す。東へ向かって下降する傾向が認められる。

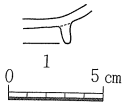
幅は，一部で約90cmの部分も存在するが，基本的には60～70cmの中で納まる。長さは，現存部分で26ｍ，深さは約30～35cmを測る。底面高は東端では標高45cmであるが，西端では標高70cmまで上昇し，東への傾斜が認められる。西端部での状態を詳細にみると，26線ではまだ標高54cmであるが，27線で61cm，調査区西壁面で68cmとなり，27線から急激に上昇することがわかる。ｂ地区で本遺構が検出されないことを考えると，ａ・ｂ地区の境界付近で溝が終息することが予想される。東端部は，東の調査区に出現せず，その間での終息あるいは方向変換が考えられるが，大規模な攪乱のため不明である。

埋土は，上下に大別される。上層（１・２層）は砂質が強く，24線以東では純粋な粗い黄褐色砂となり，西に向けてやや粘質を帯びる。下層は粘質が強く，灰褐色粘土～粘質土を呈す。上下層は明瞭に区分される。

所属時期は，検出面等から，中世初頭と捉えたい。



1　黄褐色砂質土～砂（Fe）
2　暗黄褐色砂質土（Fe）
3　灰褐色粘質土～粘土



遺物番号	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
		口径	底径	器高			
1	土師質　椀	－	－	－	摩滅で不明	淡黄白	微砂

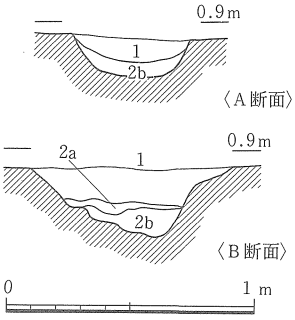
図60　溝－11，出土遺物　縮尺１/30，１/４

溝－12（図61，図版15－５）

ＣＴ～ＣＹ20区で検出された。検出面は標高80～85cm，〈７〉層上面である。溝－４を破壊して作られている。方向はほぼ南北（Ｎ－15°－Ｅ）を示し，北端部はＣＺ線の北約60cmで終了すると考えられる。長さは約27.6ｍ，幅は60～70cm，深さ約20cmを測る。底面高はＣＵ～ＣＷ線付近が標高55cm前後で最も低く，南端部で80cmまで上昇し，狭くなりながら緩やかに立ち上がり終息する。北端部では標高65cm程度で立ち上がっている。

埋土は黄灰褐色系の砂質土を基調とし，上下に大別される。下層はさらに二分されるが，その差は混入物である粘質土粒・砂質土粒の包含量あるいは包含率の違いであり，基本的には同一の性格を有す層と判断される。ａ層は北半に，ｂ層は南半に顕著に認められる傾向を示す。遺物は土師質土器の細片が数点出土している。

本遺構は，遺物および検出面あるいは遺構の切り合い関係からは溝－４以降で中世に属すると判断されるのみである。また，溝の方向がＮ－15°－Ｅを示しており，建物－３の梁軸方向と柱穴列－５の方向とほぼ一致していることから，溝－７・８と建物－１・柱穴列－１との関係と同様の関係が想定され，時期的にはそれらの一群よりも新しい段階のものと考えられる。



1　淡黄褐色砂質土
2a　青灰色土
　（粘質土粒，砂質土粒）
2b　淡灰褐色砂質土（粘土粒）

図61　溝－12　縮尺１/30

溝－13（図62）

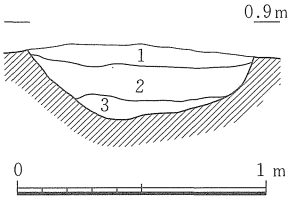
ＣＴ20区において，標高約80cm前後で検出されたが，調査区北壁の断面観察から，本来の掘削面は標高85～90cm，〈６〉層上面と考えられる。

幅は100cm，残存長は130cm，深さは約30cm，底面高は標高約50cm（北壁断面では底面高は標高40cm）を測り，調査区北方に延びる。

埋土は上下に大別される。上層（１・２層）は砂にごく近い黄褐色系砂質土で白色細砂が含まれる。下層（３層）は，全体としては，やや粘質を強め淡茶褐色土となるが，灰色粘質土粒と砂質土粒が混在している。

本遺構は，底面高が北壁断面部分で急激に上昇していることから，調査区外に長く延びず，比較的短距離のうちに終息し，土壙状となる可能性もあるが，埋土の状況から，流水の影響が予想され，ここでは溝として扱っている。

時期は出土遺物が細片であり，詳細な時期決定は不可能であるため，中世という大枠で考えたい。



1　淡黄褐色砂質土（白色細砂）
2　灰黄褐色砂質土（　〃　）
3　淡茶褐色粘質土（灰色粘質・砂質土粒）

図62　溝－13　縮尺１/30

［b地区］

b地区においては7条の溝状遺構が検出された（図63）。調査区が狭長である上に，西側の大規模な攪乱に伴う崩落の影響で，いずれも詳細は不明であった。

検出面は8層上面で2条，7層上面で5条の溝が各々確認された。溝の方向は，検出部分が非常に狭く不明瞭であるが，調査区西端部でほぼ南北に走るもの以外は，北半のものは東西に，南半のものは東北から南西に向かう傾向が想定される。また，いずれの溝からも遺物はほとんど出土していない。

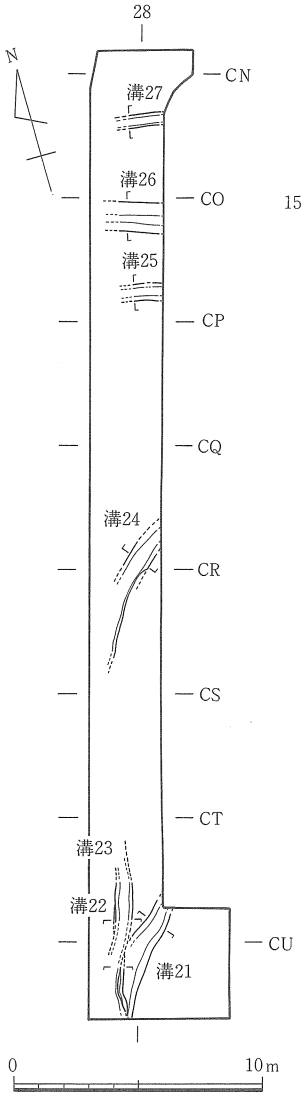


図63　b地区溝全体図・断面位置図　縮尺1/300

溝－21（図64）

ＣＴ27区からＣＵ28区にかけて検出された。方向は北東から南西方向（Ｎ－45°－Ｅ）を示す。検出面は標高55～60cmであることから，本来は，〈8〉層上面に掘削面を有すると考えられる。

残存長は約5ｍ，幅は70～100cmを測り，南に向かって幅広いものとなっている。深さは15～20cm，底面高は標高40cm前後である。

埋土は単一層で灰茶褐色粘質土である。遺物は出土していないため本溝の時期は不明確であるが，検出面から，古代末～中世初頭と考えたい。

溝－22（図65）

ＣＴ28区からＣＵ28区にかけて調査区西端部で検出された。大規模な攪乱に加え，溝－23の下部にあたることから，その多くは破壊を受け，断続的に一部が残存しているのみである。検出面は標高70cm前後であるが，断面観察から本来の掘削面は〈7〉層上面と考えられる。

溝の方向は，全体的にはほぼ南北であるが，他の溝に比べると西

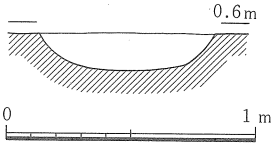
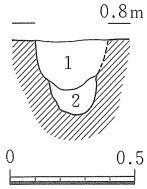


図64　溝－21　縮尺1/30



1　茶褐色粘質土（Mn多）
2　灰黄褐色土（Fe多）

図65　溝－22　縮尺1/30

への振りが大きく，北端部は溝－23によって不明確となっているが，西の調査区外へ，南端部は南の調査区外へ各々延びると予想される。

残存長は4.4m，幅は30～40cm，深さは約60cmを測り，底面高は標高45cm前後と考えられる。

埋土は上層が茶褐色粘質土でマンガンを多く含み，下層が軟質の灰黄褐色土で鉄分を多く含む。

遺物が出土していないため，詳細な時期は不明であるが，本溝の時期は検出面から古代末～中世初頭と考えたい。

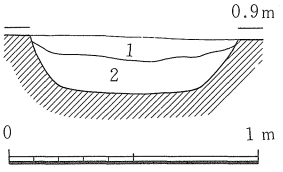
溝－23（図66）

ＣＴ27区からＣＵ28区にかけて調査区西端部で検出された。溝－28・29の下部にあたり，同様の残存状況を示す。方向はほぼ南北であるが，全体的に若干蛇行しており，北端部では西方に，また，南端部では南西方向に向かって調査区外に延びると予想される。検出面は標高75～80cmで，〈7〉層上面にあたる。

残存長は5.4m，幅は60～70cm，深さ約20cmを測る。底面高は標高55～65cm前後である。掘り方断面は溝－28・29のようなＵ字形ではなく，緩やかなカーブを示す。

埋土は上下に分層され，上層は黄色土塊を含む暗茶褐色土，下層は灰茶褐色土となる。いずれもマンガンを多く含み〈7〉層に類似している。

遺物は出土していないが，検出面等から本溝の時期は古代末～中世初頭と考えられる。



1 暗茶褐色土（黄色土粒）
2 灰茶褐色土（Mn多）

図66　溝－23　縮尺1/30

溝－24（図67）

ＣＱ27区からＣＲ28区にかけて検出された。検出面は標高約90cmで，〈7〉層上面である。北東から南西方向に走っており，Ｎ－130°－Ｅの方向を示す。

長さは残存部分で約5m，幅は94cmを測る。深さは20cm，底面高は標高70cm前後である。

埋土は単一層で〈6〉層あるいは〈7〉層に類似した明茶褐色砂質土であるが，部分的に砂混じりとなり砂質を強める。遺物は全体的に僅少である。

以上のことから，本溝は古代末～中世初頭に流水の影響を多分に受けて機能した遺構と考えられる。

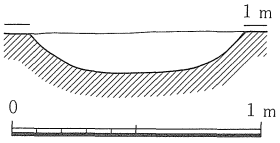


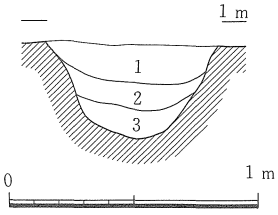
図67　溝－24　縮尺1/30

溝－25（図68）

ＣＯ27・28区において検出された。掘削面は標高90cm，〈7〉層上面である。東西方向に走っている。

長さは120cmが残存しており，幅は68cm前後を測る。深さは約38cm，底面高は52cm前後である。埋土は三分され，１層は灰褐色土，２層は粘質を強め，暗灰褐色粘質土となり，３層は炭化物を含む汚れた暗茶灰褐色土である。砂の混入が認められる。

本溝の時期は遺物が出土していないが，掘削面から中世初頭と考えられる。



1　灰褐色土
2　暗灰褐色粘質土
3　暗茶灰褐色土（炭）

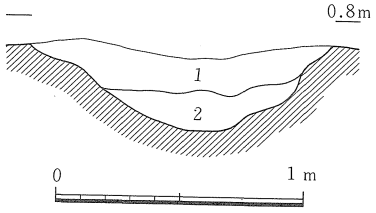
図68　溝－25　縮尺１/30

溝－26（図69）

ＣＯ27・28区において標高55cm前後，〈9〉層上面で検出した。しかし，南北断面（28線）の検討から，本来の掘削面は標高70cm前後，〈8〉層上面であることが判明した。方向はほぼ東西方向で，Ｎ－107～113°－Ｅを示す。

長さは170cmが残存しており，幅は120cm，深さは36cm，底面高は標高35cmを測る。埋土は上下に二分される。上層は暗黄灰色土で，下層は暗灰色粘土である。砂などの混入は認められない。

本溝の時期は，遺物が出土していないため詳細は不明確であるが，検出面から古代末～中世初頭と考えられる。



1　暗黄灰色土（Fe，Mn）
2　暗灰色粘土

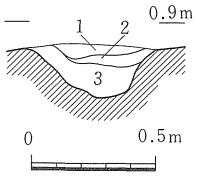
図69　溝－26　縮尺１/30

溝－27（図70）

本調査区の北端部ＣＮ27・28区において，標高78cm前後で検出した。〈7〉層上面である。方向はほぼ東西でＮ－95°－Ｅを示す。

長さは，調査区の西半部が大きく攪乱されているため，約120cmしか残存していない。幅は50～55cm，深さは23cm，底面高は標高約60cmである。埋土はいずれも粘質土で，上半（１・２層）は淡灰色系の粘質土，下半（３層）は暗茶褐色粘質土で汚れた状態である。砂の混入は認められない。

遺物は出土していないが，検出面から本溝の時期を中世初頭と考えたい。



1　淡灰色粘質土
2　淡黄灰色粘質土
3　暗茶褐色粘質土

図70　溝－27
縮尺１/30

（2）近　世

a．土　壙

［a地区］

本地区では，７基の土壙（土壙－15～21）が検出された。検出面は５層上面・６層中と７層上面である。

７層上面で検出した土壙－21は所属時期・形状などから，本来の掘削面は５層上面まで上がると予想される。また，６層中で検出された土壙－19・20についても，上層部分を攪乱によって大きく削平されているが，土壙－21と同様に，本来の掘削面は５層上面の可能性が高い。以上のことから，当時期に属する土壙７基の掘削面は，全て，５層上面に存在する可能性が高いと考えられる。

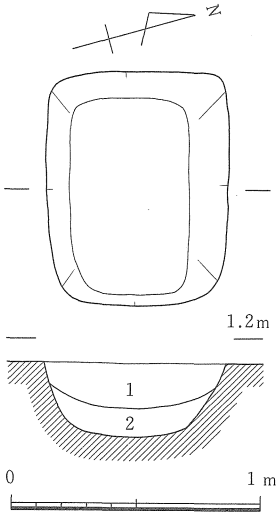
分布状況は本調査区では，比較的高位部にあたり安定した北半部に片寄る傾向が認められる。また，形状は整った長方形を呈するものが中心で，類似した機能が推定される。

土壙－15（図71）

ＣＶ19区において，標高110㎝前後の面，〈５〉層上面で検出された。

平面形は東西に軸を持つ整った長方形を呈す。長軸94㎝，短軸73㎝，深さ約30㎝を測る。底面高は標高約80㎝である。

埋土は二分される。上層は炭化物・土器を含み全体的に汚れており，下層は粘質が強い傾向が認められる。上・下層間の差は小さい。遺物は少量で，土師質の小破片が出土しているのみである。本土壙の時期については，出土遺物から中世以降の時期が想定されるが，土壙の形状・検出面などから近世に属すると考えられる。



1　灰黄褐色土（Fe多，炭，土器）
2　灰茶褐色粘質土（Fe多）

図71　土壙―15　縮尺１/30

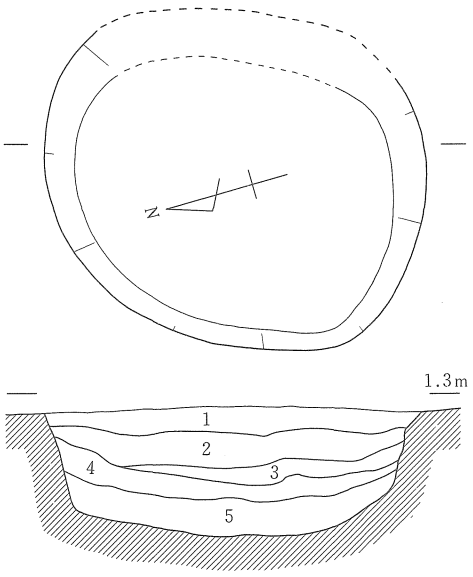
土壙－16（図72）

ＣＷ19区において，標高115㎝前後の面で検出された。〈５〉層上面に対応すると考えられる。東側部分は調査区周囲の側溝によって破壊されており，端部の確認ができなかったが，調査区東壁断面に現れていないことから，側溝内で終息すると予想される。

平面形は南北154cm，東西134cm（推定）を測る惰円形を呈す。底面は緩いカーブを持ち，中心部で深さ53cm，標高73cmに位置する。

埋土は，いずれも茶～灰褐色系の砂質土で，下方に向かって砂質を強める。包含物としては，上半に鉄分，下半にマンガンが多く沈着する傾向がある。また，１・２層には炭化物が比較的多く認められ，２・５層には淡灰色の砂質土・粘質土がブロック状に含まれる。

本土壙の時期は，埋土上層で近世陶磁器片が僅かではあるが出土していることから，近世と考えられる。



1　淡黄褐色砂質土（炭，Fe）
2　暗灰褐色砂質土（〃，〃，淡灰色砂）
3　暗灰褐色砂質土
4　暗茶褐色砂質土（Fe，Mn多）
5　暗灰褐色砂質土
（Mn多，淡灰色粘土粒）

図72　土壙―16　縮尺１/30

土壙―17（図73）

ＣＶ・ＣＷ19区において，標高110cm前後の面，〈5〉層上面で検出された。溝－15の南端部を破壊して作られている。また，南半部上面ではピットが重複している。

平面形は南北182cm，東西178cmを測るやや歪んだ隅丸方形を呈す。深さは，ほぼ中央の深い部分で80cm，比較的浅い周辺部で70cm，標高では23cmと33cm前後となる。掘り方は直角に近い角度で立ち上がっている。

埋土は全体を10層に区分しているが，土層の性状・堆積状態から，大きくみれば，１～６層と７～10層に大別でき，また，その中で１～３層と４～６層，７・８層と９・10層にそれぞれ二分して考えられる。

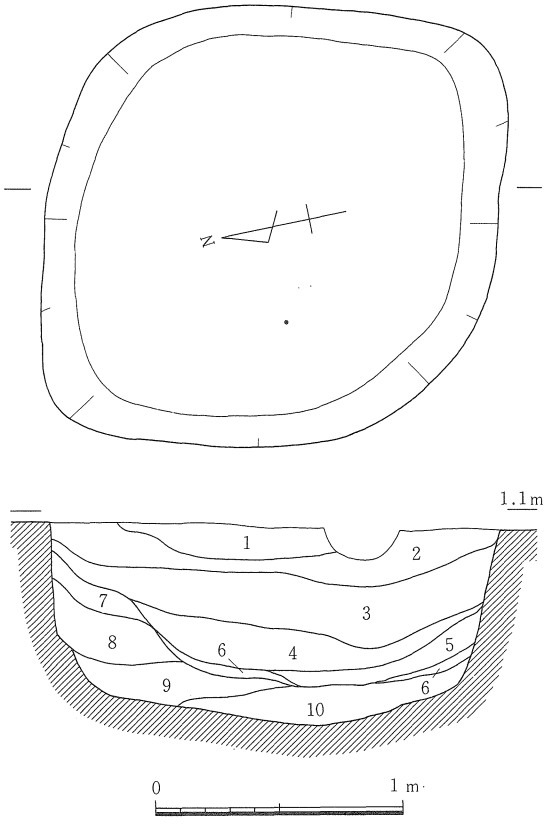
１～３層は，下半（３層）では鉄分の沈着が増加し粘質を強めるが，いずれも淡灰褐色土が基本となり類似性は高い。４～６層は各層が独自の特徴を有しており，差は明瞭である。４層は茶灰色粘質土層で，２～３cmの礫を含み，全体的にやや目が粗い。５層は淡灰色細砂層で灰色粘土粒を含む。４・５層は軟質である。６層は灰色粘土層で有機物と少量の細砂を含む。上面には鉄分の沈着が顕著である。炭化物は１～６層全体にある程度は含まれているが，特に，５層下半から６層にかけて大粒のものが多く認められる。

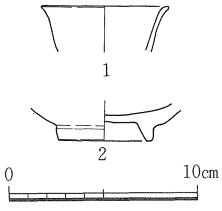
次に，７～10層については１～６層とはまた異なる状況を示す。７・８層は類似しており，

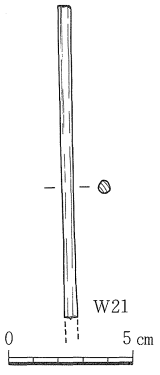
黄灰褐色系の砂質土で，８層では灰色粘土塊を含むなど不均質な層である。９層は淡黄灰色粘質土で少量の微砂を含み，鉄分の沈着も多い。10層は淡灰色粘土である。木器・木材片などが出土している。以上のように，４～６層に見られる灰色粘土・細砂・炭化物の堆積状態は後述の土壙－19～21の下半から底部にかけての状況に，また，７・８層の状況はそれらの土壙の上半部埋土，そして，９・10層は下半埋土の状態に各々類似していることから，同一の性格を有する土壙と判断される。また，６層と７層との間に見られる土層の断絶から，６層下面が本土壙の底部を形成していた段階があった可能性が高い。

遺物は５・10層から少量出土している。各々，土壙の底面に存在したものと考えられる。近世陶磁器が中心で瓦の小破片も含まれる。

本土壙は，遺物から近世と考えられる。







1　淡灰(褐)色土（Fe）
2　淡灰褐色土（細礫少）
3　〃　（Fe多）
4　茶灰色粘質土（礫，軟質）
5　淡灰色細砂（炭多，灰色粘土粒，軟質）
6　灰色粘土（炭多，有機物，細砂少）
7　黄灰色砂質土
8　黄灰褐色砂質土（灰色粘土塊）
9　淡黄灰色粘質土（Fe多，微砂少）
10　淡灰色粘土（木器，木片）

遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	磁器	鉢	(6.8)	－	－	横ナデ・施釉，「伊万里系」	内淡灰　外淡青灰白	緻密
2	陶器	碗	－	5.0	－	〃・〃・三島手手法，「唐津焼」	茶褐	微砂㊟

遺物番号	器種	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	樹種	形態の特徴
W21	棒状加工品	12.6	0.5	0.5		丸状に削り，端部は切り放し．先端部欠損．

図73　土壙－17，出土遺物　縮尺１/30，１/４・１/３（W21）

土壙－18（図74，図版12）

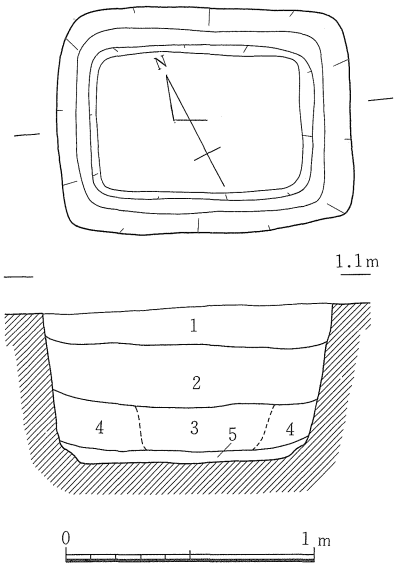
ＤＢ17区において標高95～100cmの面で検出された。〈5〉層上面である。遺構密度が非常に低い地区であるが，土壙－２を破壊して作られている。

平面形は，東西方向に軸を有す，長軸118cm・短軸90cmを測る整った長方形である。掘り方断面は底面に５cm程度の小さな段を持つ逆台形で，深さ63cm，底面高は標高35cm前後を測る。

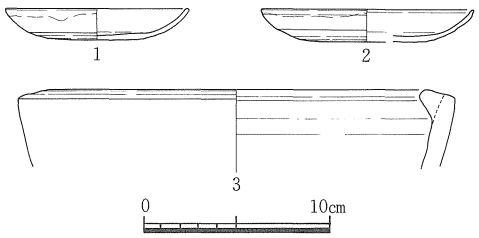
埋土は次のような堆積となる。１・２層は黄灰褐色土層で灰色粘質土塊を含む。３層は灰色粘土層であるが，４層の中央部にブロック状に堆積したような状況となっている。土層中には橙褐色土が混在し，木片・木質・種子（モモ）などが比較的多く出土している。４層は橙褐色土層で灰色粘土が混在する。５層は底部の段部分を埋める灰色砂層で，小石・瓦などが多く入っている。土器も大形破片のものが出土している。

以上のことから，本土壙は底部に５層が堆積した状態で廃棄され，埋土の大半を占める１～４層によって短時間の内に埋め戻された可能性が高い。

本土壙は底面（５層中）から伊万里系染め付け碗の破片10数点・唐津系碗の破片１点の他に備前焼の燈明皿（１・２）などの陶磁器類が出土していることから近世（17世紀後半）に属すると考えられる。



1　黄灰褐色土（灰色粘質土塊，Mn）
2　〃　（　〃　多）
3　灰色粘土
（橙褐色土，土器，木片，種子他）
4　橙褐色土（灰色粘土，Fe）
5　灰色砂（円礫，土器）



遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	陶器 燈明皿	9.9	7.2	1.7	底部外面篦ケズリ，他は横ナデ，「備前焼」	茶褐～暗紫灰	微砂㉗
2	〃 〃	(11.4)	(9.4)	1.75	〃 〃，〃 〃，〃	茶褐	〃 〃
3	土師質 鉢	(23.3)	－	－	横ナデ，内面煤付着	内淡灰褐 外暗灰褐	細砂，金雲母㊸

図74　土壙―18，出土遺物　縮尺１/30，１/４

土壙－19（図75）

ＣＷ22区において，標高約90cmの面で検出した。後世の大規模な攪乱の影響を強く受けており，南半部については大きく削り取られ，上面についても検出面である〈6〉層まで削平が及ん

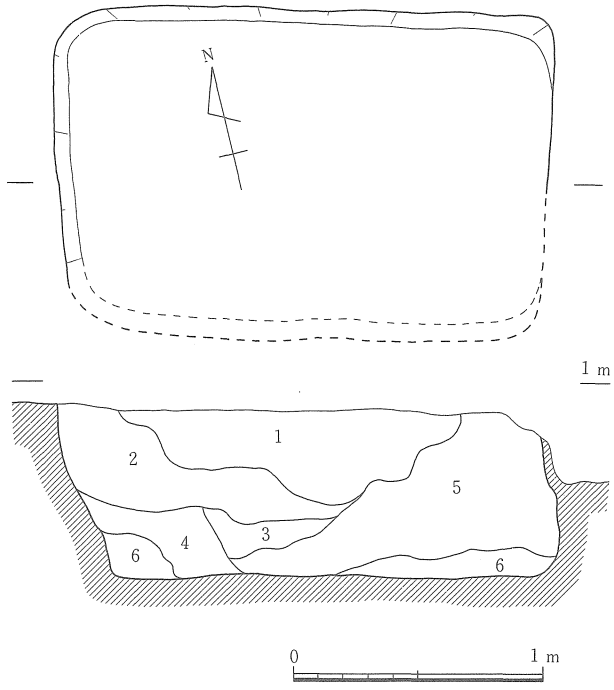
でいる。そのため，本来の掘削面については〈6〉層以上としか判断できない。遺構の重複としては，下部に溝－7の東側の肩部が存在する。

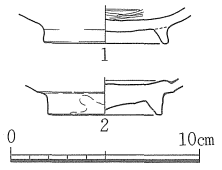
平面形は東西方向に軸を有す整った長方形を呈し，長軸198cm，短軸133cm（推定），深さ67cmを測る。掘り方は東壁の下半が若干オーバーハングしているが，全体的には逆台形の形を成す。底面は広く平坦で，標高約22cmに位置する。

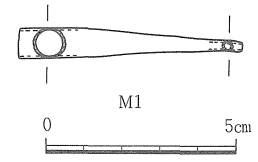
埋土は全体的に不均質で，各層が大きなブロック状堆積を示している。また，各々の層中においても茶褐色土塊・黄色土塊・灰色粘土塊などがやはりブロック状に含まれている。全体的には，下半に向かって粘質を強め，底部では炭化物を含む粘土層（6層）となる。このように，埋土の堆積状況は土壙－20・21と類似しており，同一の性格，同様の埋没状況が想定される。

出土遺物は白磁碗などを含む中世土器が主体であるが，若干，近世陶磁器類が認められる。

以上のことから，本土壙は近世前半に使用され，短期間の内に一気に埋め戻されたものと考えられる。







1　淡青灰色土（茶褐色土塊）
2　茶褐色土（青灰色土塊，土器，Fe多）
3　淡青灰色粘質土（茶褐色粘土塊）
4　茶～黄褐色粘質土（灰色粘土塊）
5　茶褐色土（灰色粘土塊，土器）
6　灰色粘土（炭，Fe多）

遺物番号	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師質 椀	－	6.6	－	内面施ミガキ，外面ナデ	淡黄白	細砂②
2	白磁 碗	－	6.0	－	高台部施ケズリ，内外面ナデ・施釉・沈線，外面工具痕あり	淡緑白	緻密

遺物番号	器種	現存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	材質	特徴
M1	キセル	5.9	0.8~0.3	0.8~0.3		銅	内面に木質残存，金属部分の厚さは約0.3mm

図75　土壙－19，出土遺物　縮尺1/30，1/4・1/2（M1）

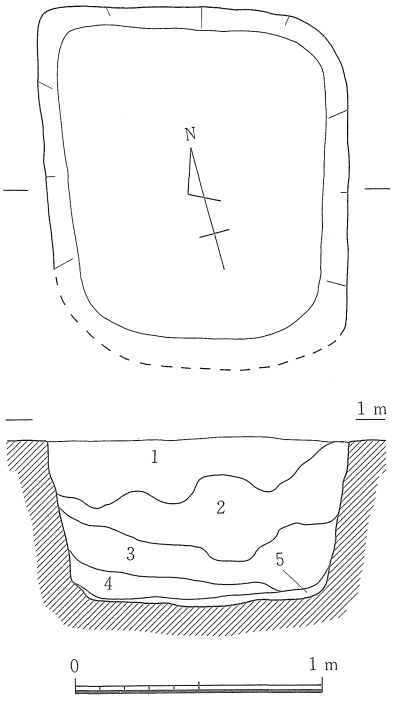
土壙－20（図76）

ＣＷ24区において，標高約92㎝の面，〈６〉層中で検出された。南端及び上面は攪乱で破壊される。

南北方向に軸を有し，長軸145㎝（推定），短軸122㎝，深さ68㎝を測る長方形土壙である。掘り方は断面台形であるが，立ち上がりは急峻で，直角に近い。底面高は標高25㎝である。全体的にシャープで整った形を呈す。

埋土は土壙埋土の大半を占める１～４層と底部に厚さ５㎝程度の堆積を見せる５層とに分離できる。前者の特徴は黄～茶褐色土塊や灰色粘土塊を多く含む不均質な（粘質）土層である。後者は炭化物を含む灰色粘土層で，下面（土壙底面）には薄い砂層が認められる。こうした状況から，本土壙は時間をかけて徐々に埋没したものではなく，５層が薄く堆積した後，一気に埋め戻されたと考えられる。

遺物は出土していないため時期決定は困難であるが，形状・埋土の状況などあらゆる点で後述の土壙－21と近似していることから，同時期，つまり，近世に属し，同一の性格を有す土壙と判断される。



1　淡青灰色土（茶褐色土塊）
2　淡茶褐色土（青灰色粘質土塊，黄色土塊）
3　茶褐色粘質土（青灰色粘土塊，Fe多）
4　暗茶褐色粘質土（灰色粘土塊少）
5　青灰色粘土（細砂，炭，Fe多）

図76　土壙－20　縮尺１/30

土壙－21（図77）

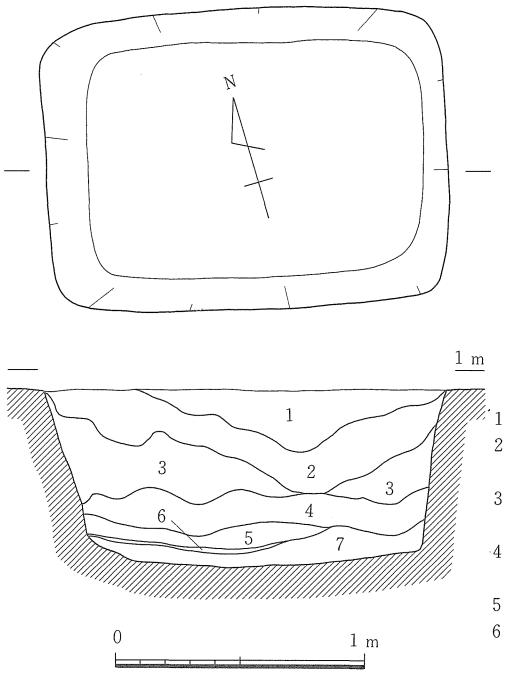
ＤＡ22区において，標高約92㎝の面で検出された。検出面は〈７〉層上面であるが，本来はそれ以上と考えられる。

東西方向に軸を有し，長軸161㎝，短軸121㎝を測る長方形土壙である。深さは約72㎝，底面高は標高約20㎝を測る。掘り方は断面逆台形を呈し，立ち上がりの傾斜は直角に近い状態を示す。平面形・掘り方ともに全体的にシャープで整った感を受ける。

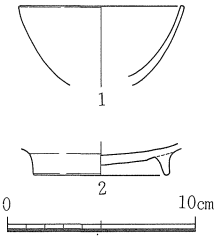
埋土は，１～３層は灰色粘土塊が多く含まれる不均質な粘質土が中心である。色調・粘土塊の多少によって分層を行っているが，基本的には一連の埋土と考えられる。４層は目が粗く，細砂の粘質土となり，炭化物・土器などを含む。５層は軟質の粘土層である。６層は暗灰色細砂層で，シジミ貝などの炭化有機物を多量に含む炭化物層として捉えられる。７層は灰色粘土混砂である。４～７層では５層以外は細砂が主となり，下半は砂となる。また，炭化物の存在

も注目される。下層（４～７層）についてはその性格は不明であるが，上半（１～３層）については，本土壙の廃棄時に一気に埋められた埋土と考えられる。

遺物は僅少で，いずれも細片であるため詳細な時期は不明であるが，中世土器に加え，伊万里系の陶器の破片が数点混在することから，近世前半と判断される。



1　淡黄灰色土（灰色粘土塊多，炭）
2　暗灰褐色粘質土
　（灰色粘土塊，灰色細砂）
3　暗黄灰色粘質土
　（灰色粘土塊・灰色細砂多）
4　茶褐色微～細砂粘質土
　（砂，炭，土器，Mn，Fe）
5　灰色粘土（軟質）
6　暗灰色細砂
　（炭過多，シジミなどの有機物）
7　灰色粘土混砂

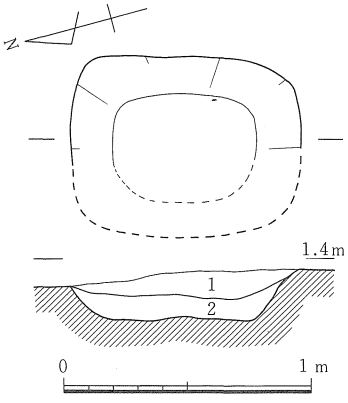


遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	磁器　碗	(8.8)	－	－	ナデ・施釉，内面に施文，「伊万里系」	白	精良，黒色粒
2	土師質　椀	－	7.3	－	底部外面押圧，他は摩滅で不明，二次焼成痕	灰褐	微砂㋑

図77　土壙－21，出土遺物　縮尺１/30，１/４

［b地区］

本地区では３基の土壙（土壙－25～27）が，〈４〉層上面において検出された。いずれも小形の隅丸方形を呈し，長軸70～90cm，短軸60cm前後，深さ20cm前後を測る。埋土は上部の被覆層に近似する単一層である。遺物は土壙－26で僅かに出土しているが，それ以外では検出されていない。ここでは土壙－25を代表例として取り上げて報告したい。



1　淡黄緑灰色土（炭，焼土，Fe）
2　黄緑灰色土　（炭，焼土，Fe，Mn）

図78　土壙－25　縮尺１/30

土壙－25（図78）

ＣＲ28区において，標高約120～130cm，〈４〉層上面で検出された。西半部は共同溝設置時に破壊されている。平面形は南北に軸を有す隅丸方形を呈す。長軸92cm，短軸は西半部破壊のため不明であるが，残存部分で55cmを測る。深

さは20cm，底面高は標高約60cmで平坦である。埋土は不明瞭ながら，淡黄緑灰色土で炭化物・焼土を少量含む上層と，黄緑灰色土でマンガンを含む下層とに分かれる。本土壙は，遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難であるが，検出面から近世に属すると考えられる。

b．溝

［a地区］

本調査区では5層上面で5条，3層上面で1条の溝が検出された。大半は調査区北半に存在し，南北方向を示す。溝－20は自然の溜り的性格が考えられ，説明は略した。

溝－15（図79）

ＣＵ～ＣＶ19区において，標高約110cm，〈5〉層上面で検出された。方向はＮ－15°－Ｅを示す。北端は調査外へ延び，南端は土壙－17に破壊される。幅30～35cm，深さ約30cm，長さ5.8ｍを測る。底面高は標高93cmである。掘り方はＵ字形を呈し，黄褐色土の単一層で埋まっている。下半には鉄分の沈着が著しい。遺物は土師質土器の細片が僅かに出土している。また，溝－16とは，掘削面以外は非常に類似した様相を呈しており，関連性の強さが窺われる。時期的には溝－16よりは古い段階ではあるが，中世末～近世に属する可能性が考えられる。

溝－16（図79）

ＣＵ～ＣＷ19区で，130cm前後，〈3〉層上面において，溝－15の東に平行して検出された。方向はＮ－15°－Ｅを示す。幅は約30cm，深さは８cm程度，長さは6.8ｍで，北端は調査区外へ延びる。底面高は標高115cm前後である。掘り方は浅いＵ字形を呈し，埋土は暗灰褐色土で，単一層である。遺物は出土していない。時期は検出面から近世に属し，畝状遺構と考えられる。

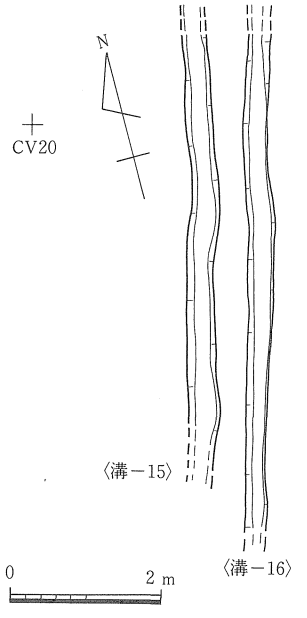


図79　溝－15・16　縮尺１/100

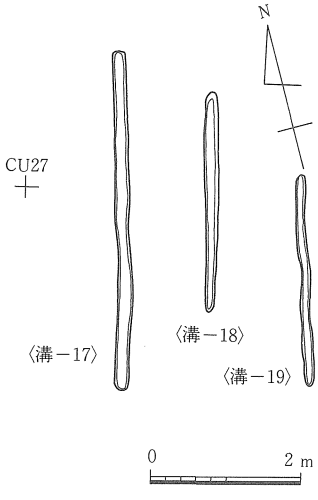


図80　溝－17～19　縮尺１/100

溝－17・18・19（図80）

ＣＴ～ＣＵ26区で，〈5〉層上面（標高105～110cm）で検出さ

れた。方向はいずれもＮ－13～15°－Ｅを示し，平行している。いずれも，幅15～20cm，深さ２～３cm，長さは2.8～4.6ｍである。埋土は暗黄褐色土である。鋤痕跡と判断される。

［b地区］

溝－28（図81）

ＣＴ～ＣＵ28区において，標高110～115cm，〈４〉層上面で検出された。溝－29の西側に沿って走っており，一部では同溝と重複するため東側の肩部を破壊されている。方向はほぼ南北方向で南北両端部ではやや西に振って蛇行気味に走り，調査区外に延びる。

残存長は５ｍ，幅約20cm前後を測り，掘り方はＵ字形を呈し，深さ25～30cm，底面高は標高85cm前後である。埋土は三分される。上半（１・２層）は灰色系の粘質土であるが，下半（３層）は粘質を弱め茶褐色系の土となる。遺物は少量ではあるが全体的に出土しており，土師質高台付椀・小皿・鍋がある。検出面などから時期は近世と考えられる。

溝－29（図81）

ＣＳ28区からＣＵ28区にかけて，西半部の既設共同溝による攪乱のため，各所において分断された形で検出された。検出面は標高110～115cm，〈４〉層上面である。方向は，やや西に振った南北方向を示すが，全体的に蛇行気味に走っている。ＣＳ線から北は調査区外に延びると予想される。

残存長は6.2ｍ，幅は30～40cmを測る。掘り方はＵ字形を呈し，深さ35cm前後，底面高は標高78cm前後で，南に向かって若干下降する傾向が窺われる。埋土は４層に細分されるが各層間に大きな差は認められず，上半が灰色系の粘質土，下半が茶～黄褐色土で粘質が弱まる。遺物は全体的に含まれ，土師質高台付椀・鍋などの破片がある。

本溝の時期は，このように検出面・出土遺物から近世に属すると考えられる。

以上のように，溝－28・29は検出面・形状・方向などの諸点において近似していることから，両溝は同一の性格を有し，溝－28埋没後，ごく短期間の内に本溝が構築された可能性が強い。

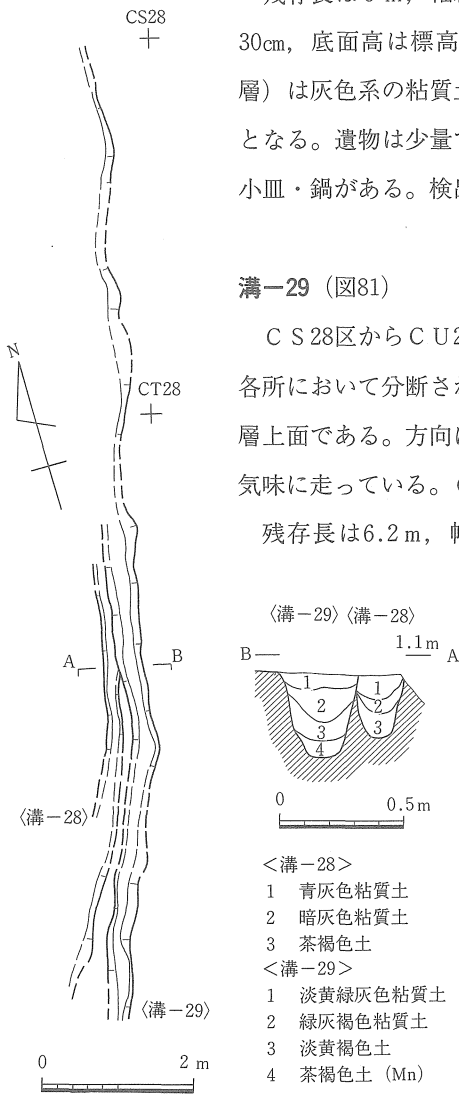


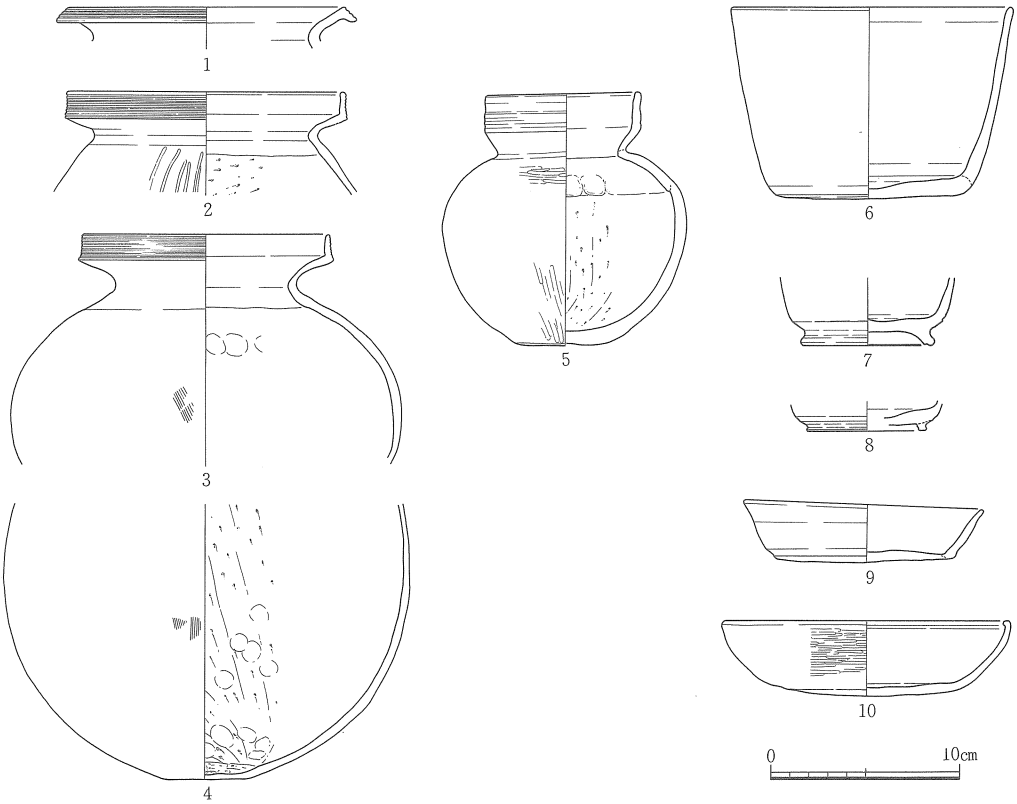
図81　溝－28・29　縮尺１/100，１/30

（４）その他の遺物

ａ．弥生～中世土器

１）弥生時代～古墳時代初頭（図82，図版16）

１～５はａ・ｂ地区で出土した遺物である。１は本地区における最古の遺物で，弥生時代後期前半に，５は弥生時代末に，そして，２～４は古墳時代初頭に属する甕である。１・２・４はｂ地区のピットから混入物として出土したが，それ以外はａ地区の７層下半～８層上面で出



遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	出土地点	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	弥生 甕	(14.6)	－	－	ｂ地区 CP28	凹線３条，外面煤少	暗褐	細砂
2	〃 〃	(14.8)	－	－	〃 〃	外面横ナデ後篦ミガキ⑩，櫛描沈線７条	暗茶灰褐	〃
3	土師器 〃	(13.2)	－	－	ａ地区 CX26	全面摩滅で不鮮明，櫛描沈線８条，黒斑	明黄褐	〃
4	〃 〃	－	4.5	－	ｂ地区 CF28	内面篦ケズリ後押圧，外面ナデ（一部にハケ），底部外面ナデ	淡灰褐	〃 ㉟
5	弥生 〃	8.25	4.8	13.5	ａ地区 CX26	底部外面ナデ・押圧，口縁部横ナデによる浅い凹線，黒斑	淡黄白～明茶褐	微砂㉗
6	須恵器 鉢	14.9	10.0	10.1	〃 CZ22	〃 篦キリ後ナデ，他は横ナデ	淡灰	細砂
7	〃 壺	－	7.1	－	〃 〃	全面横ナデ，高台と体部の境に篦ケズリ	灰	細～粗砂
8	〃 杯	－	(6.3)	－	〃 CZ18	〃	青灰	微～細砂
9	土師器 〃	12.7	9.6	3.3	ｂ地区	底部外面篦キリ後押圧，底部内面押圧・ナデ	(内)淡赤黄 (外)淡橙	〃～ 〃
10	〃 皿	15.3	8.9	4.0	ａ地区 CZ22	〃 押圧・ナデ，外面篦ミガキ，内面不明	明橙	微砂㉗

図82　出土遺物（１）〈土器〉　縮尺１/４

土している。3・5はＣＸ26～ＣＹ26区において出土している。このように本時期に属する遺物は，遺構は伴わないが，調査区北西部に分布する[註30]傾向が認められ，本調査区の北西側近隣に本時期の微高地の存在が予想される。

2）古　代（図82，図版16）

6～10は古代（約9世紀代）の遺物で，6～8は須恵器，9・10は土師器である。b地区において5層中から出土した9以外は，a地区南半に位置する河道の埋土上部層（A～D-1層）から出土している。このように，弥生～古墳時代初頭のものとは，分布地域が異なり，南に向かって量を増す傾向がある。また，4～7層では混入物ではあるが，緑釉の破片数点（図版16）も出土している。

3）中　世（図83）

11・12はピットから出土している。いずれも中世に属し，調査区内で検出されている柱穴群の中心的時期を推定させる。

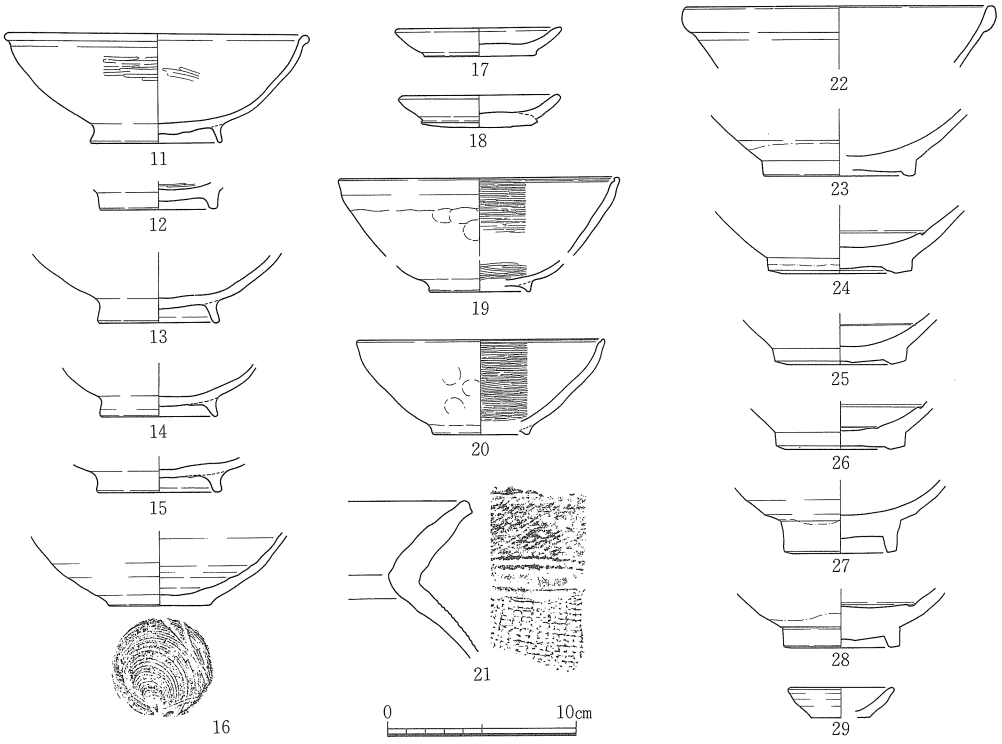
13～18はＣＸ・ＣＹ25・26区の7層上面において集中出土した遺物の一部である。遺物は南北に細長く堆積しており，その分布状態から溝状遺構の存在が想定されたが，掘り方が非常に不明瞭で確認できない部分が多いなどのことから，小規模な土器溜り的堆積遺物と判断した[註31]。13～15は土師質高台付椀で内外面ともに篦ミガキは確認されない。16は須恵質の椀で，底部外面には糸キリが認められる。このタイプの椀は，これまでのⅠ・Ⅱ次調査では出土例が非常に少なかったものであるが，今回の調査では一般的に見受けられる。いずれも中世（13世紀代）に属すると考えられ，検出されている遺構群の中ではやや新しい時期のものと一致する。

19～29は包含層出土の瓦器椀・亀山焼きの甕・輸入陶磁器である。すべてa地区から出土しており，その中でも調査区南半に多く出土する。白磁については出土数が多く，大半は小破片であるが総数は約30点にのぼる（図版16）。他に青磁の破片も2点出土している。

19・20は楠葉型の瓦器椀である。19は5層，20は4層から出土している。瓦器の出土数が少量であった今回の調査の中で，楠葉型についてはⅠ・Ⅱ次調査と大差ない数が出土しており，その割合いの高さが注目される。時期は13世紀～14世紀初頭の時期に集中しており，12世紀代が中心のⅠ・Ⅱ次調査地点に比べると新しい傾向がある。

22～28は白磁碗である。いずれも7層中あるいは7層下（A～D-1層上面）から出土している。高台部の低い22～26と高台部が高い27・28の二タイプに分けられる。

29は7層出土の褐釉である。



遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	出土地点	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
11	土師質 椀	16.0	6.9	5.9	a地区 CW23	内外面丁寧なナデ後篦ミガキ僅か，口径16×15.2cmの楕円	淡黄白	微砂，粗砂㊱
12	〃 〃	—	6.2	—	〃 CX25	内面篦ミガキ僅か，底部外面押圧	〃 (内)黒	〃
13	〃 〃	—	6.45	—	〃 CY26	摩滅で不鮮明	〃	〃
14	〃 〃	—	6.2	—	〃 〃	外面ナデ，内面摩滅・重ね焼き痕	〃	〃 ㉔
15	〃 〃	—	6.6	—	〃 〃	〃 ， 〃	〃	細砂
16	須恵質 〃	—	5.4	—	〃 CY25	底部外面糸キリ，他は横ナデ	淡青灰	〃
17	土師質 小皿	(8.8)	5.9	1.5	〃 〃	〃 篦キリ， 〃	淡黄褐	微砂
18	〃 〃	8.6	6.2	1.7	〃 〃	〃 〃 ， 〃	淡黄灰白	〃 ㉟
19	瓦器 椀	(14.8)	(5.4)	—	〃 CZ19	内面篦ミガキ・口縁部に沈線，外面押圧，「楠葉型」	(灰) 黒	〃 ㉗
20	〃 〃	(13.1)	(5.2)	5.0	〃 DB20	〃 ・ 〃 〃 ， 〃 ，「 〃 」	(内)暗灰褐 (外)淡灰	緻密
21	須恵質 甕	—	—	—	〃 CY25	口縁内面横ナデ・外面タタキ後横ナデ，内面ナデ，亀山焼	淡灰白	微砂，細砂㉒
22	白磁 碗	16.3	—	—	〃 DB19	横ナデ，施釉	淡灰緑白	緻密
23	〃 〃	—	(8.0)	—	〃 CZ17	内面～外面上半横ナデ・施釉，外面下半篦ケズリ	灰白	〃 ，黒色粒
24	〃 〃	—	(7.7)	—	〃 DB25	高台～底部外面篦ケズリ，他は横ナデ・施釉，内面沈線	淡緑灰白	〃
25	〃 〃	—	6.8	—	〃 DB20	底部外面篦ケズリ，他は横ナデ，内面沈線・半分施釉	淡灰白	〃
26	〃 〃	—	6.0	—	〃 CU26	高台篦ケズリ，他は横ナデ・施釉	〃	〃
27	〃 〃	—	6.2	—	〃 CY26	〃 ， 〃 ・ 〃 ，内面沈線	〃	〃 ，黒色粒
28	〃 〃	—	7.0	—	〃 DC22	外面篦ケズリ， 〃 ，内面施釉・沈線	淡灰緑白	〃
29	褐釉 鉢	(5.6)	(3.1)	1.6	〃 CY26	底部外面糸キリ，他は横ナデ，内面施釉	(内)淡灰白 (外)黒褐	微砂

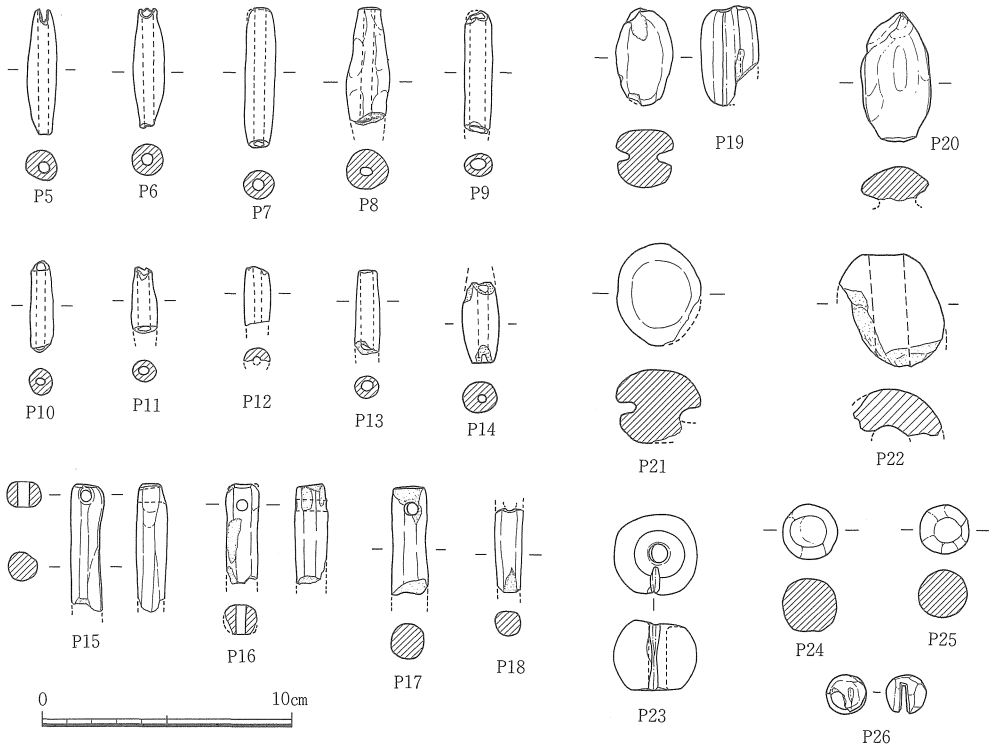
図83　出土遺物(2)〈土器〉　縮尺1/4

b．土製品

土錘（P5～23，図84）が最も多く出土した。P15はb地区，P14・17はc地区から，他はすべてa地区から出土している。5・7層が中心で，3・4層から出土したものはP9～11・P19・P23である。P22は他の土錘とは形態が異なり，弥生時代のものに類似していることか

ら，所属時期は異なる可能性が高いが，他は，主に中世（一部近世）に属すると考えられる。

P24・25（図84）は土玉である。a地区の4層から出土している。P26（図84）は鈴と考えられる。a地区3層から出土している。

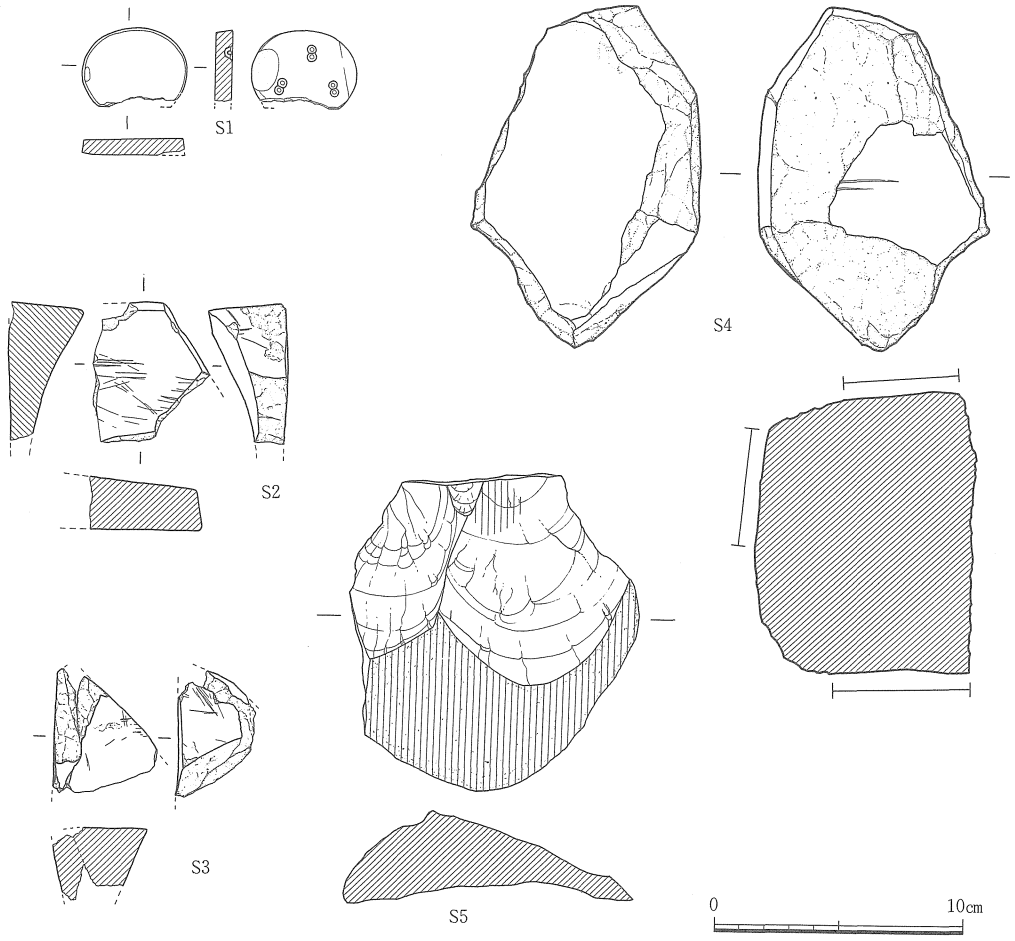


遺物番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	出土地点	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
P 5	土錘	5.0	1.0	1.2	6.2	a地区 7層	環状土錘，ナデ・押圧	淡灰褐	微砂⑯
P 6	〃	4.8	1.25	1.25	5.8	〃 5層	〃 ， 〃	淡赤褐～淡灰白	微砂
P 7	〃	5.6	1.2	1.2	7.4	〃 〃	〃 ， 〃 ，一部欠損	淡褐～淡茶白	精良
P 8	〃	[4.7]	1.7	1.6	11.2	〃 〃	〃 ， 〃	黄白～明赤白	微砂㉔
P 9	〃	[10.0]	1.1	0.9	4.6	〃 4層	〃 ， 〃	淡赤灰	精良
P10	〃	3.7	0.9	1.1	3.05	〃 3層	〃 ， 〃	黄褐	微砂⑯
P11	〃	[2.7]	1.1	0.9	2.2	〃 4層	〃 ， 〃	淡灰褐	〃 ㉓
P12	〃	[2.4]	1.0	[0.5]	2.0	〃 5層	〃 ， ナデ	灰黒	〃 ㉒，赤色粒㉔
P13	〃	[3.4]	1.0	0.9	3.0	〃 5層	〃 ， 〃	明黄褐	〃 〃
P14	〃	[3.2]	1.5	1.3	6.7	c地区 7層	〃 ， 〃	灰褐	〃 ㉒
P15	〃	[5.2]	1.2	1.2	9.1	b地区 〃	棒状土錘， 〃	淡黄褐	〃 ⑯
P16	〃	[4.0]	1.3	1.3	7.7	a地区 5層	〃 ， 〃 ，小孔径4mm，端部に面あり	黒褐	〃 ㉒
P17	〃	[4.3]	1.4	1.4	10.65	c地区 7層	〃 ， 〃 ， 〃 5mm， 〃	淡赤褐	〃 ⑯
P18	〃	[3.3]	1.1	1.0	4.6	a地区 5層	〃 ， 〃	明橙褐	〃
P19	〃	3.9	2.3	2.3	18.6	〃 3層	有溝土錘， 〃 ，一部欠損	茶褐	細砂
P20	〃	5.2	2.7	[1.4]	8.35	〃 7層	〃 ，ナデ・押圧，上端つまみ出し	〃	〃 ㉓，赤色粒㉔
P21	〃	4.1	3.4	(2.9)	33.3	〃 A-1層	〃 ，ナデ	〃	〃 ㉒
P22	〃	[4.5]	[4.2]	[1.9]	24.1	c地区 7層	環状土錘， 〃	淡乳褐	微砂
P23	〃	2.8	3.3	3.3	33.9	a地区 3層	有溝土錘， 〃	茶褐	細砂㉕
P24	土玉	2.1	2.2	2.2	8.9	〃 4層	ナデ，やや面取り的	淡茶灰	〃 〃 ，赤色粒
P25	〃	1.9	2.0	2.0	7.15	〃 4層	〃 ， 〃	暗灰	微砂
P26	土鈴	1.5	1.6	1.6	2.0	〃 3層	〃 ， 〃	淡灰白	微砂⑯

図84　出土遺物(3)〈土製品〉　縮尺1/3

c．石製品

石製品（図85）の出土数は非常に少なく，可能性のあるものも，多くは人為的かどうか不明瞭なものが多い。S 1は石帯で，両面が磨かれているが，裏面には仕上げの磨きが及ばない。下辺は小さな打ち欠きが認められる。裏面の穿孔はいずれも貫通している。S 2・3は砥石である。研磨面はいずれも3面が確認された。鋭利な刃物の痕跡が明瞭に認められる。S 4は砥石と考えているが，やや不明瞭である。S 5は斜線部分に磨きが考えられるが，これも不明瞭である。



遺物番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	出土地点	特徴
S 1	石帯	3.9	4.1	0.7	15.8	粘板岩	a地区 4層	丸鞆，3対の小孔は貫通，表・側面は丁寧なミガキ，裏面は粗いミガキ
S 2	砥石	5.6	4.7	2.8	82.8	流紋岩	〃 〃	欠損品，3面に使用痕あり
S 3	〃	5.2	4.1	2.7	44.8	〃	〃 A-1層	〃 , 〃
S 4	〃	13.6	9.3	11.3	1672	アプライト	〃 7層	5面の研磨面あり
S 5	磨石	12.0	12.6	3.8	550	斑糲岩	〃 4層	欠損品，割面の一部と外表面に磨面をもつ

図85　出土遺物（4）〈石製品〉　縮尺1/3

d．古　銭

金属器としては古銭（図86）があげられる。M２は最初の文字判読がやや不明瞭であったが，「皇宋通宝」と判断した。ａ地区４層出土である。M３はａ地区３層出土である。これは２枚が密着して出土した内の一枚である。「天禧通宝」と判読される。もう一枚については残りが悪く，「皇宋通宝」の可能性があるが，やや不明瞭である。M４はａ地区７層から出土したが，残りが非常に悪く，判読不可能である。これらの他にｂ地区７層においてもう一点出土している。これはM４と類似しているようであるが，判読不可能である。　（山本）

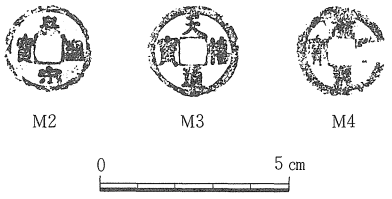


図86　出土遺物（５）〈古銭〉　縮尺１/２

註

21　ｂ地区については調査区が非常に細長く，東西幅が狭かったことや，大規模な攪乱により地盤が緩んでいたこともあって，調査中に土層観察用の断面が次々と崩落した。そのため，断面位置については直線的に作図することは不可能で，±50㎝の幅で東西にその位置が振れている。

22　乗岡実氏の御教示による。以下，近世陶磁器については全て同氏の教示を得た。

23　「２章　２．層序」での河道（A）・（B）は，１河道内での２面の河床と考え，河道－１と総称する。各々の河床面を河道－１（A）・（B）とし，対応させた。

24　橋脚の構造，杭列の性格，および建築材の特徴については，奈良国立文化財研究所の宮本長二郎氏から御教示頂いた。

25　本文作成後，能城修一氏から，杭・柱の樹種同定結果の資料を得た。同定資料は柱６本と，調査時に持ち帰り得た79本の杭である。これは，全杭数の約50％に当たる。杭は，取り上げ時に欠損したものが多く，重複を防ぐため，先端部のみを資料とした。樹種は23種を数え，現在の雑木林でもよく見かけるものが多い。比較的多種の材を使用しているが，コナラ属クヌギ節・コナラ属アカガシ亜属・コジイという，いわゆるドングリの成る木と，マツ属の２種類が大半を占める。針葉樹の割合は37％である。

樹種同定の結果から杭列・群ごとの特徴を見ていきたい。マツ属とクヌギは，それぞれ杭全体の23％近くを占めているが，杭群６以外ではほとんど使用されていない。杭群６におけるマツ・クヌギ材の集中的な使用が認められる。樹種と材の加工方法から検討してみると，杭列２と杭列４で共通しているコジイ５本は，ミカン割か角材に加工されている。１本のコジイの丸太を同手法で加工し，杭列２・４で同時に使用した可能性も考えられる。このことから杭列２の堰と，杭列４の護岸施設は同時に造られた可能性が高い。

樹種同定結果から，比較的手近かな方法で入手できる材を利用して杭群が形成されたことや，杭群６での材の集中的使用，堰と護岸施設の時間的関係を推察する資料を得ることができた。杭群形成を考える上で，樹種同定は有効かつ必要であると言えよう。

尚，今回，時間的制約のため，本報告書に能代修一氏による樹種同定結果のレポートを掲載することができなかった，正式な同定結果は，後日改めて報告書，もしくは年報に掲載する予定である。

樹　　種	杭列1	杭列2	杭列3	杭列4	杭列5	杭列6	不明	計
コナラ属クヌギ節						18		18
アカマツ						9		9
クロマツ						3		3
マツ属複雑管束亜属					1	2	3	6
モミ属				1	2	7		10
コジイ		3		2		1		6
コナラ属アカガシ亜属		1			1	3		5
ノグルミ	2					2		4
エゴノキ属						2		2
コナラ属コナラ節			1			1		2
クロモジ属				1		1		2
ヒサカキ					1	1		2
スギ	1							1
センダン	1							1
スダジイ			1					1
カゴノキ			1					1
ヤマモモ					1			1
クマシデ属イヌシデ節						1		1
シキミ						1		1
クマノミズキ類						1		1
ウツギ						1		1
ユズリハ						1		1
計	4	4	3	4	6	55	3	79

26　井戸の埋土表記で遺構観察表においては上面～上層，中層，下層と三分した表記をしている。しかし，本井戸が攪乱で上層が削平され存在しないこと・中層と下層の間で明瞭な差が存在することから上面～上層と中層を合わせて上部層とし，下層を下部層として扱っている。

27　松谷暁子氏の御教示による。

28　本井戸では遺構観察表の表記と一致している。

29　コギシギシ・マクワウリ・キカラスウリ・センダンは粉川昭平氏，炭化米・炭化大麦については松谷暁子氏の御教示による

30　Ⅰ・Ⅱ次調査地点では当時期の微高地を確認したが，それ以外に今回のⅢ次調査地点の周辺，特に，西方周辺に，新たな微高地の存在が考えられる。

31　年報4において溝として報告しているが，慎重に検討した結果，遺構として捉えることには無理があることから，このように遺物が溜り的に堆積したものとして訂正する。
岡山大学埋蔵文化財調査室『岡山大学構内遺跡調査研究年報』4　1987

Ⅲ 次 調 査 遺 構 一 覧 表

＊凡例……◎：多い，○：普通，△：少，Ｖ：僅少，×：無し，（ ）：推定　〔 〕：残存値

表１　掘立柱建物一覧表

番号	地　区	規模(間)	桁行(cm)	梁間(cm)	棟方向	柱穴	柱痕	時　期	図番号	頁
1	a 地区　CT・CU23・24	4×2	688	349	N－95°－E	円	×	古代末～中世初頭	15	32
2	〃　CX・CY25	2×2	382	374	N－93°－E	〃	×	〃　〃	16	33
3	〃　CX・CY21・22	4×2	716	307	N－104°－E	〃	一部○	中世初頭	17	33・34

表２　柱穴列一覧表

番号	地　区	規模(間)	桁行(cm)	梁間(cm)	棟方向	柱穴	柱痕	時　期	図番号	頁
1	a 地区　CW23・24	2×1	454	274	N－94°30′－E	円	×	古代末～中世初頭	18	34・35
2	〃　CX23・24	東西３間	541	－	N－100°－E	〃	×	〃 ～ 〃	19	35
3	〃　CX24,CY23・24	3×2	653	370	N-101°30′-E	〃	○	中世初頭	20	35・36
4	〃　DA22	3×2	424	205	N－107°－E	〃	×	古代末～中世初頭	21	36・37
5	〃　CW・CX19	南北５間	822	－	N－17°20′－E	〃	一部○	中　世	22	37
6	〃　〃	南北３間	451	－	N－21°15′－E	〃	〃	〃	22	37

表３　井戸一覧表

Ｙ型:上半部がラッパ状に開く形状，Ｕ型:上半部が開かない形状

番号	地　区	規　模（cm）			平面形	断面形	遺　物						時　期	図番号	頁
		長軸	短軸	深さ			上面～上層		中　層		下　層				
1	a 地区 CW23	[115]	111	160	円	Ｙ型	削平で消失	○	土師質椀・皿 鍋，白磁碗 (1・2・4・6～8)	△	土師質皿（3・5） 木器（W1～3）		古代末～中世 (12世紀)	23 24	38～ 40
2	b 地区 CS・CT27・28	246	[143]	185	楕円	Ｙ型	v 土師質皿(5)	○	土器小～細片	○	土師質椀・皿 （1～4） 須恵質鉢（６） 種子類(ウリ他) 炭化米・大麦		古代末～中世 (12世紀)	25 26	40 41

表４　土壙一覧表

番号	地　区	規　模（cm）			平面形	埋土等の特徴	遺物量	時　期	検出面	図番号	頁
		長軸	短軸	深さ							
1	a 地区　DB16・17	74	38～50	6～10	不定形	単一層，底部凹凸	v	古代末～中世初頭	A-1層	27	42
2	〃　DB17	[48]	36	7	〃	暗灰褐色土，７層に類似	×	〃　〃	〃	7	－
3	〃　DA21	115	74	25	長楕円形		×	〃　〃	C-1層	28	43
4	〃　DB・DC22	120	(108)	22	円形		v	〃　〃	A-1層	29	43
5	〃　CT25	95	93	41	〃		×	中世	7層上面	30	43・44
6	〃　CU23・24	167	133	20	楕円形	掘り方不明瞭	△	古代末～中世初頭	〃	31	44
7	〃　DB23	(103)	84	24	隅丸方形	単一層	○	中世初頭	5層上面	32・33	44・45
8	〃　DA23	250	(104)	42	長楕円形	下面に炭化物◎	○	〃	〃	33・34	45・46
9	〃　CW22・23	126	(80)	20	楕円形	単一層	△	中世	6層中	35	46
10	〃　DB18	108	95	15	不整円形	〃	△	〃	5層上面	36	46・47
11	〃　CT20	93	(45)	28	長楕円形		×	古代末～中世初頭	7層上面	37	47
12	〃　CZ・DA21	71	71	48	円形		v	〃　〃	〃	38	47
13	〃　CY25	150	130	37～42	不整円形	上半に炭・土器片◎	△	中世初頭	〃	39・40	48
14	〃　CV26	97	79	22	〃		△	中世	〃	41	49
15	〃　CV19	94	73	30	長方形		v	近世	5層上面	71	66
16	〃　CW19	154	(134)	53	楕円形		v	〃	〃	72	66・67

番号	地区	規模（cm）			平面形	埋土等の特徴	遺物量	時期	検出面	図番号	頁
		長軸	短軸	深さ							
17	a地区 CV・CW19	182	178	80	隅丸方形		△	近世	5層上面	73	67・68
18	〃 DB17	118	90	63	長方形	底部に段あり	○	近世前半	〃	74	69
19	〃 CW22	198	(133)	67	〃	ブロック状堆積	△	〃 〃	6層中	75	69・70
20	〃 CW24	(145)	122	68	〃		×	〃 〃	〃	76	71
21	〃 DA22	161	121	72	〃	上半に粘土塊，下半に炭◎	v	〃 〃	7層上面	77	71・72
22	b地区 CN28	70	[14]	18	隅丸方形		×	中世	〃	42	49
23	〃 CR28	90	[30]	30	〃		×	古代末～中世	〃	43	50
24	〃 CO27	74	34	10	〃	単一層	△	中世	5層上面	44	50
25	〃 CR28	92	[55]	20	〃		×	近世	4層上面	78	72・73
26	〃 CP28	96	[50]	16	〃	暗灰褐色土，炭含む	v	〃	〃	7	－
27	〃 CS28	70	60	18	〃	茶褐色土，黄色土粒含む	×	〃	〃	7	－

表5　溝状遺構一覧表

番号	地区	規模（cm）			方向	埋土等の特徴	遺物量	時期	検出面	図番号	頁
		幅	深さ	底面高							
1	a地区 DA21～DB23	32～56	15～20	52～60	N―95°－E	砂質強い	×	古代末～中世初頭	C-1層	46	52
2	〃 DA23・24	40～50	20	60	〃	〃	×	〃 〃	A-1層	47	52
3	〃 CX22～CZ25	40～140	30	54～60	蛇行	砂の混入	×	〃 〃	8(D-1)層上	48	52・53
4	〃 CX18～DA21	80～130	27	63～66	N－52°－E	砂質強い	v	〃 〃	7層上面	49	53
5	〃 DB16～25	50～100	25～40	50～60	N－105°－E		△	〃 〃	A-1層上面	50・51	54・55
6	〃 DB20～22	90～110	20～30	45～60	やや蛇行		v	〃 〃	〃	52	55
7	〃 CW～DA22他	100～120	20～40	50～70	N－2～7°－E	溝の重複	○	〃 〃	7層上面	53～55	55～58
8	〃 DA・DB20～25	90～100	30～60	40～60	N－約98°－E	〃	○	〃 〃	〃	56・57	58～60
9	〃 CY・CZ21	70	15	70	蛇行	砂層	×	〃 〃	〃	58	60
10	〃 CY23	60～70	15	70	〃	〃	×	〃 〃	〃	59	61
11	〃 CT22～27	60～70	30～35	45～70	N―101°―E		v	〃 〃	〃	60	61
12	〃 CT～CY20	60～70	20	55～80	N－15°－E		v	中世	〃	61	62
13	〃 CT20	100	30	50	〃		v	〃	6層上面	62	62
14	〃 DB24	60	14	66	N－80°－E	灰褐色土	×	古代末～中世	A-1層中	45	－
15	〃 CU～CV19	30～35	30	93	N－15°－E	単一層	v	中世末～近世	5層上面	79	73
16	〃 CU～CW19	30	8	115	N―15°―E	〃	×	近世	3層上面	79	73
17	〃 CT～CU26	20	2～3	107前後	N－13～15°－E	〃	×	〃	5層上面	80	73・74
18	〃 〃	15～20	〃	〃	〃	〃	×	〃	〃	80	73・74
19	〃 〃	15	〃	〃	〃	〃	×	〃	〃	80	73・74
20	〃 DA23・24	90～100	5～7	95～101	東西	灰黄褐色土	×	〃	〃	7	－
21	b地区 CT27～CU28	70～100	15～20	40	N－45°－E	単一層	×	古代末～中世初頭	8層上面	64	63
22	〃 CT28～CU28	30～40	60	45	南北		×	〃 〃	7層上面	65	63・64
23	〃 CT27～CU28	60～70	20	55～65	〃		×	〃 〃	〃	66	64
24	〃 CQ27～CR28	94	20	70	N－130°－E	単一層	v	〃 〃	〃	67	64
25	〃 CO27・28	68	38	52	東西		×	中世初頭	〃	68	65
26	〃 CO27・28	120	36	35	N―110°―E		×	古代末～中世初頭	8層上面	69	65
27	〃 CN27・28	50～55	23	60	N－95°－E		×	中世初頭	7層上面	70	65
28	〃 CT～CU28	20	25～30	85	南北（蛇行）		△	近世	4層上面	81	74
29	〃 CS～CU28	30～40	35	78	〃 〃		△	〃	〃	81	74

第３章　Ⅳ次調査の概要

１．調査区の位置

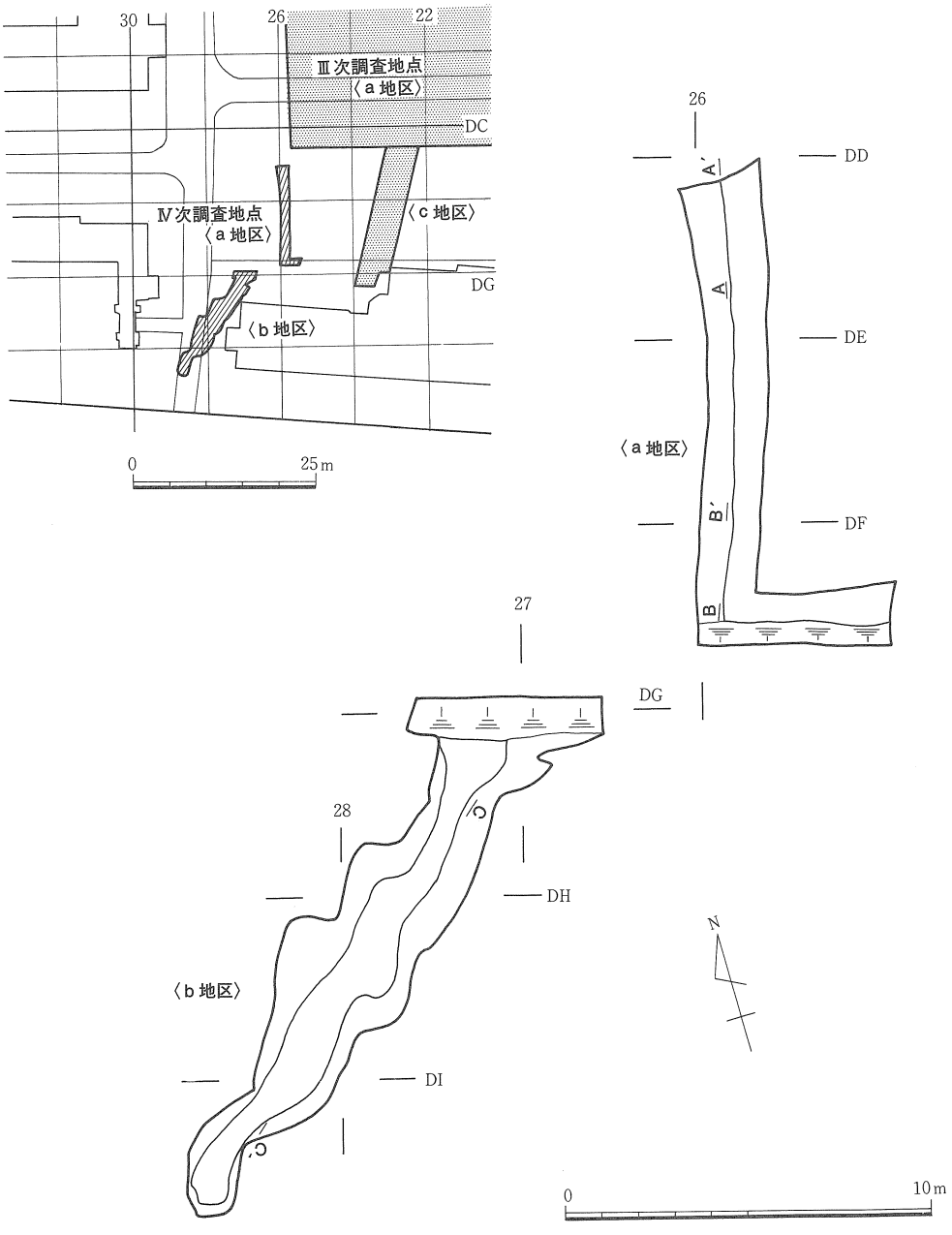


図87　調査区位置・区割り図　縮尺１/1000，１/200

本調査は，既述のように医療短期大学部校舎周辺の外溝工事に際して実施された。調査区はⅢ次調査地点ａ地区の南西隅に隣接しており，既設の共同溝をはさんで二ヶ所に分割されている（図87）。

ａ地区（ＤＤ～ＤＦ25区）は，幅１ｍ弱，全長約17ｍのＬ字形の調査区である。ａ地区は，Ⅲ次調査地点ｃ地区の西10ｍの地点でもあり，ｃ地区で確認された古代の河道及び河道に関連すると考えられる橋脚ならびに護岸関連遺構が検出される可能性が高かったため，注目された。

ｂ地区（ＤＧ～ＤＩ27・28区）は，幅約１ｍ，長さ15ｍ弱の不定形な調査区である。本調査区は，鹿田地区内では最南端部の調査区でもあり，狭い範囲ではあるが，鹿田地区東南端部の様相を知る手がかりとなる調査となった。

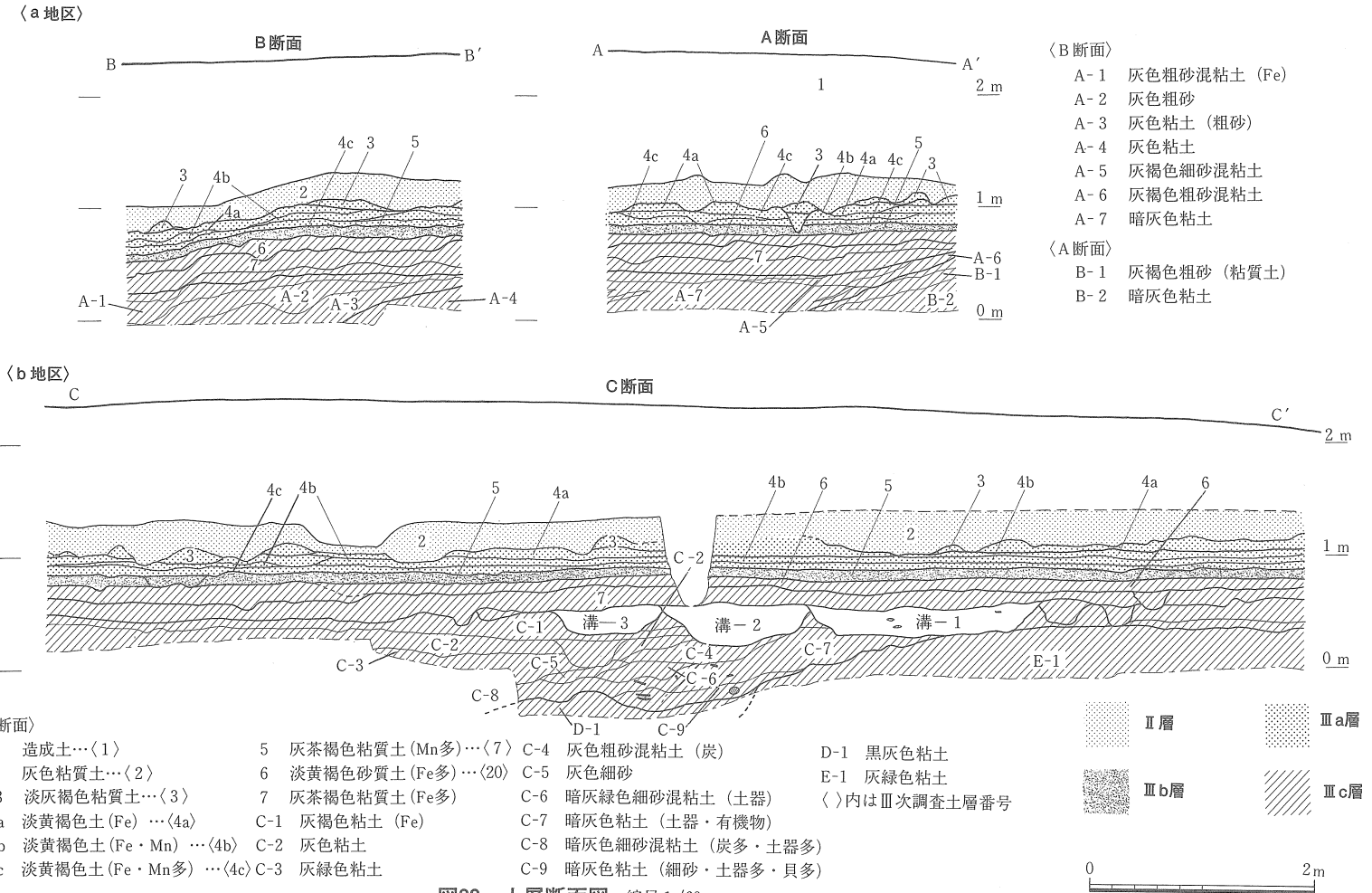
調査面積はａ地区が14㎡，ｂ地区が16㎡を測る。

２．層　　序

ａ地区は，調査区西壁の北端部分（図87Ａ断面・図版18－２）と南端部分（同Ｂ断面・図版18－１）の土層断面を，ｂ地区は調査区東壁の土層断面（同Ｃ断面・図版18－３）を取り上げて，本調査地点の層序についての説明をする（図88）。またその中で，鹿田遺跡の基本層序とⅢ次調査での土層との対応関係にも触れることにする。尚，Ｂ断面南端部で全層にみられる緩やかな落込みは，調査区に南接する既設共同溝工事の際の影響で地盤沈下したものである。

１層は，表土及び造成土（基本層序Ⅰ層）で，約55㎝前後の厚さで堆積する。２層は灰色粘質土で，明治期の水田土壌（Ⅱ層）に当たる。３層は淡灰褐色粘質土，４層は淡黄褐色粘質土で近世水田土壌（Ⅲａ層）に当たる。３層は部分的に認められるのであるが，４層はマンガンの包含状況によって，二～三分できる。また，その境界には鉄分が薄く沈着し，各層は，ほぼ水平に堆積している状況である。以上の１～４層は，Ⅲ次調査での１～４層に当たる。５層は，灰茶褐色粘質土でマンガンを多く含むことが特徴である。中世の堆積層（Ⅲｂ層）で，Ⅲ次調査の７層に当たる。本調査地点では，Ⅲ次調査地点での５・６層は認められない。

６層以下は古代の堆積層（Ⅲｂ層）に当たる。６層は淡黄褐色の砂質土で，Ⅲ次調査地点ａ地区のＣＺ線以南に広がる河道の最終埋土に当たる。Ⅲ次調査地点での〈A-1〉層である。７層はＤＤ線以南にのみ認められる層で，６層に似て鉄分を多く含むが，固くしまった灰茶褐色粘質土である。７層はⅢ次調査地点ｃ地区でも薄くではあるが認められ，３～５層下部に当たる（図９）。以上の１～７層は本地点ａ・ｂ両地区で共通する。一方，７層より下層では，両地区共に河道状の堆積状況が看取されるが，直接的なつながりはなく，ｂ地区で７層直下から遺物・炭を多く含む溝状遺構が検出されるのに対して，ａ地区ではそのような状況がみられない。



〈B断面〉
- A-1　灰色粗砂混粘土（Fe）
- A-2　灰色粗砂
- A-3　灰色粘土（粗砂）
- A-4　灰色粘土
- A-5　灰褐色細砂混粘土
- A-6　灰褐色粗砂混粘土
- A-7　暗灰色粘土

〈A断面〉
- B-1　灰褐色粗砂（粘質土）
- B-2　暗灰色粘土

〈C断面〉
- 1　造成土…〈1〉
- 2　灰色粘質土…〈2〉
- 3　淡灰褐色粘質土…〈3〉
- 4a　淡黄褐色土(Fe) …〈4a〉
- 4b　淡黄褐色土(Fe・Mn) …〈4b〉
- 4c　淡黄褐色土(Fe・Mn多) …〈4c〉
- 5　灰茶褐色粘質土(Mn多)…〈7〉
- 6　淡黄褐色砂質土(Fe多)…〈20〉
- 7　灰茶褐色粘質土(Fe多)
- C-1　灰褐色粘土（Fe）
- C-2　灰色粘土
- C-3　灰緑色粘土
- C-4　灰色粗砂混粘土（炭）
- C-5　灰色細砂
- C-6　暗灰緑色細砂混粘土（土器）
- C-7　暗灰色粘土（土器・有機物）
- C-8　暗灰色細砂混粘土（炭多・土器多）
- C-9　暗灰色粘土（細砂・土器多・貝多）
- D-1　黒灰色粘土
- E-1　灰緑色粘土
- 〈 〉内はⅢ次調査土層番号

図88　土層断面図　縮尺1/60

このように両地区間にはやや異なった状況が看取できる。ここでは土層の堆積状況から，本調査地区独自に河道をＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅに分け，それぞれについて層番号を付けている。A-1～7層は粗砂を含む灰～灰褐色粘土で，その下層にあるB-1層の暗灰色粘土に比べるとやや明るい。また，B-1層上面で急激な傾斜が形成されている。A-1～3層は，Ⅲ次調査地点ｃ地区〈A-2〉層に，A-4～7層は〈A-3〉層に，そしてＢ－２層は〈B-1〉層に対応すると考えられる。河道Ｃの上層にあたるC-1～5層は灰色粘土や細砂で，C-6～9層は暗灰色粘土と細砂が互層状になっており，湧水が著しい。D-1層は黒灰色粘土で，河道Ｃの下層に当たる可能性がある。E-1層は灰緑色粘土で，南に向かって上面がほぼ水平な状態で堆積しており，やや安定していた面であったと推測できる。

3．遺構・遺物

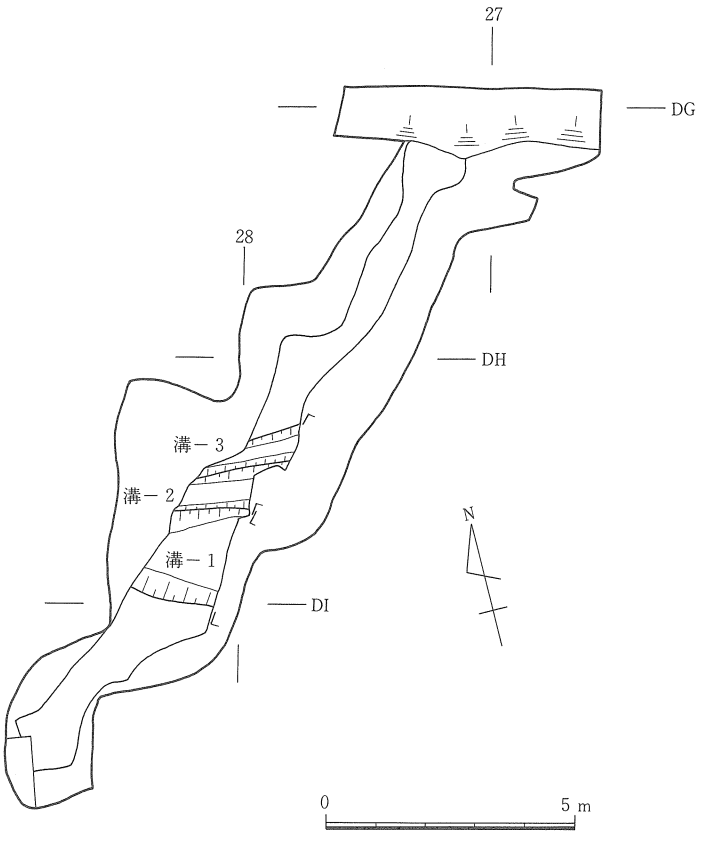
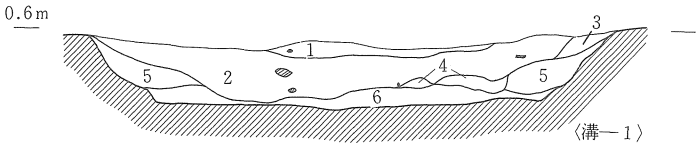


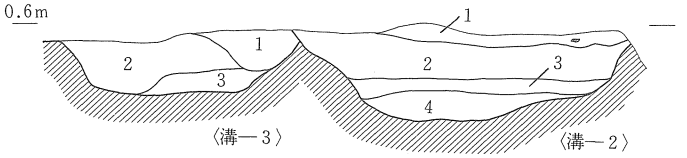
図89　b地区遺構全体図　縮尺1/150

本調査区では，１層を機械で除去した後，２層以下を手掘りで下げ，遺構検出を行った。ａ・ｂ地区では，Ⅲ次調査地点ａ地区南半からｃ地区にかけて確認された古代の河道の一部を確認し，また，ｂ地区では河道肩部上に溝状遺構を３条検出した（図89）。中世の遺構としては，ｂ地区北半で５層上面において，わずかに柱穴状遺構を２基検出したが，遺物は出土していない。中世～近世にかけては，僅少な遺物片が包含されるにとどまった。そこで本項では，古代の河道及び溝状遺構について取り上げる。

a．溝



1　淡灰白色粘質土（炭多・土器）
2　灰黄褐色粘質土（炭粒多・土器・微砂）
3　灰褐色粘質土（Fe）
4　黄褐色粘質土（炭・Fe）
5　淡灰褐色粘質土（炭・Fe）
6　灰黄褐色粘質土（Fe多）



1　淡灰褐色粘質土（炭多）
2　淡灰茶褐色粘質土（Fe）
3　灰褐色粘質土（炭）

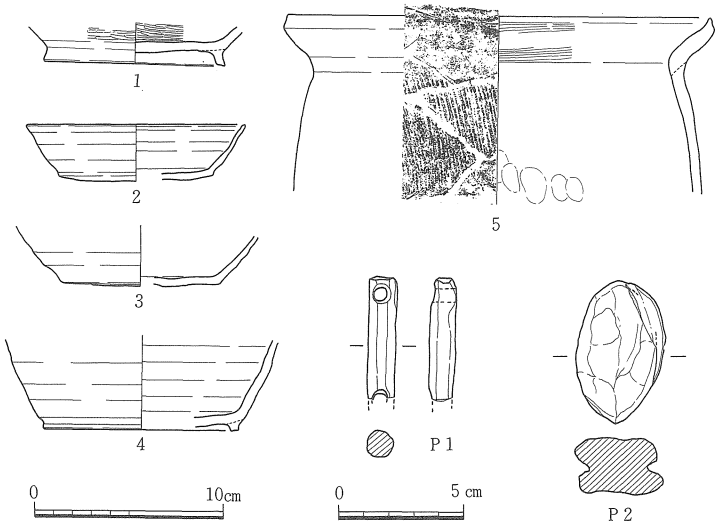
1　灰褐色粘質土（炭多・土器）
2　淡灰色粘質土（炭・Fe）
3　淡灰色粘土（Fe多）
4　灰色粘土（Fe多）

0　1m

図90　溝－1・2・3　縮尺1/30

溝－1（図89・90，図版19）

ＤＨ28区で検出された。標高40cm付近で確認されている。流路はほぼ東西方向だと思われる。断面は逆台形を呈しており，幅は上面で約120cm，下端で約155cm，深さ約28cmである。遺物は１・２層に集中し，炭も多く含んで全体に黒っぽい。最下層の６層は，鉄分が多く沈着しており，下層の灰色粘土と明確に区別できる。



溝－2（図89･90,図版19－2）

ＤＨ28区で検出された。標高40cm付近で確認され，溝－１同様，ほぼ東西方向に走る溝と思われる。幅は上面で約140cm，下端で約55cm，深さ40cmを測る。掘り方はやや二段掘りになっている。埋土全体に鉄分が多く，１層には土器・炭が包含されていて黒っぽい。

遺物番号	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師器 椀	—	(9.6)	—	内外面篦ミガキ，底外面篦キリ後ナデ，内面炭付着	内黒 外淡黄白	微砂，雲母◎
2	須恵器 杯	(11.5)	8.2	3.0	内外面横ナデ，〃　〃	灰	精良
3	〃　〃	—	(9.0)	—	〃　，〃　〃・押圧	淡灰白	細砂◎
4	〃　〃	—	(11.3)	—	〃　，底部外面ナデ	灰白	精良，微砂◎
5	土師器 甕	(22.4)	—	—	内面ナデあげ，外面縦ハケ・煤付着，口縁部内外面横ハケ後横ナデ	暗茶褐	細砂◎

遺物番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
P1	土錘	(4.9)	1.1	(1.0)	6.7	押圧，摩滅すすむ	灰白	精良
P2	〃	5.7	3.5	2.2	44.0	ナデ，押圧，絞り目あり，籾痕あり	黄褐	細砂

図91　溝－1～3　出土遺物　縮尺1/4・1/3（P1･2）

溝－3（図89・90，図版19－3）

ＤＨ28区で検出された。標高40cm付近で確認され，流路方向は東西より，やや北東－南西方向であると思われる。幅は上面で約100cm，下端で約60cm，深さ20cm，底面は標高約30cmの位置である。遺物はほとんど含まれないが，１・３層には炭化物がみられる。

溝－１～３からは遺物が出土しているが，調査面積の狭小さから，遺構ごとに明確な区分ができない。しかし，３条の溝に大きな時期差はなく，断面観察からも短期間のうちに溝１から２そして３へと掘り直されたものと考えられる。時期は８世紀後半～９世紀に比定される。

ｂ．河　道

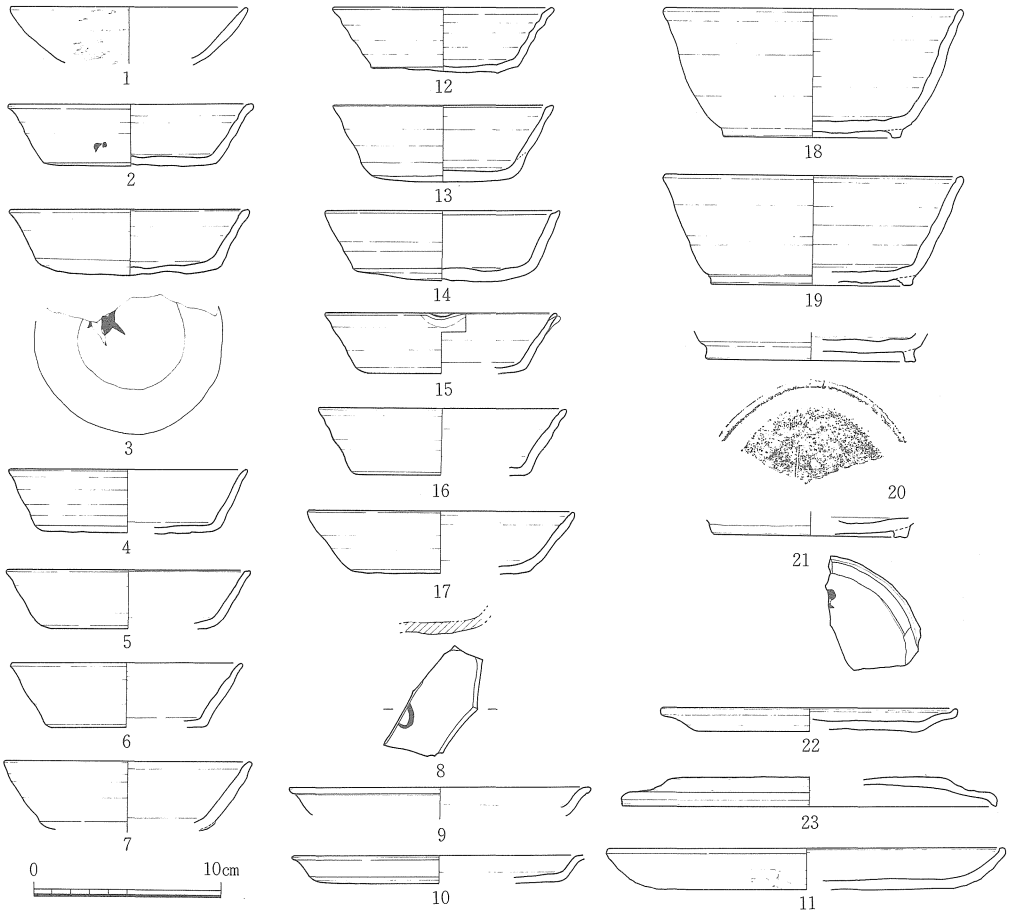
河道－（Ａ）・（Ｂ）（図88）

ａ地区で検出された河道－（Ａ）・（Ｂ）は南へ向かって落ちる河道である（Ａ・Ｂ断面）。土層観察から，Ⅲ次調査ｃ地区の河道－１（Ａ）・（Ｂ）に対応すると考えられる。位置的にみて河道－（Ａ）・（Ｂ）共にほぼ東西に流路を推定できる。河道－（Ｂ）は調査区内ではその一部しか確認されていないため，堆積状況すら明らかではないが，B-1層上面の急傾斜は，明らかに水流の状況が変化したものと考えられる。また河道－（Ａ）は標高約0.5ｍ付近を上面として，その底面は標高０ｍよりさらに低くなると思われ，深さ50cm以上，幅も15ｍをこえるものと思われる。河道－（Ａ）の埋土は，大きくみると灰色粘土と粗砂の互層であり，堆積の傾斜もやや緩やかである。部分的に標高０ｍまで掘り下げたが，Ⅲ次調査ｃ地区でみられたような杭群を伴う施設は検出されなかった。また，遺物も出土していない。

河道－（Ｃ）・（Ｄ）・（Ｅ）（図88・92～95，図版20～23）

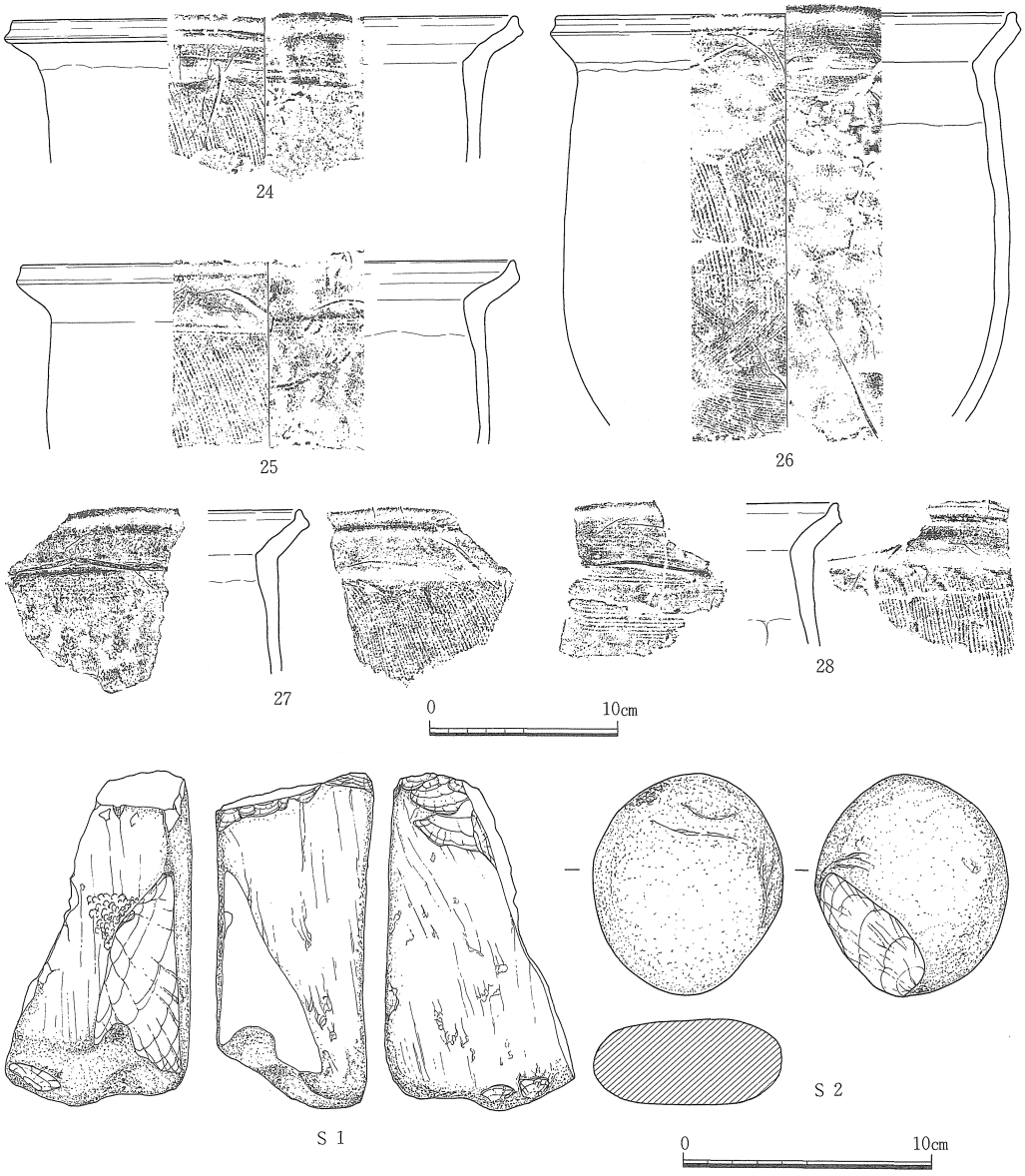
ｂ地区では河道－（Ｃ）・（Ｄ）・（Ｅ）が検出されている。本調査区では湧水が著しく，壁の崩落も激しかったので，部分的な深掘りに終わっている。最も大きく捉えられたのは河道－（Ｃ）である。確認された位置では，深さ90cm，底面は標高－37cm前後を測る。C-4～9層は細砂の混じる灰～暗灰色粘土で，特にC-6～9層には遺物が多く含まれている。C-9層下面は非常に凹凸が激しく，遺物はくぼみ部分から集中的に出土している。出土遺物には，土師器杯・甕，須恵器杯・蓋のほか，多量の土錘，加工痕のある鹿角，馬骨，また，ハイガイ，シジミ等の貝類(註1)がある。遺物から河道－（Ｃ）は８世紀後半～９世紀にかけて埋没したと推測できる。

以上，ａ・ｂ地区における古代の河道には杭群を伴う遺構がみられなかったが，河道－（Ｃ）の狭い部分から出土している多量の遺物から考えて，河道が完全に埋没する以前からｂ地区南方の比較的近くには，集落が存在していた可能性が高い。（大橋）



遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
1	土師器 椀	(12.4)	—	—	横ナデ，外面粗い篦ミガキ	淡茶褐	微砂㋑
2	〃 杯	(13.3)	9.2	3.3	〃 ，底部外面押圧・外面墨書あり，底部外面以外丹塗り	暗赤褐 (底外)淡灰褐	〃 〃
3	〃 〃	12.6	9.6	3.5	〃 ， 〃 ・ 〃 ， 〃 〃	内暗赤褐 内明赤褐	〃
4	〃 〃	(12.6)	9.0	3.3	〃 ，底部外面篦キリ後粗いナデ・押圧，内外面丹塗り	赤黄	〃
5	〃 〃	12.7	9.3	3.1	〃 ，底部外面篦キリ後ナデ・炭素付着， 〃	内暗赤褐 外赤茶褐	微砂
6	〃 〃	12.1	8.1	3.4	〃 ，底部外面ナデ，内外面炭素付着	内茶褐 外黒褐	粗砂㊂，細砂㋑
7	〃 〃	(12.9)	9.3	—	〃 ，底部外面篦キリ後ナデ，内外面炭素付着	暗赤褐	細砂
8	〃 杯	—	—	—	内面ナデ・外面墨書あり，外面ナデ後押圧	淡茶褐	精良，石英・雲母
9	〃 皿	(15.8)	—	—	〃 ，口縁外面沈線一条，内外面丹塗り	暗赤褐	微砂㋑
10	〃 〃	(15.3)	13.2	1.5	〃 ，底部外面篦キリ後ナデ，内外面炭素付着	黒～暗褐	微砂・白色粒
11	〃 〃	(20.8)	15.7	2.2	内面横ナデ，外面篦ケズリ後ナデ・押圧，底部外面ナデ	淡灰褐	微砂㋑
12	須恵器 杯	10.6	7.8	3.4	横ナデ，底部外面篦切り後押圧・ケズリ	灰	精良，石英・雲母
13	〃 〃	(11.6)	7.5	4.1	〃 ， 〃 粗いナデ，口縁外面炭素付着	灰白	細砂㋒
14	〃 〃	12.4	9.7	3.7	〃 ，篦キリ後押圧・丁寧なナデ，内外面炭素付着	黒灰～暗灰	微砂
15	〃 〃	12.1	9.1	3.2	〃 ， 〃 粗いナデ，片口あり	灰白 (底内)黒褐	精良，微砂㋓
16	〃 〃	(13.0)	9.5	3.5	〃 ，底部外面ナデ，口縁外面炭素付着	〃	〃 ，微砂㋑
17	〃 〃	(14.0)	9.5	3.3	〃 ，内面炭付着，底部外面ナデ，口縁内外面炭素付着	〃	〃
18	〃 〃	15.6	9.5	6.8	〃	内暗灰 外青灰	微砂，細砂㋑
19	〃 〃	(15.8)	10.8	5.8	〃 ，底部外面中央篦キリ後ナデ・押圧，高台周辺ナデ	灰	微砂㋒，粗砂㋑
20	〃 〃	—	11.2	(1.5)	〃 ，底部内面ナデ，底部外面篦キリ後ケズリ・横ナデ・ヘラ記号	青灰	細砂㋒
21	〃 〃	—	(10.4)	—	底部内面横ナデ後ナデ，底部外面篦ケズリ後ナデ・墨書あり	暗灰	微白色粒
22	〃 蓋	(15.6)	11.8	1.2	横ナデ，転用硯	内暗青灰 外淡青灰	微砂
23	〃 〃	(19.7)	14.8	1.5	〃 ，天井部外面篦キリ後ナデ，口縁外面自然釉・重ね焼き痕	内青灰 外黒褐	〃 ・石英・長石

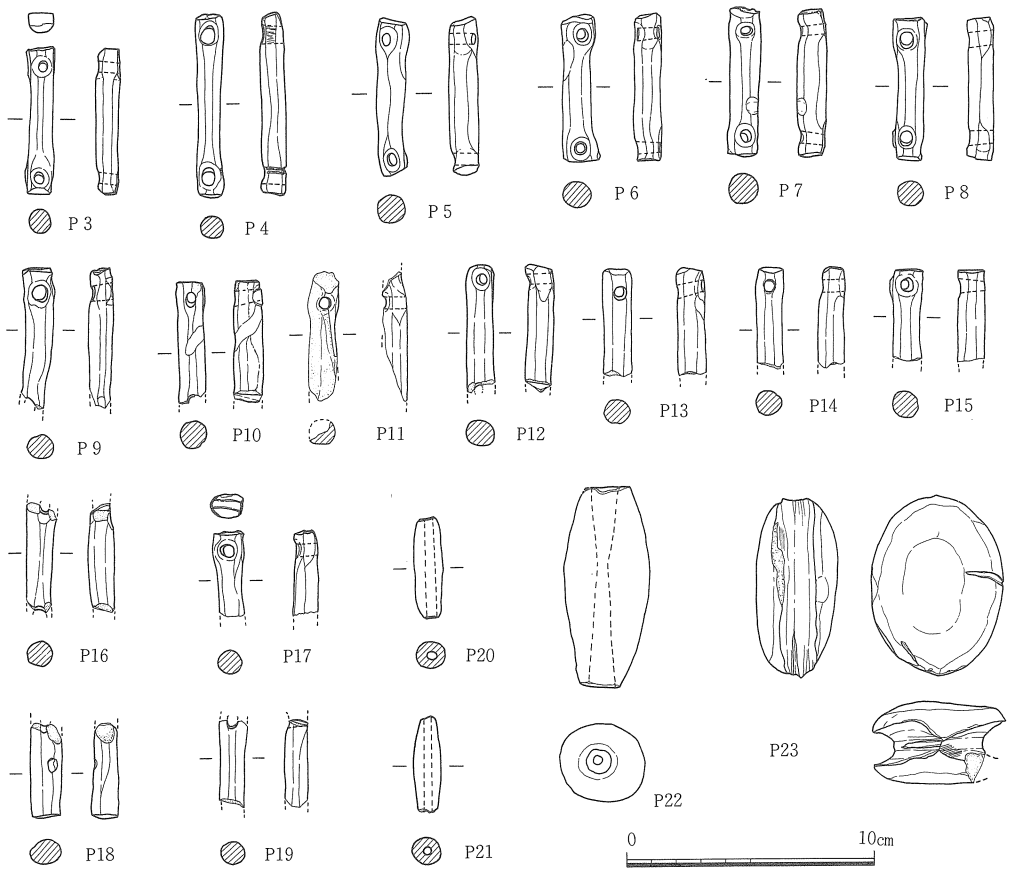
図92 河道一C 出土遺物(1) 縮尺1/4



遺物番号	器種	法量 (cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
24	土師器 甕	(26.6)	—	—	内面ハケ後横ナデ，外面横ナデ・下半は後縦ハケ	暗褐	粗砂㊎
25	〃 〃	(25.9)	—	—	内面下半ナデ上げ・指頭圧痕，外面下半縦ハケ・上半ハケ後ナデ	淡灰茶	〃
26	〃 〃	24.6	—	—	内面上半ハケ・下半押圧，外面ハケ，口縁部横ナデ	茶褐	粗砂
27	〃 〃	—	—	—	〃 ，下半ナデ・押圧，外面横ナデ後ハケ，内外面煤付着	(内)暗灰褐 (外)黒茶褐	微砂㊎
28	〃 〃	—	—	—	内面ハケ・上半は後ナデ，外面ナデ・下半は後ハケ・煤付着	(内)黒褐 (外)茶褐	細砂㊎

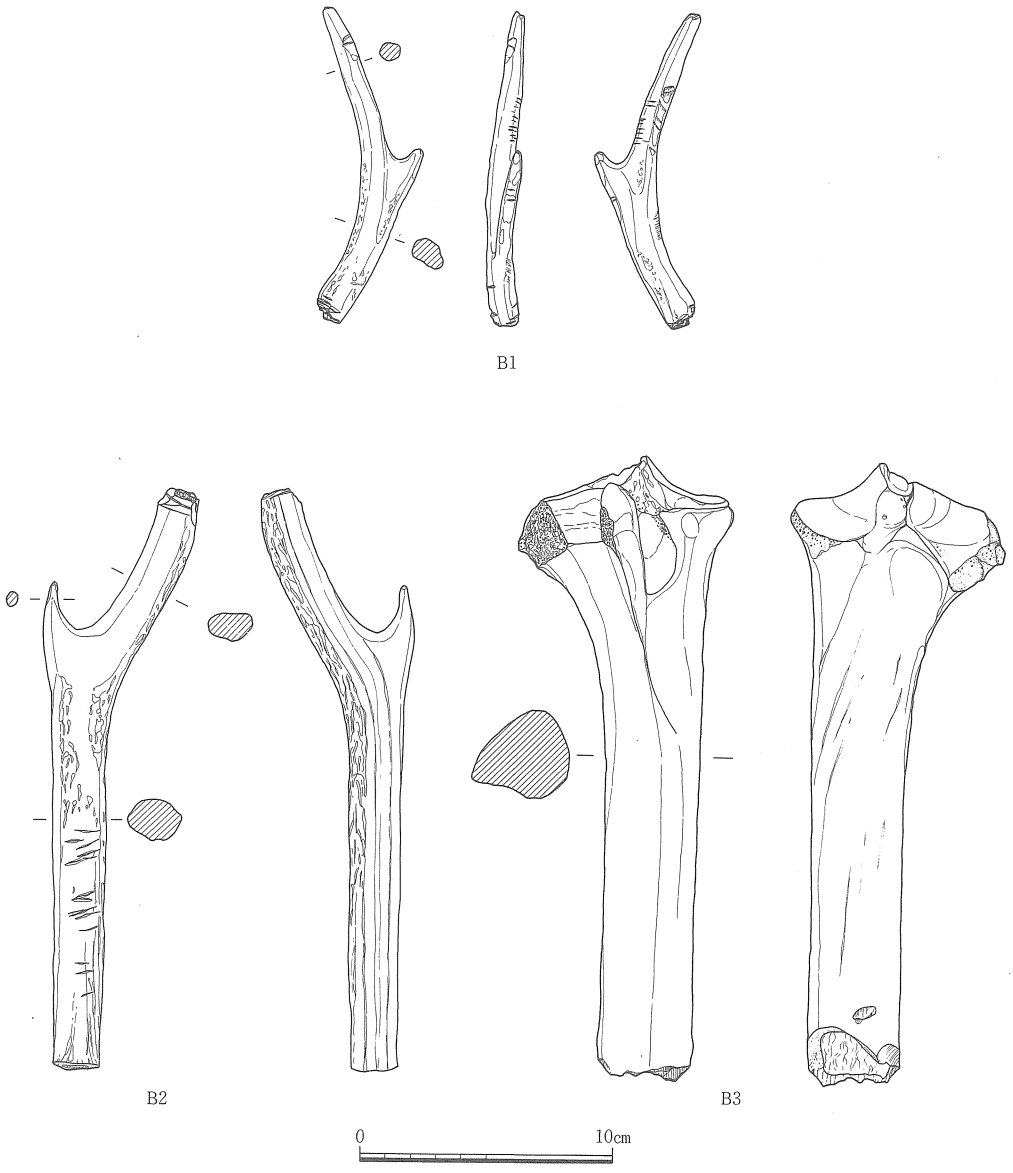
遺物番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石材	出土地点	特徴
S 1	砥石	13.5	6.4	7.6	620	流紋岩	b地区 C-9層	3面の研磨面あり
S 2	叩石	8.9	7.7	3.4	355	砂岩	〃 〃	2ヶ所に敲打痕あり，内1ヶ所で剝離痕あり

図93 河道—C 出土遺物(2) 縮尺1/4・1/3



遺物番号	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	形態・手法の特徴ほか	色調	胎土
P3	土錘	4.9	1.2	0.9	7.0	押圧，上下端ケズリ	淡灰褐	精良
P4	〃	7.4	1.2	0.9	9.0	〃，〃，穿孔部側面に紐状くいこみ	暗灰	微砂㋑
P5	〃	6.2	1.4	1.1	10.0	ナデ，〃，指頭圧痕	灰黒	〃〃
P6	〃	5.9	1.5	1.1	10.0	〃，〃，〃	暗黒灰	精良
P7	〃	6.0	1.3	1.1	11.0	〃，〃，〃	暗灰黒	〃
P8	〃	5.7	1.3	1.1	8.0	〃，指頭圧痕，穿孔裏面ケズリ	暗黒灰	〃
P9	〃	(5.6)	1.2	1.0	6.9	〃，〃，〃	明灰褐	〃
P10	〃	(4.9)	1.1	(1.2)	8.2	上端ケズリ，粘土紐成形時のひねり	暗灰	微砂㋑
P11	〃	(5.2)	(1.2)	(0.9)	3.6	ナデ，指頭圧痕	明茶	精良，微砂若干
P12	〃	(5.1)	1.2	1.1	7.2	指頭圧痕	黒灰	〃，微砂
P13	〃	(4.3)	1.1	1.1	6.6	ナデ，指頭圧痕	淡灰	〃，〃
P14	〃	(4.1)	1.1	1.1	5.4	〃，〃，上端ケズリ	〃	〃，微砂㋑
P15	〃	(3.7)	1.2	1.0	5.9	〃，〃，〃	暗灰～黒灰	〃，〃〃
P16	〃	(4.5)	1.2	1.0	5.6	〃，穿孔裏面ケズリ	暗灰～黒	〃，〃〃
P17	〃	(3.4)	1.2	1.0	4.2	〃，上端面に溝・ケズリ	暗黒～暗茶	〃
P18	〃	(3.8)	1.2	1.0	5.2	〃，下端ケズリ，未穿孔1ケ所	淡灰	〃
P19	〃	(3.5)	1.0	0.9	3.9	〃，穿孔裏面ケズリ	淡黄灰	〃，微砂若干
P20	〃	5.1	1.1	1.1	5.4	摩滅で不明	淡灰	微砂
P21	〃	3.9	1.1	1.1	4.8	ナデ，やや摩滅	暗灰～黒	精良，微砂
P22	〃	8.0	3.5	3.0	78.0	〃，黒斑あり	淡灰褐	細砂
P23	〃	7.3	5.2	3.3	112.0	溝内に成形痕あり	〃	〃

図94　河道―C　出土遺物(3)　縮尺1/3



遺物番号	種　類	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	形　態　の　特　徴
B 1	鹿　角	12.5	1.5	0.9	304	枝角先端部，根元部分に数回打撃した後折り取る，上部に数ヵ所打撃痕あり，先端部欠損
B 2	〃	23.1	2.2	1.7	86	枝角中央部，下端擦り切り，上端打撃の後折り取る，下半部に５～７㎜幅の打撃痕15ヶ所
B 3	馬　・　脛　骨	24.8	3.9	3.5	21	軸部金属器による叩き割り，割れ口上部に加撃痕１ヶ所あり，関節部に摩滅の痕跡あり

図95　河道－C　出土遺物(４)　縮尺１/３

註

1　貝類の同定については，松井章氏に御教示いただき，松島義章氏にも御協力を賜った。

第4章　ま　と　め

1．古代の橋脚遺構について

(1)　橋の復元

今回の調査で，８世紀後半～９世紀に構内南東部に東西方向に流路を取る河道と，それに架かる橋脚を検出した。この時期の橋脚遺構は，県内には現在のところ，他に例がない。ここでは，残存している橋脚の状況から，出来る限り橋の復元を試みたい。

橋脚となる柱は，河道－１に直交して，３本ずつ２列を検出したが，内１列は倒壊した橋脚で西側に造替している。対となる橋脚を検出しておらず，また，河道の南岸も攪乱によって明らかにできなかったので，橋の規模は推定になるが，梁間2.2m以上，桁間12.1m以上となる。３本の橋脚は，河道中央部に残存しており，各柱間は北から1.2m，3.1mである。北端の柱１から北岸までは5.7mあり，各柱間の位置から考えて，その間少なくとも１本は柱があったと想定できよう。柱３と柱５の間を河道中央と捉えて橋脚数を復元すると，５または６本となる。

今回，橋脚以外の橋の部材（橋桁・梁・橋板等）は検出されていないので，橋の上部構造は明確にできない。橋の構造復元には，不十分な資料だが，柱の太さや，造替を行っていることから，かなりの規模をもつ構造物であったことが窺えよう。

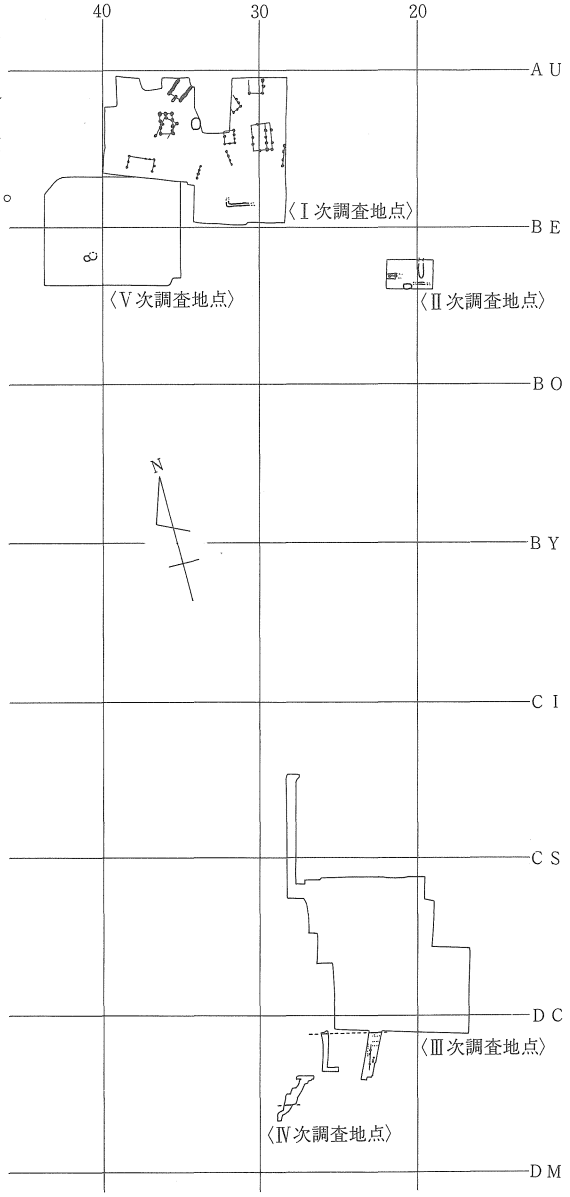


図96　鹿田遺跡古代遺構配置図　縮尺１/2400

(2) 古代の橋と鹿田遺跡

河道－1に架かる橋と同時期の鹿田遺跡の状況を見てみたい。古代の遺構は，弥生時代以来の安定した微高地上に集中しており，9棟の建物群と，4基の井戸が調査されている。建物群は，方向から少なくとも2時期あったことが認められる。出土遺物は，木簡，斎串，墨書土器，転用硯等，「鹿田庄」との関係が窺える資料が出土している(註1)。

鹿田遺跡の中での橋の意味するものは何であろうか。橋は交通量が少なければ板を渡した構造で充分機能するものであるから，堅固な基礎構造をもつ橋は，人通りの多い交通の要所に構築されたことが推定できる。また，造替していることから一時的な橋でなく，主要道の一部として機能したと考えられよう。東西方向に流れる河道－1の運河としての要素や，至近距離にあった当時の海岸線を合わせ考えると，鹿田遺跡の水陸交通の要所としての性格が浮かび上がってくる。

(3) まとめ

鹿田庄は，藤原氏の殿下御領として有名な荘園で，旭川右岸下流の岡山市街地南半に荘域が比定されている。現在の「鹿田町」にある鹿田遺跡での古代の遺構は，荘園形成時期に伴うと考えられ，出土遺物や，建物群の規模，主要道の存在を窺わせる橋脚遺構から，荘園の経営拠点である「荘所」の可能性も想定できよう。いずれにしても，現段階では鹿田庄を比定できる資料が少ない。今後の調査における，確実な資料の増加を待ちたい。　　(藤原)

註

1　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 1988

2．鹿田遺跡における古代末～中世集落について

本調査地点においては古代末～中世の時期における集落を確認した。中心をなす遺構としては，掘立柱建物３棟のほかに柱穴列（掘立柱建物の可能性を含む）６列，井戸２基，溝数条があげられる。掘削面において差が認められず，また，遺物面からも，各遺構からの出土量が非常に少なく，それらの遺物間にも明確な時期差が認められない。いずれも，平安時代末～鎌倉時代前半に含まれる。そのため，集落の構造および変遷を考えるためには，各遺構の方向性・位置などを手がかりにして検討したい。今回の調査においては，特に，掘立柱建物・柱穴列は攪乱による破壊の影響を大きく受けており，いずれも完全な形では検出されていないため，各遺構の性格の判断も非常に困難であった。こうした中で，論を進めるのは問題が大きいことは確かであるが，可能な限り，現状況で想定される範囲について簡単にまとめ，周辺部（鹿田遺跡Ⅰ次調査地点など）と比較検討したい。また，該期の遺構はａ・ｂ両地区で検出されているが，ｂ地区では調査範囲が非常に狭いため，不明瞭な部分が多く，大半の遺構は判断がつきにくいため，ここではａ地区を中心に取り扱いたい。

まず，掘立柱建物（以下，随時建物と称す）の棟方向に注目すると，N-95°-Eを示す建物－１とN-104°-Eを示す建物－３に分けられる。前者をＡ群（N-99～99°-E），後者をＢ群（N-100～107°-E）とする。

Ａ群には建物－１のほかに建物－２(N-93°-E)・柱穴列－１(N-94°30′-E)，溝－７(N-2～7°-E)・溝－８(N-97～100°-E)が含まれる可能性が高い（図97)。

柱穴列－１は建物－１の南約8.8ｍの場所に平行して位置する。柱穴の形状・柱間距離・埋土の状況などは同建物と共通し，遺構の中央部並びに南東部分に攪乱が入っていることを考慮すると，同建物と類似の構造物を形成したことが想定される。一方，柱穴列－１の南東約5.6ｍに位置する建物－２は，建物－１や柱穴列－１が長方形の形状を呈するのに対して，ほぼ正方形を呈していること・柱穴の形状や埋土等の状況に差が認められることなどから，それらとは異なった性格をもつ構造物であった可能性が考えられる。

溝－７は，建物－１・柱穴列－１から東約3.5～4.0ｍの位置を南北に走り，それらの梁方向と平行していることから，それぞれとの強い関連が看取される。南に検出された溝－８については，溝－７ほどはその関連性は明瞭ではない。柱穴列－１から南へ20ｍ，建物－２からは南へ約12ｍに位置する。溝－７を切る形で東西に走っているが，遺物からは溝－７との大きな時期差は確認できない。また，埋土の状態からは両者の関連の強さが窺われる。ところで，本溝では溝内で重複関係が確認されており，下層溝については溝－７からわずかに東へ延びた辺りで消失する。こうした諸状況を考え合わせると，その時期的差は少ないが，溝－７と本溝の下

層溝がＡ群に，そして，本溝の上層溝はＢ群にまで続いていたことも考えられる。本溝の北側肩部には溝－７の西側の肩部まで，柱穴が多数確認されている。柱穴列として直線的に並ぶような状態ではないが，溝の南側にはほとんど検出されていないこと，狭い範囲で溝に沿って検出されたことなどから溝－７・８に伴う柵的な構造物の痕跡と考えられる。また，その中でも，溝－７と８の交わるコーナー部分では周辺一面および柱穴の埋土に多量の炭化物が分布している状態が認められ，その周辺部が同時に焼失した可能性が考えられる。

井戸については，形状が円形であるため，方向によって分類することができない。時期的にも大差ないため，両群に属する可能性がある。しかし，井戸－１については，その位置が柱穴列－１の北辺上の東約１ｍ，そして，溝－７の西約２ｍの地点であることから，Ａ群との関係が強く窺われる。井戸－２についてはどちらの群に属するかは不明であるが，距離的に離れていることや井戸－２周辺に柱穴が多数確認されており，建物等の存在が推定されることなどから，ａ地区の建物群とは別の建物群と結び付く可能性が高く，西方への集落の広がりを予測させる。

以上のことから，Ａ群の状況をまとめてみると，集落の敷地は，東側を溝－７で，南側を溝－８で区切られており，西および北に向かって広がる。南の溝際には不規則な柵列が作られた可能性がある。その敷地内では，やや大形の掘立柱建物－１が北に位置し，その南約8.8ｍの所に建物－１と類似した小形の構造物（柱穴列－１）が棟方向を合わせて，そして，その南西約5.6ｍ，西に４ｍの位置には，それらと若干形の異なる建物－２がやはり棟方向を合わせて建つという状況が想定される。そして，柱穴列－１の西側に

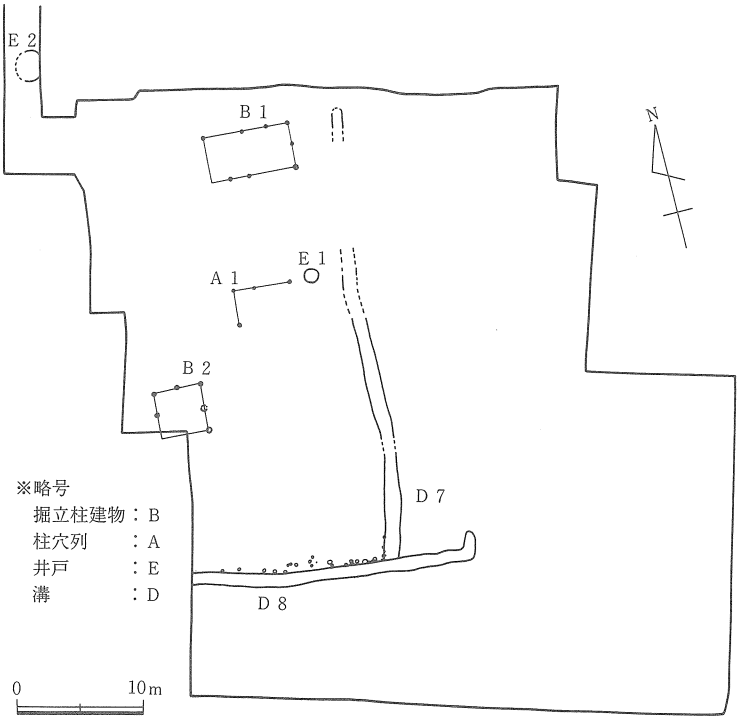


図97　Ａ群遺構配置図　縮尺１/600

は接するように（軒下辺りか）井戸が作られている。

一方，Ｂ群では，掘立柱建物－３(N-104°-E)のほかに，柱穴列－２(N-100°-E)・同－３(N-101°30′-E)・同－４(N-107°-E)・同－５(N-17°20′-E)・同－６(N-21°15′-E)・溝－12(N-15°-E)が含まれるほか，溝－８も可能性が残る。

まず，各遺構の性格から検討したい。

柱穴列－２は柱間距離が180cmを中心に167～191cmと比較的そのばらつきが少ない。柱穴は直線的に整然とした並びを見せており，現状では，敷地を区切る柵的な性格が考えられる。直線距離では建物－３の北西５ｍに位置し，同建物の北約２ｍを東西方向に区切る位置にある。

柱穴列－３はＬ字形を呈す。ただし，北側に攪乱があり，掘立柱建物になるか柵的な柱穴列になるかは不明瞭ではあるが，東側に掘立柱建物－３が近接する（間隔が約２ｍ弱）ことから，後者の可能性を考えている。建物－３からは西辺で約8.7ｍを測る。

柱穴列－４は西および南辺の柱穴の並びは比較的整然としているが，北辺では柱間距離が154cmと250cmを示し，アンバランスであることや東辺の柱穴が直線的に並ばないことから柱穴列として扱っている。しかし，それらの不規則性を許容範囲として捉えるなら，大半の柱間距離のばらつき方も建物－３と類似しており，建物の可能性が考えられる。建物－３から南約10ｍに位置する。

柱穴列－５・６は溝－12にほぼ平行して走る。両者の間隔は約１ｍである。西側が攪乱のため把握できず，建物の可能性も残るが，他の建物はいずれも棟方向を東西に示していることから，現状では，柵的な機能を考えたい。建物－３の東約3.5ｍを画している。また，柱穴列－５と６との間には建て替えが想定されており，

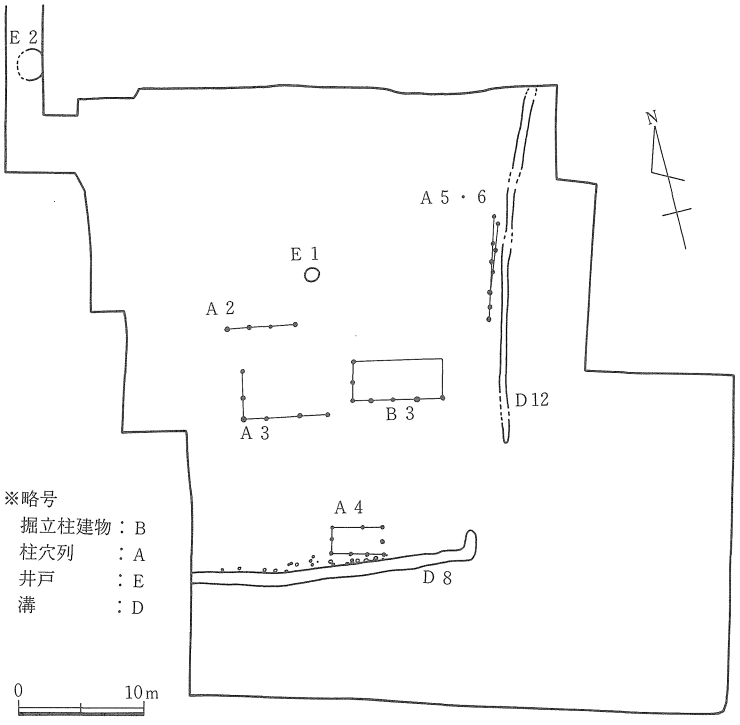


図98　Ｂ群遺構配置図　縮尺１/600

比較的長期間使用するための，しっかりしたものであったと考えられる。

溝－12については掘立柱建物－３の梁方向とほぼ平行して，南北に走っており，両者の間隔は約4.5ｍである。Ａ群での溝－７に対応する。

溝－８については柱穴列－４とその間隔が１ｍ前後を測り，隣接しており，同時並存に疑問がもたれるが，同溝の南に遺構が非常に少ないこと，集落の南を画する溝が他に確認できなかったこと等から上層溝がＡ群に引続いて存在した可能性を考えたい。建物－３からは12.5ｍ南に位置する。

以上のことから，Ｂ群の状況をまとめてみると次のようになる。

まず，敷地は東側を溝－12によって，また，南側を溝－８によってそれぞれ区切られると考えられる。両溝間には南北に約７ｍの間隔が空いており，Ａ群のように完全に区切られてはいない。建物は北に大形の建物－３と南に小形の建物（柱穴列－４）が棟方向を合わせて，約10ｍの間隔をもって配されている。建物－３の周辺には敷地内を区切る柵列が３ヶ所に存在する。全体的にＡ群よりは南東に広がる。

井戸については，いずれも，建物群とはやや離れた位置にある。距離的により近い井戸－１についても柱穴列－２の北にあり，それ以北にある別の建物に付随するものであると考えられる。

このように，Ａ・Ｂ両群を検討したが，いずれも溝によって東側および南側を区切った敷地内に集落が営まれており，西～北への広がりが想定される。また，内部の構造物についても，基本的にはいずれも東西に棟方向を示し，北側に大形の掘立柱建物が，そして，南側に小形の掘立柱建物が平行して配されるという点で共通している。また，井戸についても，そうした建物群に１基が付随すると考えられる。Ａ群では梁方向が真北にごく近い値(N-95°-E)を示すが，Ｂ群になると現在の敷地の制約（構内座標に一致する）にごく近い値(N-104°-E)となっており，軸を東に振ってきていることがわかる。また，柱穴列の増加から敷地内部での区画も進んだ可能性が認められる。

次に，鹿田遺跡内で調査が実施されたⅠ次調査地点の結果(註1)を見てみたい。

Ⅰ次調査地点では古代末～中世に属する遺構として６棟の掘立柱建物・13基の井戸・１列の柱穴列・３条の溝が検出されている。

その中の建物群は規模によって二分され，同時併存するものとしては，遺構の切り合い関係から，大形建物と小形建物１棟づつを認めている。各々を棟方向で組み合わせると，２間×２間の建物10(N-110°-E)と２間×１間の建物12(N-100°-E)，３間×２間の建物11(N-103°-E)と２間×１間の建物13(N-95°-E)となる。本調査区と比較すると斉一性は弱いが棟方向において，Ａ群と後者が，Ｂ群と前者が近い値を示している。

このように，建物に関しては二つの棟方向があり，北に大形建物が1棟・南に小形建物が1棟配される構造は共通している。また，溝に関しても，Ⅰ次調査地点でも西側および南側がそれによって画されており，本地点と同様の敷地区画が認められる。一方，建物の規模を比較してみると，Ⅰ次調査地点では大形のもので約32㎡・約37㎡を測る。本地点の大形建物は約22～24であり，規模の上ではかなりの差が認められる。鹿田遺跡内での高位部に辺り，最も安定した中心的場所に立地するⅠ次調査地点と同遺跡の端部に近い低位部にあたる本調査地点との集落内での差として捉えられる。

周辺遺跡では古代末～中世（鎌倉時代前半）の集落遺跡としてまとまった形で確認・報告されている例は以外と少なく，上東遺跡(註2)・百間川遺跡群(註3)等があげられる。その中で，百間川遺跡群米田遺跡(註4)でも，やはり，建物群の棟方向にN-95～99°-EとN-100～103°-Eが認められ，また，集落内でのセット関係についても同様の構成が確認されている。建物面積の比較では，大形建物は33㎡以上であり，鹿田遺跡Ⅰ次調査地点と近い値を示している。

以上のように，集落構成は前述したような建物群と井戸・溝の関係が一つのパターンとして一般的に存在する可能性が高く，本調査区においても例外ではないことが確認された。また，建物の規模からは周辺遺跡と鹿田遺跡の間に差は認められないが，鹿田遺跡内において，中心部と端部との間に，遺構の粗密および規模等に集落差が存在すること明瞭となり，本調査地点は，鹿田遺跡の古代末～中世にかけての集落の南東端に近い位置にあたり，集落を区切る溝群（溝－7・8・12）から東及び南側についてはこの段階においては依然として居住には不向きな環境であったと考えられる。（山本）

註

1　岡山大学埋蔵文化財調査研究センター「鹿田遺跡Ⅰ」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第3冊 1988

2　岡山県教育委員会「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 1977

3　原尾島遺跡他：岡山県教育委員会「旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査」Ⅴ『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56 1984

4　米田遺跡：岡山県教育委員会「旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査」Ⅶ『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』74 1989

附編　自然科学的分析

1．岡山大学構内遺跡から出土した炭化種子と灰像について

東京大学総合研究資料館　　松谷暁子

鹿田地区・Ⅲ次調査地区（医療技術短期大学部地域）の井戸跡から出土した炭化種子について識別を試みた。また，灰を顕微鏡で観察し，灰像から給源植物を推定した。

試料1　炭化種子　4点　…　井戸1－20層出土（写真1～4）

4点の種子は，いずれも長さ約5㎜，幅3㎜の楕円形をしているが，そのうちの2点は，両面とも表面が縦方向の2本の線でほぼ3等分されているが，左右は対称ではなく，片端が欠けている。この外形はイネの玄米に相当する。2本の線は穀粒を覆っている外穎の竜骨部の跡を示し，片端が欠けているのは，胚のあった部分である。

あとの2点は，一方の面の中央部には上下に走る溝状の凹部があり，その裏面の下端中央部には長楕円形の凹部があり，左右はほぼ対称形である。このような外形はオオムギまたはコムギの粒であることを示している。オオムギとコムギの区分としては，コムギは幅よりも厚さの方が大きい傾向があり，また胚の部分を下にしたとき，最大幅が下の方にある。また側面の輪郭の曲率が小さい。これに対して，オオムギでは，厚さよりも幅のほうが大きく，最大幅は中央部にあり，側面の輪郭の曲率も大きい。また，上下の部分が細くなっているので側面観は紡錘形をしている。胚の形にも差があり，オオムギでは先が細くなり三角に近い形をしていて，幅に比べて高さが高いが，コムギの胚の形は扇形をしていて，高さに比べて幅が広い。

以上の点を考慮するとこの2点は，オオムギと見なされる。

以上の4点の炭化粒について計測した結果は以下のようになった。

	イネ1	イネ2	ムギ1	ムギ2
長さ	5.2	5.0	5.8	5.4
幅	3.0	2.6	3.4	2.7
厚さ	2.3	2.0	2.5	2.2

（単位はミリ）

試料2　灰　1点　…　井戸1－9層出土　（写真5～10）

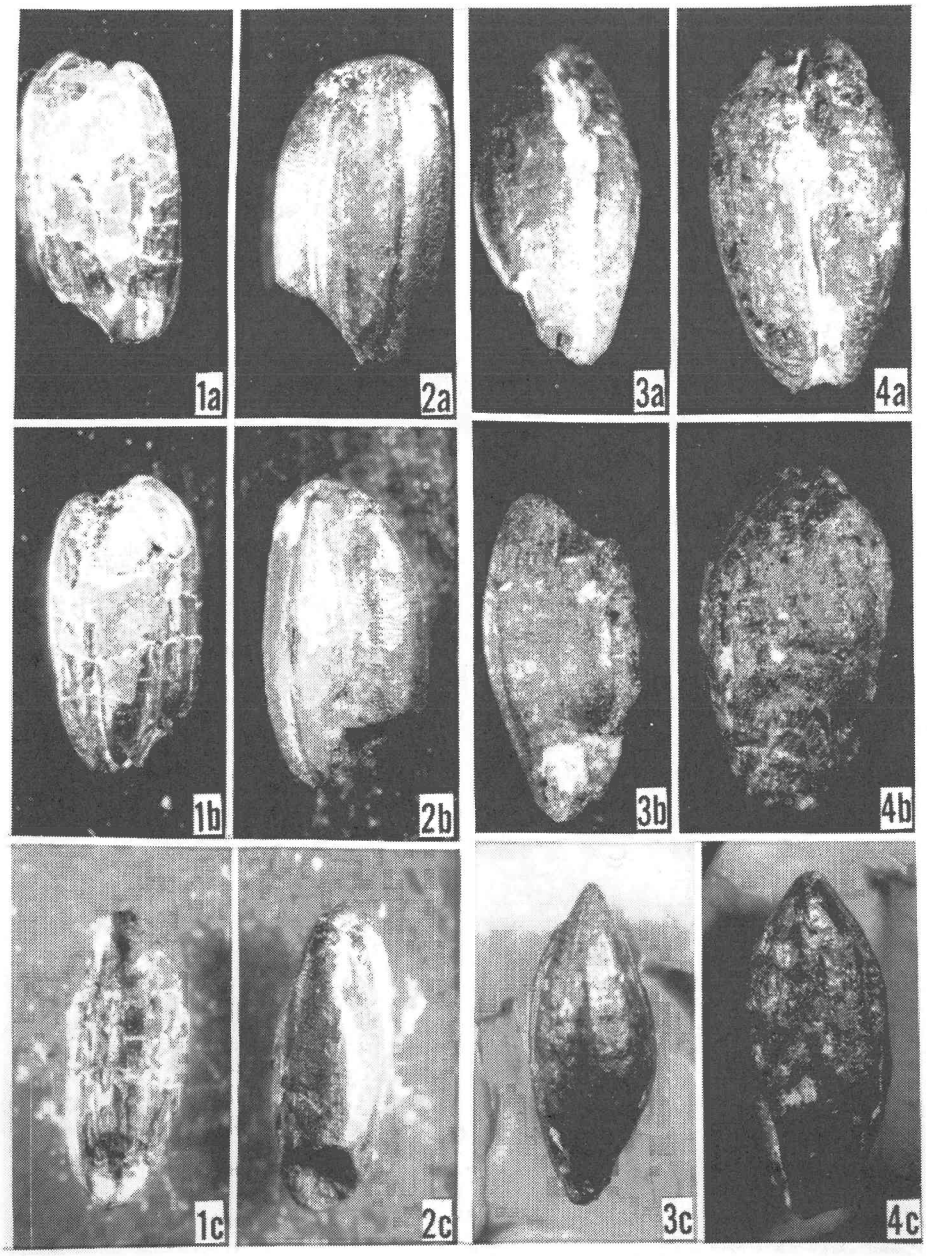
灰は，大部分が固い塊状になっていた（約375ｇ）。粉状の部分をスライドグラスにとり，封入剤（オイキット）で封入し，顕微鏡で観察したところ，イネモミに特有の灰像(註1)およびイネワラに相当する灰像(註2)が観察された。塊の部分の約三分の一をビーカーにとり，水を注いで放置したところ，炭化物が浮かんできたがその量は余り多くはなく，その中にイネ粒らしきものは一粒認められたが，保存が悪くはっきりしなかった。大部分は木片のようである。

従ってこの灰は給源植物は稲籾，稲藁および樹木（樹種の識別は試みていない）と考えられる。

註1　大きな乳突起と細かく波打った細胞壁をもつ長細胞など。

註2　細かい乳頭突起や蝶が羽をひろげた形のイネ属特有のイネ細胞など。

炭化粒4点の実体顕微鏡写真

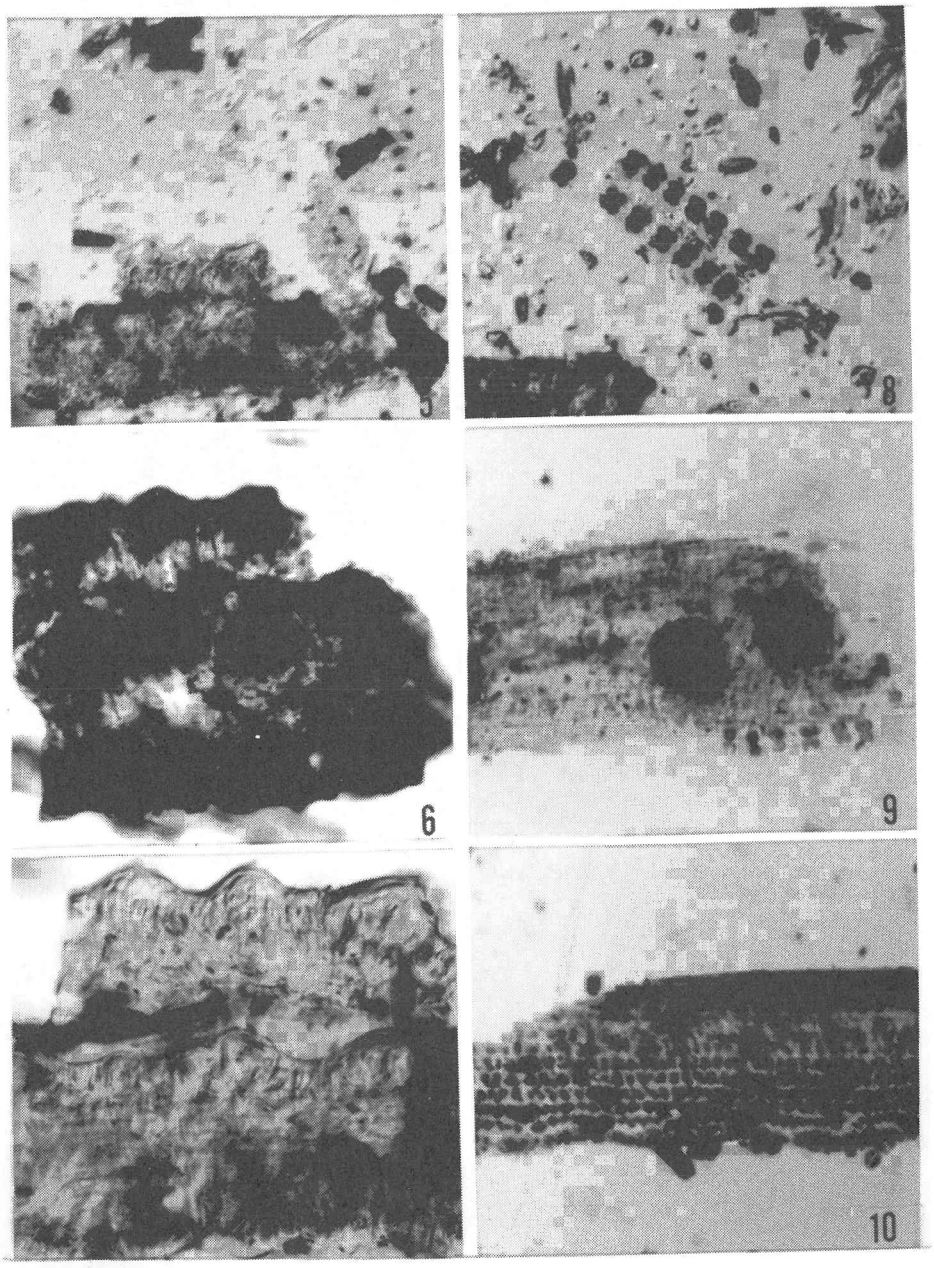


1と2　イネ
- a：側面（幅の面），胚は左下
- b：aの裏面
- c：胚を手前にした面（厚さの面）

3と4　オオムギ
- a：前面（幅の面）
- b：後面（幅の面）
- c：側面（厚さの面）

（写真の倍率はどれも8倍）

灰の顕微鏡写真



5～7：稲籾に相当する灰像，乳頭突起の部分が側面では山形に盛り上がっており，長細胞の細かく波うった細胞壁が認められる。

8～10：稲藁に相当する灰像，蝶が羽をひろげた形のイネ細胞や気孔の灰像が認められる。

（写真の倍率：5は110倍，6～10は220倍）

2．鹿田遺跡（Ⅲ・Ⅳ次調査地点）出土の動物遺存体

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター　　松井　章

(1) 種　名

手元に届けられた動物遺存体は，平安時代の溝（河道－1）から出土したウマ・イヌ・ニホンジカなど50数点であった。破片の大多数はウマの頭蓋骨破片，臼歯エナメル質などである。以下にその概略を述べる。

ウマ　*Equus caballus*

○上顎臼歯および上顎骨破片

（右）　第2・第3・第4前臼歯，第1・第2・第3後臼歯

（左）　第1・第2・第3後臼歯

○下顎臼歯および下顎骨破片

（左）　第2・第3・第4前臼歯

○切歯破片（上下不明）

○後頭骨

（中位）　後頭顆の部分である。主要な計測値を列挙すると以下のとおりである。

後頭顆最大幅は68.8ミリ。大孔(Foramen magnum)の高さ(Basion-Opisthion高)35.2ミリ。大孔の横幅29.3ミリ。

○頬骨　（右）　頬骨弓の部分

○脛骨　（左）　近位～体部

○側頭骨　（右）　眼窩下孔の部分

○膝蓋骨

○膝蓋骨　（右）　骨の表面に多数の凹凸が見られる。イヌが噛んだものの可能性がある。

イヌ　*Canis familiaris*

○椎骨（腰椎）1点

椎間板は前後とも化骨化済みで，成獣である。手元の現生標本と比較すると，伝統的な小形犬の系統に含めてもよいようである。

ニホンジカ　*Cervus nippon*

○鹿角　（右）2点

2点出土している。1点は枝角の中央部で，もう1点は先端部である。いずれも加工の痕跡

がある。中央部の１点は下端を擦り切り，上端を叩き割って折り目を入れた後に折り取っている。枝角の中央部の資料の側面には鋭い刃物で何回も加撃を加えているが目的は不明である。この２点はいずれも骨角器の製作の途上で生じた廃材であった可能性が高いと言えよう。

(2) 観　察

A．ウマの脛骨

関節部分の化骨化は終了しており，骨端線も消失している。骨の表面には，刃物によって肉をそぎ落としたり，筋肉の付着物を切り離したりした傷は見られない。しかし，軸部の割れ口には，斧または鉈で叩き割った痕跡が見られる。それは脛骨の軸部の後位（裏側）にみられる割れ口で，金属器による木器の加工でみられるように，斧，または，鉈の刃部の歯こぼれが骨の面にほそく平行する条痕を多数残していることである。また，割れ口の少し上部には，最初の加撃によって生じたと見られる傷が１箇所見られる。したがって，このウマの後肢は，おそらく胴体から足を切り離された後，脛骨の中央部よりやや下部を，斧，または，鉈で切断され，この部分より上の肉を取り去ったと考えるのが合理的である。この部分は，下肢のなかでも大腿部の筋肉が急激に細くなる部分で，これより下には肉がほとんどつかなくなるところであることからである。従って，このウマも肉を目的に解体された可能性が強い。

B．ウマの形質について

同じ個体のものと思われる上下顎骨および，臼歯が出土している。切歯は１点採集されているが，上下の区別ができない。上下の顎骨の臼歯列長は，ほぼ160ミリを計る。この値は，筆者がこれまでに分析を行った資料の中では城山遺跡（８世紀後半）の上顎骨（159.9ミリ）とほぼ等しく（松井1987），また，林田重幸ら（1974）によって報告された岡山市川入遺跡（６～７世紀）の161ミリに類似する。古代馬のなかでも小さな部類に含められるものであろう。

C．鹿角に見られる加工痕

２点出土していた鹿角の両方とも人為的に両端を折取った痕跡がある。古墳時代以降の骨角器は従来，出土例が少なく，よくわかっていない点が多い。しかし，刀装具，その他の装飾品などに鹿角製品が使われる例があることは従来知られていたことである。本例もそうした鹿角製品の製作の際に原料となった残りの廃材であろう。加工には幾つかの異なる道具が使われていたことが，鹿角上にみられる痕跡からわかる。それは，一番太い部分を切断する場合，軸に直交して，まっすぐに断ち切る方法と，周囲に切れ目を入れてから折り取る方法である。実際に使われた道具はわからないけれども，前者は鋸様のもの，後者は鋭利な刃を持ちながらも鹿角のような硬く，弾力のあるものを叩き割ることのできる刃物である。鹿角の表面に残された刃物の傷は刃先の角度は鋭く，よく切れている。

(3) ま と め

平安時代の溝から出土した動物遺存体にはウマ，イヌ，ニホンジカなどが含まれており，それぞれ人間が利用した後に廃棄したものである。この時代の人々の動物利用の一端が窺えて興味深い。従来，奈良時代の人々は仏教の影響から殺生肉食をしていなかったと一般には考えられてきたが，近年の発掘では，明確な動物の屠殺，調理の痕跡が見られる例が数多く報告され，そうした通念を覆しつつある。本例も，ウマが解体され肉が取れ去られた痕跡が観察でき，また，鹿角製品の製造にかかわる廃材を報告することが出来たし，１点ではあるが遊離したイヌの椎骨も，イヌが食用にされたことを暗示しているだろう。今後とも，こうした動物遺存体の出土例を観察し，古代人の動物利用の実態に迫りたい。

参考文献

林田重幸・鈴木孝司　1987　「川入遺跡出土の馬骨について」『埋蔵文化財発掘調査報告　第２集　山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ（岡山以西）』岡山県教委 PP.354-367。

松井　章　1987　「城山遺跡出土の動物遺存体」『城山（その２）近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』大阪文化財センター PP.227～232。

Driesch, Angela Von 1976 "A guide to the measurement of animal bones from archaeological sites" Peabody meseum Bulletin 1 Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University.

表１　ウマ上下臼歯列計測値（単位はミリ）

	上顎臼歯		下顎臼歯
	左	右	左
前臼歯列長	89.0	－	82.0
後臼歯列長	69.0	69.0	75.0
臼歯列全長	160.0	－	159.0

測定値誤差がかなりあるので，有効数字をミリ単位でとどめた。

計測法は Driesch（1976）による。

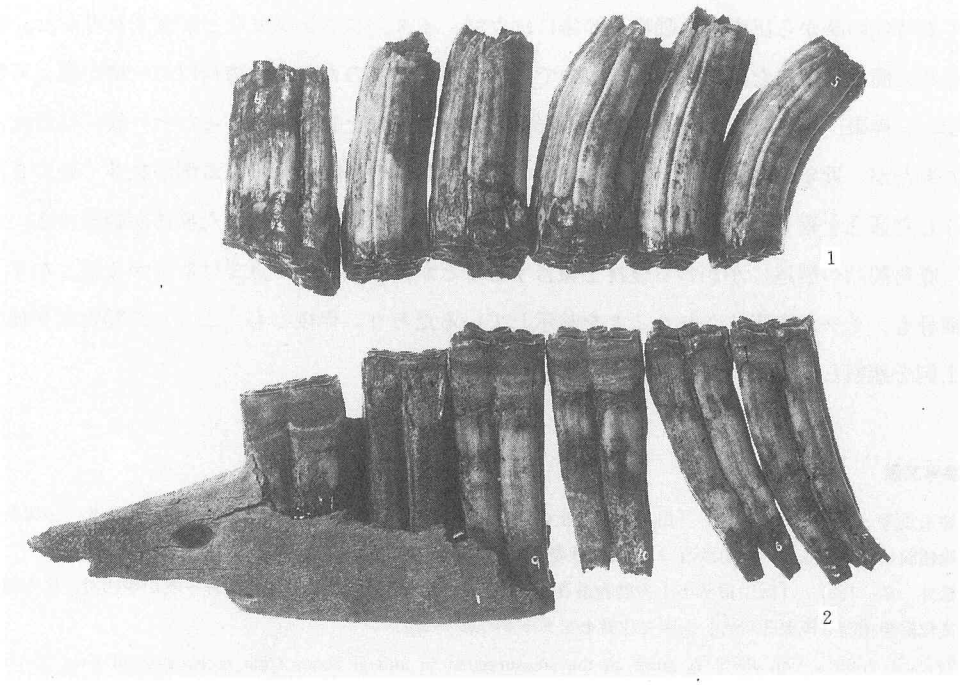
表２　臼歯計測値（長さ／幅，単位はミリ）

	Ｐ２	Ｐ３	Ｐ４	Ｍ１	Ｍ２	Ｍ３
上顎　右	35.0/23.5	27.8/24.5	27.5/25.0	23.5/24.0	24.0/23.5	21.0/20.0
左				23.0/24.5	24.0/23.0	21.5/20.0
下顎　左	29.0/13.5	25.0/13.0	27.5/15.0	27.5/15.0	24.2/15.0	25.0/13.2

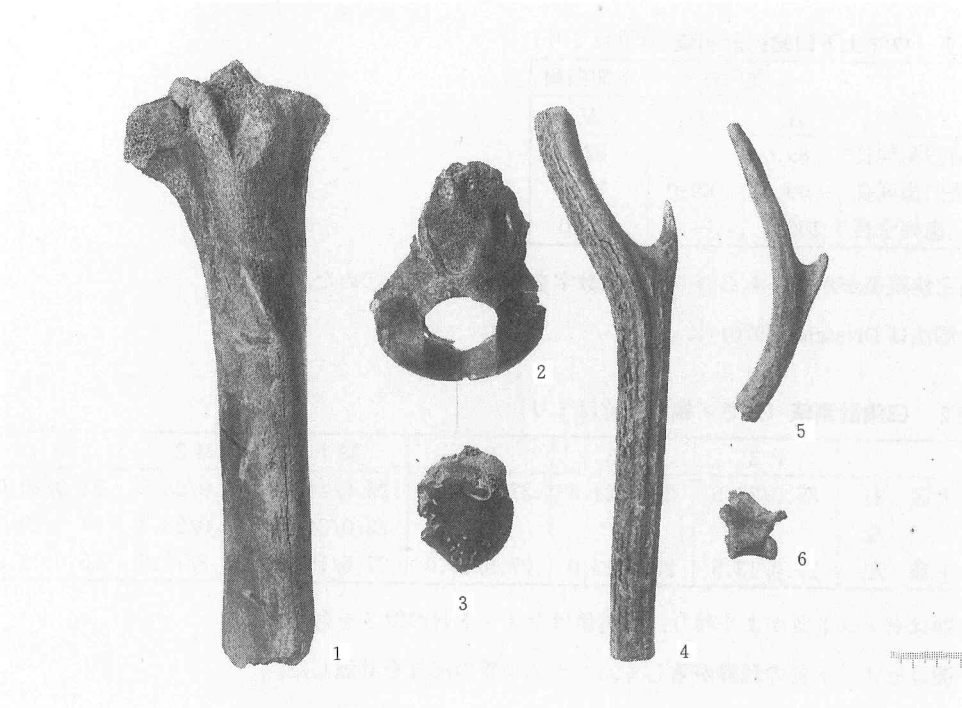
上顎はセメント質がよく残り，計測値はセメント質の厚さを含む。

下顎はセメント質の剝離が著しく，エナメル質の部分を計測した。

注）P2は第２前臼歯
　　M3は第３臼歯を示す。



1．ウマ　上顎臼歯　　2．ウマ　下顎臼歯



1．ウマ　脛骨　　3．ウマ　膝蓋骨　　6．イヌ　椎骨
2．ウマ　後頭骨　　4・5．鹿骨